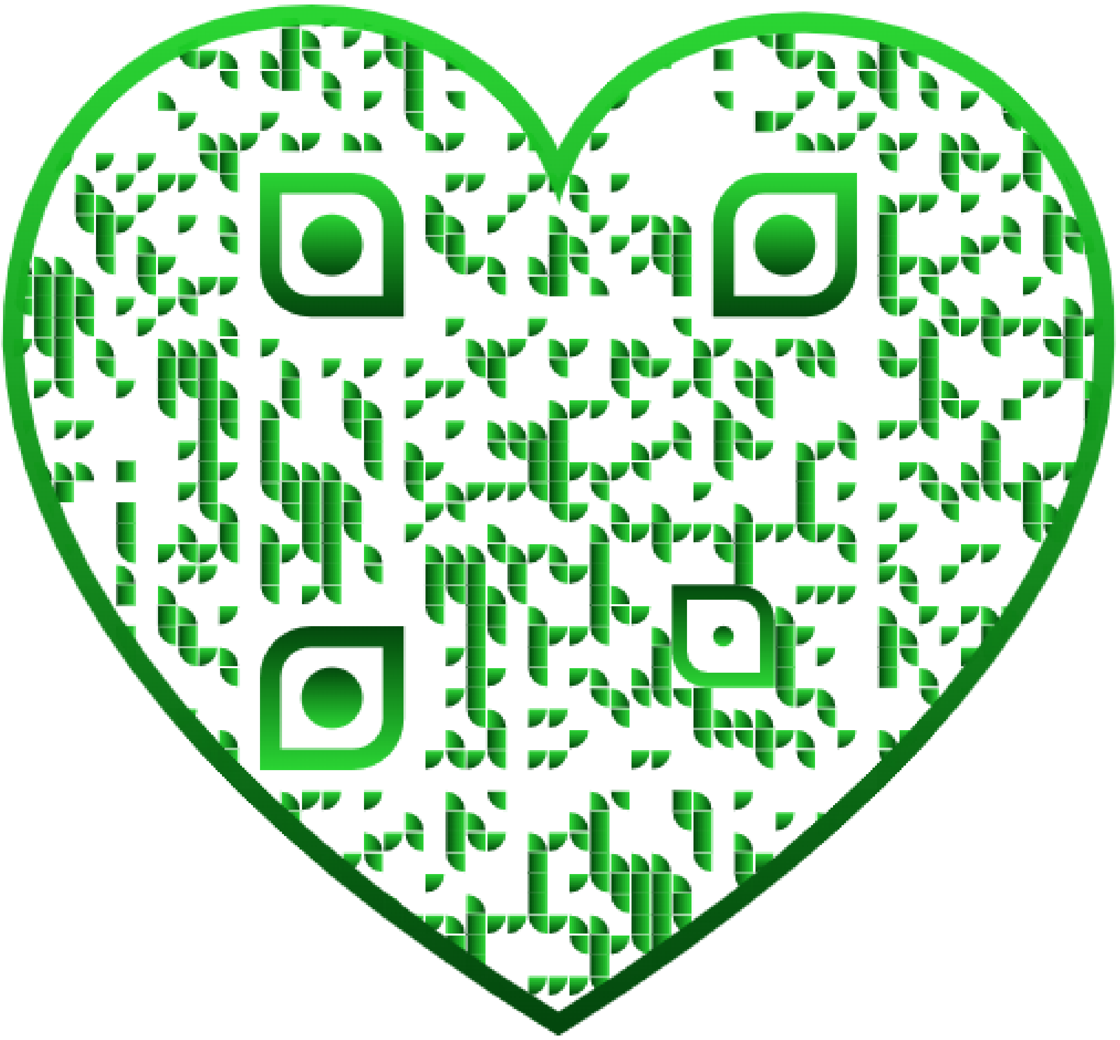
SPECIAL GIFT : NEMOPHILA DOUBLE SIDED POSTER
METAL HAMMER
JA
Vol.8
メタルハマー・ジャパン
第8号
Special Feature
LOUDNESS
40年目の
大和魂
特集
2022年、
来日ライヴは
実現するのか!?
メタリカ
オジー・オズボーン
筋肉少女帯
Damian Hamada's Creatures
ドリーム・シアター
ヴォルビート
ハイルング
メイヘム
PATA
(X JAPAN/Ra:IN)
×
吉田"HALLY"良文
(UNITED)
Blooms... The 1st Impact!
NEMOPHILA
BOOK in BOOK
NEMOPHILA
Blooms... The 1st Impact!
Rittor Music Mook



METAL HAMMER JAPAN

METAL HAMMER JAPAN

[Vol.1]～[Vol.7] 好評発売中！　お求めは全国の書店・webサイトにて

METAL HAMMER JAPAN Vol.1
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **オジー・オズボーン**

○最新インタビュー○ 40 年目の『ブリザード・オブ・オズ～血塗られた英雄伝説』

フィリップ・H・アンセルモ／BABYMETAL／スリップノット／アウトレイジ／デイヴィッド・エレフソン／トリヴィアム／KOЯN／エヴァネッセンス＆ウィズイン・テンプテーション／アモン・アマース／バロネス／LOVEBITES

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.2
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **ドリーム・シアター／ジェイムズ・ラブリエ**

○1992 年のドリーム・シアター○アイアン・メイデンはいかにしてプログレッシブになっていったのか!?

メガデス／キング・ダイアモンド／ミルクル／メシュガー／コード・オレンジ／ディジー・ミズ・リジー／ジューダス・プリースト／サバトン／ブラッド・インカンテンション

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.3
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **from 1985 to 2001**
アイアン・メイデン LIVE の刻印

○ジューダス・プリースト：『ブリティッシュ・スティール』40 周年
○炎立つスラッシュ・メタルの 1986 年

ビリー・シーン／マイケル・ヴァイカート／マイケル・アモット／キコ・ルーレイロ／ラム・オブ・ゴッド／ベリー・トゥモロー／メイク・ゼム・サファー／KOЯN

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.4
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **BABYMETAL**

○ブラック・サバス：『パラノイド』50 年目のドゥーム・ロード

カーカス／アイアン・メイデン／ナパーム・デス／ブリング・ミー・ザ・ホライズン／パワー・トリップ／ゴーストメーン／LOVEBITES／水野真紀

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.5
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **エヴァネッセンス**

○エイミー・リー／ウィル・ハント○女性シンガー飛躍のヒストリー　追悼 **アレキシ・ライホ**

○フィニッシュ・メタルの血統
BAND MAID／ハロウィン／プリティー・レックレス／ゴースト／エイリアン・ウェポンリー／ヘイトブリード／LOVEBITES／聖飢魔Ⅱ／谷原章介

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.6
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **アグレッシブでいこうぜ！ フィリップ・H・アンセルモ／ゲイリー・ホルト**

○ハロウィン／アンディ・デリス×マイケル・キスク

○アイアン・メイデン『キラーズ』の内側○グレイテスト・ソングス TOP100
GOJIRA／聖飢魔Ⅱ／ポール・ギルバート／ラム・オブ・ゴッド／システム・オブ・ア・ダウン／FUTURE FOUNDATION

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.7
価格 1.650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **スリップノット『アイオワ』20 年目の超激**

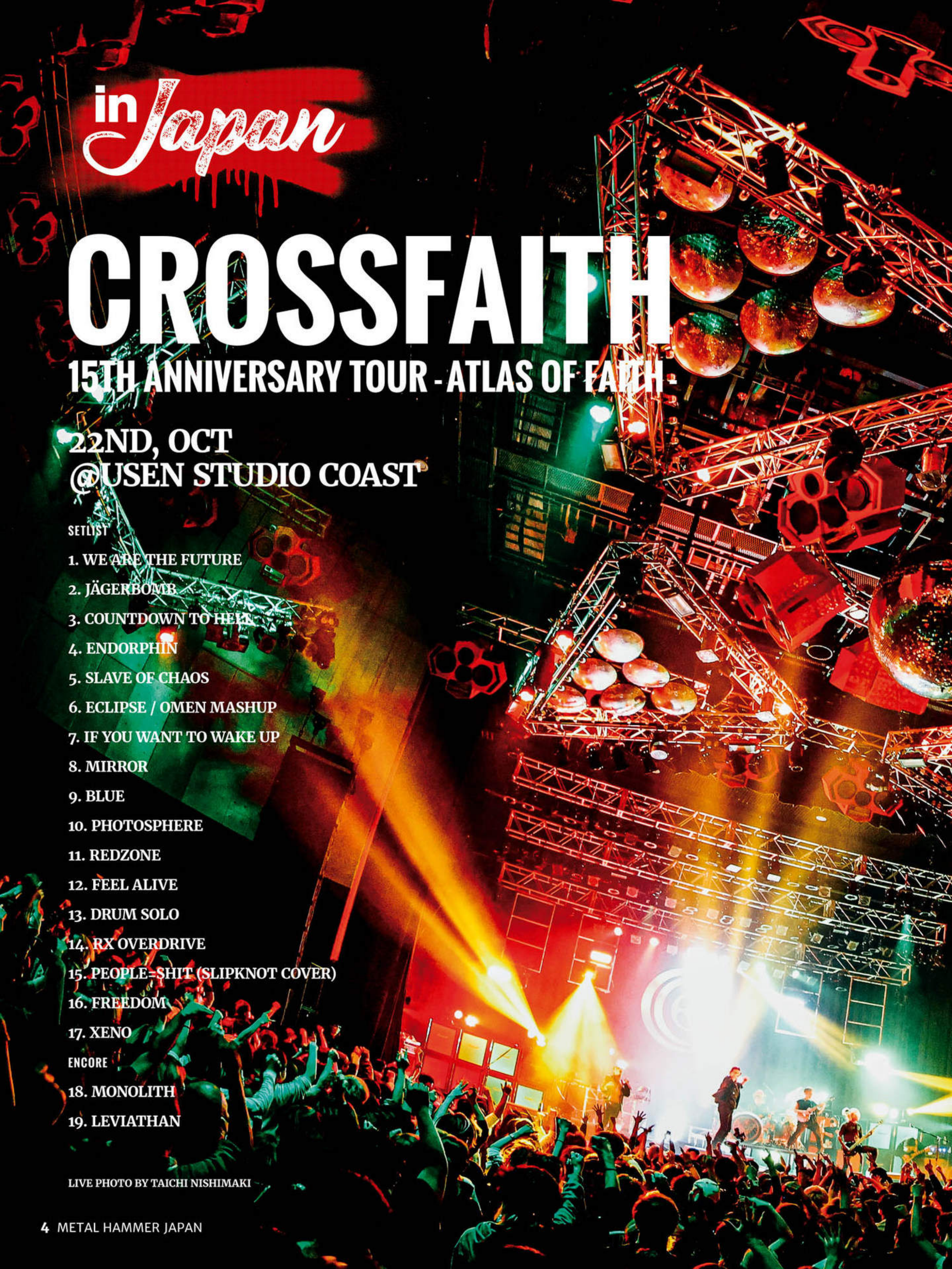
追悼 **ジョーイ・ジョーディソン** ○アイアン・メイデン／ブルース・ディッキンソン×ヤニック・ガーズ○BABYMETAL ～英国が見た彼女たちの 10 年

イングヴェイ・マルムスティーン／聖飢魔Ⅱ／Mary's Blood／人間椅子／オーペス／レイザーラモン RG

...and More!

[Vol.9]は 2022年3月 発売予定！

□編集部からの叫び！
日々のオフィシャル Twitter はこちら
>> @MetalHammer_Jp



in Japan

CROSSFAITH

15TH ANNIVERSARY TOUR - ATLAS OF FAITH -

22ND, OCT @USEN STUDIO COAST

SETLIST

1. WE ARE THE FUTURE
2. JÄGERBOMB
3. COUNTDOWN TO HELL
4. ENDORPHIN
5. SLAVE OF CHAOS
6. ECLIPSE / OMEN MASHUP
7. IF YOU WANT TO WAKE UP
8. MIRROR
9. BLUE
10. PHOTOSPHERE
11. REDZONE
12. FEEL ALIVE
13. DRUM SOLO
14. RX OVERDRIVE
15. PEOPLE=SHIT (SLIPKNOT COVER)
16. FREEDOM
17. XENO

ENCORE

18. MONOLITH
19. LEVIATHAN

LIVE PHOTO BY TAICHI NISHIMAKI

THANK YOU STUDIO COAST!!!

CONT

P.8
LOUDNESS
40年目の大和魂

“世界のラウドネス”が結成40年目にリリースするのは、バンド初となる2枚組アルバム『SUNBUREST～我武者羅』だ。本作には彼らが持つ“大和魂”が込められているといい、世界を舞台に闘ってきたバンドだからこその想いが宿る。今回はバンド内対談、そして高崎のソロ・インタビューから、ラウドネスの今を探る。

◎ Talk about『SUNBURST～我武者羅』
高崎晃×鈴木“あんぱん”政行 P.10
二井原実×山下昌良 P.14
◎ Talk about THE 40 YEARS OF HEAVY METAL
高崎晃が見てきたヘヴィメタルの40年 P.18
◎ Extra Interview
山下昌良×ラウドネス・シャンパン P.24

筋肉少女帯 P.28
大槻ケンヂ×橘高文彦

ヘドバン・チューンを数多く揃え、新作でも様式美ナンバーを披露する筋少は、メタル・バンドと断言してもいいのではないだろうか？　そんな気持ちを胸にオーケン＆橘高を直撃！　この個性と個性の融合こそが、ほかにないヘヴィメタルを生み出す秘訣なのだ。

ヘヴィ・ギタリスト“温故知新”対談！

P.36
PATA
(X JAPAN/Ra:IN)
×
吉田“HALLY”良文
(UNITED)

1980年代後半～90年代、新しい日本の激音シーンを築いてきたのが、当時スラッシュ・サウンドを轟かせていたX（JAPAN）でありUNITEDだった。今回は両バンドのギタリストが久しぶりに激突！　実は同郷・同学年で10代からの友人であるふたり、ドリンク片手に昔話に花を咲かせるのであった。

ダミアン浜田陛下
Damian Hamada's Creatures
P.42

聖飢魔Ⅱの創始者にして、「蝋人形の館」を始めとする悪魔的ヒット曲を手掛けたダミアン浜田陛下が、METAL HAMMER JAPANに降り立つ！　聖飢魔Ⅱ結成前夜、世を忍ぶ仮の若かりし陛下たち世代に向けて、世界のヘヴィメタルはどう伝わっていたのか。メタルの魔力に魅せられた青春の1ページをご堪能あれ。

［MHJ Vol.8］特化！ 主要バンド作品リリース年表
P.26

本号に登場するジャパニーズ・メタル・バンドを中心としたリリース年表だ。“あのバンドがデビューした年、あのバンドの新作は？”……といった活動関係が一目瞭然。各インタビューを読む前にチェックすれば、時代関係もバッチリだ。

ENTS

40YEARS. From UK P.81
追憶のなかのメタリカ

ジェイソン・ニューステッド／ボブ・ロック／ケリー・キング／スコット・イアン／オジー・オズボーン／ロブ・ハルフォード…and more!

1981年に結成されたメタリカも、2021年で活動40周年を迎えた。今回の特集では、彼らと密接に関わってきたバンド仲間、メンバー、クルーの証言から、メタリカというバンドの多面的な魅力を再発見していこう。

P.98 ヘヴィの流儀 #5 VOLBEAT

ニュー・アルバムからも全米チャートNo.1楽曲を生み出したヴォルビート。ヘヴィ・チューンからキラキラのポップスまでをクリエイトするマイケル・ポールセンの作曲方法とは？　そして彼は“ヘヴィである”という意味をどう捉えているのか？

OZZY OSBOURNE

The Documentary From UK P.108

引退宣言が飛び出した『ノー・モア・ティアーズ』から、今年で30年。現在はニュー・アルバムの制作中でもあるオジーを始め、ザック・ワイルド、プロデューサーたちが制作のときを振り返る。名盤の裏側にある、音楽的せめぎ合いと破天荒な応酬の日々。

DREAM THEATER

From UK P.104

最新スタジオ作に続き、“公式ブートレグ”の第5弾も発売したドリーム・シアターから、ジョン・ペトルーシが登場！　彼はいつ、自分のプレイが素晴らしいことに気づいたのか？　立派な髭のメンテ術も大公開！

HEILUNG

From UK P.48

枝角を付けた白装束という、スピリチュアルなルックスに興味を持っていた人も少なくないだろう……ハイルングのマリア・フランツが、自身に向けられたさまざまな質問（もちろん角についても！）に答えてくれたぞ。

BOOK in BOOK P.65

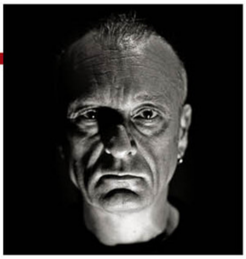
ついに1stアルバムをリリースし、本格的活動を開始するNEMOPHILA。女性バンドならではのカラフルなヴィジュアルと、超攻撃的なサウンドの融合は、これまでの日本のバンドにはなかったものと言えるだろう。今回はmayu & SAKIの言葉を軸に、彼女たちがどのように誕生し、ここに開花したのかをお届けしたい。

NEMOPHILA

付録：両サイド・ポスター

MAYHEM From UK P.52

メイヘムのオリジナル・メンバーであるネクロブッチャーほど、ショッキングな事件を目の前にしたバンドマンはいないのでは？　そんな彼が、人生を切り拓いていく方法を伝授してくれる。やはりユーロニモスはクソ野郎だった！



◎特集 P.57

2022年、来日ライヴは実現するのか!?

2021年もあとひと月を切り、11月には久しぶりとなる海外バンドの日本公演も行なわれた。このまま2022年からは、来日ライヴが続々と開催されるのか？　今回は日英米の識者から各国の現状を報告してもらい、来年以降のライヴ状況をうらなってみたい。

…and more!

STARS' WORDS P.56
NEW NOISE P.116
DISC REVIEWS P.120
METAL NEW GEAR P.125

Special Feature

LOUDNESS

40年目の大和魂

取材：岡見高秀

写真（表紙、P.8～9）
カメラマン：Keiko Tanabe（TAMARUYA）
ヘアメイク：Miyuki Inoue（3 stars smile）
衣装協力：Gaboratory, RUDE GARALLEY

2021年をもって、結成＆デビュー40周年を迎えたラウドネス。コロナ禍による影響を受けつつもさまざまな活動を見せてきた1年だったが、その集大成とも言えるのが、バンド初となる2枚組ニュー・アルバム『SUNBURST～我武者羅』だ。高崎が総指揮を執り、今想うことを注入したという本作は、これまでにないほどの日本語が刻まれ、それでいて今昔のラウドネスを凝縮したかのようなサウンドを聴かせる。

本特集では、そんな同作の根幹であるという“ラウドネス流の大和魂”を、バンド内対談にて掘り下げていきたい。また高崎には、40年間ラウドネスとともに見てきたヘヴィメタル・シーンの潮流についても語ってもらった。40周年を迎え、ますます熱くたぎるラウドネス。彼らが世界を相手に燃やしてきた大和魂が、最新作にて我武者羅に炸裂する！

『SUNBURST～我武者羅』
※12月29日発売

カタナミュージック
初回生産限定盤（2CD＋DVD）
KTNC-1～3
通常盤（2CD）／KTNC-4～5

LIVE INFORMATION!!!

本年末には恒例の2daysライヴが開催！
40th Anniversary Special Live THE SHOW MUST GO ON

● 12月28日（火）／Ampan Night
● 12月29日（水）／Dragon Night

［会場］EX THEATER ROPPONGI
［時間］17:00開場／18:00開演
［問い合わせ］クリエイティブマン：03-3499-6669

Talk About

『SUNBURST～我武者羅』

高崎晃×鈴木“あんぱん”政行

当インタビューは10月内に行なわれたものです。会話中に出てくる菅沼孝三さんへの哀悼の意を、ラウドネス・メンバー、スタッフ、本誌編集部を代表しここに表します。故人のご冥福を心よりお祈りいたします。

ラウドネス・スペシャル・インタビューの一撃目は、最新“40周年”アルバム『SUNBURST～我武者羅』のバンド内対談からだ。まずはラウドネスの歴史そのものと言える高崎晃と、樋口宗孝の魂を引き継ぎ、また脳梗塞という大病から奇蹟の復活を遂げた不死鳥＝鈴木“あんぱん”政行に、本作についてじっくりと語ってもらおう。

メンバーとの練習やライヴは最高のリハビリになるんですよ！（鈴木）

——まずはあんぱんさんの体調面から聞かせてください。先に行なわれたツアーでもスピード・チューンからグルーヴ・ナンバーまで、多くの曲でプレイを聴かせてくれました。曲調によるプレイのしやすさに違いはないと言えそうですか？

鈴木政行　速いツーバスだと体力がどんどん減っていってるみたいで、まだちょっとツラいです。

——手足のコントロールということでは、もうおおよそ大丈夫？

鈴木　うーん、もうちょっとと言うか、今年中に100%に戻るかなという感じですね。

高崎晃　ドラムって指先も使うから、最終コントロールは指先になっちゃうんだよね。そこがもうちょっとだな。

——高崎さんから見ても、かなり回復していると言えますか？

高崎　言葉とかそういうのは回復したと思う……前から日本語がちょっと変だったし（笑）。だからそのへんは全然心配してないんだけど、やっぱり体力的な部分がね。ガタイもデカいし体力勝負的な部分で自信もあったと思うけど、今いきなり踏ん張りすぎてまた再発したらヤバいですから。ただ、この2年くらいの積み重ねで、徐々に戻ってきているなって感じますね。

——今もトレーニングやリハビリは行なっているんですよね？

鈴木　はい、毎日やってます。“個人リハビリ”と“ドラム作業”があって。ドラム作業は体力増加のために、2時間45分ノンストップで曲を叩き続けたり、同じフレーズを何回もやるとか。でも休まないでやると脳が蘇生してこないみたいなので、最近は1週間に2～3回は休んでいます。個人リハビリは毎日ゆっくり2～3時間くらい、ゴムのエキスパンダーをやったり。後遺症で感覚障害があって、あまりやり過ぎると自分の力で骨折することもあって。

——当然ながら、決して楽なリハビリではありませんね。

鈴木　右半身麻痺で体幹が壊れちゃってるので、これもけっこう大変で。個人リハビリでやったあとは、言葉の練習もしています。記憶障害もけっこう戻ってきたんですけど、“読んで見て頭に思い浮かべる”みたいな作業も毎日やっているんです。

高崎　ラウドネスで一番練習していますよ。すごいよね。

鈴木　メンバーとのバンド練習やライヴで音を出すとすごくハッピーになれて、最高のリハビリになるんですよ！

高崎　彼の努力と精神力の強さは本当にスゴいですよ。普通だったら到底ライヴなんてできない。健康体でも大変な曲があるのに、それをひとりでライヴも何回かこなしてきているし。脳梗塞を乗り越えてきた人のお手本ですよね、彼は。

——そのとおりで、同じような状況で頑張っている人への希望の道筋にもなっているのではと感じます。さて、そんなあんぱんさんのパワフルなドラミングも聴ける新作『SUNBURST～我武者羅』がリリースとなります。本作は“40周年アルバム”と銘打たれ、しかもバンド初の2枚組という大ヴォリュームです。

“SUNBURST”は、
もともとは雲の間から射す光であって、
自分たちのなかではバンド・ロゴを
表わしてもいるんです。
――高崎

ライヴはメンバーとお客さん、
スタッフのエネルギーが
全部ごっちゃになって
渦を巻いているんですよ。
――鈴木

高崎　たまたま16曲くらいに膨れあがっていて、それを厳選しよう思ってたんだけど、やってるうちにメンバーから“これ全部やったほうがいい”って言われたんです。到底1枚には収まらないということで、結果的に2枚組になったということですね。

――当然、当コロナ禍での制作作業となりますが、その影響とは？

高崎　移動とか大変な部分はあったけど、逆にコロナ禍で集中できた、という感じもありました。コロナ禍だからこそ生まれた歌詞や曲っていうのが多々あって、“この時代だから日本人も立ち上がって強く生きていかないとダメだよ”というメッセージが含まれているんです。そういう反骨精神が生み出した部分がすごくありますね。

――確かに曲タイトルを見て“いつもと違う気がする”と思った人も多いと思います。

高崎　日本語のタイトルも多いしね。アルバム・タイトルの“SUNBURST”にしても、もともとは雲の間から光が射してそれを指すものであって……いわゆる日章旗、旭日旗を表現している部分で、自分たちのなかではバンドのロゴ・マークを表わしてもいるんです。40周年にふさわしいタイトルだということで、今回は『SUNBURST』にしました。

――タイトルにはそういった意味もあったんですね。さて振り返れば、日本語の歌詞自体は珍しいものではありませんが、やはりメッセージ性の高い内容だと、日本語のほうが届きやすいですよね。その点からは、より日本人に向けてしっかり聴いてもらいたいという意図があったのかなと。

高崎　40周年という節目を迎えて、自分たちでプロデュースしていた『DISILLUSION～撃剣霊化』の延長線上にあるような作品になったかなと。今のラウドネスにとっては、40年間やり続けてきた自分がプロ

デュースするのが一番いいのかなと思って、今回はプロデュースも自分から申し出て作り上げた作品ですね。

――こういった時世もあり、やはり曲作りの基本作業はおひとりで？

高崎　今回は自分でも、サウンド面においてはある程度完成ラインまで近づけて、それからメンバーに聴いてもらって作っていった曲が多いですね。メロディ・ラインと歌詞はそのあとからです。まぁ歌詞を書く少し前からコロナ禍に入っていったんですけど。

スラッシュ寄りのリフなんてこれは絶対あんぱんだなと。（高崎）

――では、2019年には作曲作業も進めていたと。

高崎　曲によっては5年前から作っていた曲もありました。さらに「輝ける80's」、「エメラルドの海」、「天国の扉」は、樋口さんが叩いてたときのデモから掘り起こしたリフやリズムを再構築していった曲で。

――おぉ、非常に80'sなフレーズだなと感じつつ、温故知新の気持ちで作ったのかと思いきや、本当に80年代から受け継がれた曲だったとは！　リフってしっかり時代を内包するものなんですね。

高崎　今だったらこういうリフは書けないと思います。あんぱんの耳にはどう感じられたんだろう？

鈴木　僕は「エメラルドの海」のリフと展開がすごく好きで。80年代っぽいんだけど新しい感じもして、古いとは思わないんですよね。あとは晃さんの、竜（西田竜一）さんと僕とのチョイス（※曲によるドラムの振分け）がすごくいいというか。個性というかグルーヴというか、曲にすごく合っている。あれ、質問と答え合ってます（笑）？

高崎　ふたりの個性はよく理解しているんで、それはすぐにわかりましたね。ハードめな曲は大体あんぱんが叩いているかな。「大和魂」であったり「OEOEO」、あとは「STAND OR FALL」……このへんのヘヴィな曲もあんぱん。「Fire in the Sky」はちょっとスラッシュ寄りのリフなんで、これは絶対あんぱんだなと思いましたね。

鈴木　晃さんに“この曲どうだ？”って言われて、“じゃあ期待してるで”って感じで。うまくできないところも、うまい具合に手綱を引いてくれるみたいな。

――レコーディングでも、うまくコントロールをしてくれるんですね。

鈴木　僕は「大和魂」が一番好きで“これ、やらせてください！”と言ったんですけど、うまくいかなくて。そしたら“竜ちゃんともやってみようか”となり、それを聴かせるんですよ。だから“お、負けてらんない”

みたいな。そんな感じでどの曲からもエネルギーをもらいました。

高崎　「大和魂」はほとんどあんぱんが叩いているんだけど、変拍子のところは竜ちゃんに叩いてもらったりもしているんですよ。1曲のなかにドラマーがふたりいて……ふたりの許可も得ずになんだけど……結果的にはすごく良かったなと思います。

――当インタビューのペアということで言えば、「The NAKIGARA」はおふたりでの作曲となります。

高崎　ベーシックなアイディアは自分が出したんだけど、彼は脳梗塞を乗り越えて復活してきた人なので、“そういう想いを歌詞に書いてみないか？”って。それでメロディも考えていったんですよね。

鈴木　でも最初に考えた歌詞は却下されちゃって（笑）。

高崎　ちょっとストレートすぎて怖かったんですよ、いきなり“Die! Die!”って（苦笑）。

鈴木　最初は“Over Kill”っていうタイトルにしていて、“俺の音で世界を皆殺しに”みたいな。

――頑張って復活した人のセリフじゃないですね（笑）。

高崎　“何でそっち行くかな”みたいな。これまでもあんぱんがすごくいい曲を書くのは知っていたので、今回も何曲か出してもらおうかなと思ったんです。

鈴木　ただ曲を作ろうと思ったらまだ麻痺があって、ピックが握れなかったのがすごくショックで……ただ頑張って歌詞とアレンジを。

高崎　まぁ僕も最近のライヴで、たまにピックが握れなくなるときがあるんですよ。まず左手がギューとつってネックが握れなくなり、そうこうするうちに右手までつるようになって“おぉ、ライヴ続行できへんで”みたいな（笑）。だから曲と曲の間にできるだけストレッチをするようにしています。よく調べたら水分や塩分、ミネラル不足らしくて、その辺に気をつけていたら大丈夫になってきたんですけど。

――「The NAKIGARA」はドロップDチューニングで、ほかに「Rising Sun」、「仮想現実」をCまで落としています。レギュラー・チューニングの曲がほとんどのなか、こういった曲は最初からダウン・チューニングの曲を入れようと考えて作ったものなんでしょうか？

高崎　いろいろな時代のラウドネスの持ち味を生かしたくて、特に2000～2010年頃のサウンドも表現したいなと思っていたんですね。

――ただ、レギュラー・チューニングだったとしても、例えば「大和魂」は二井原さんの悲哀のある歌唱と相まって、非常に重々しい感じが出ていると感じました。ヘヴィさってチューニングだけじゃないなと。

高崎　本当にそうだと思います。ただ単にチューニングを下げた分ヘヴィになるかといったらイコールじゃない。キャビネットから聴こえてくるサウンドのどのあたりの帯域を感じながら弾いているのかによって、

お客さんへの伝わり方も変わる。それはアルバムにおいてもそうだしね。だからモニターってものすごく大事なんですよ。自分が出しているキャビネットの音とモニターから返ってくる音が全然違うと、うまくコントロールができなくなるから。

鈴木　ドラムから聴いていても、晃さんの音はスゴいですからね。脊髄がブルブル震えます。

高崎　樋口さんが倒れたとき、ピンチヒッターで菅沼孝三さんが来てくれて。リハーサルで僕のマーシャルの横にいたときに“初めて自分の音が聴こえなくなった”って言ってましたから（笑）。

自然体というか、それこそレイジーの頃の持ち味が出ているんじゃないかな。（高崎）

――ヘヴィなギターが轟く曲とは別に、「The Sanzu River」も耳に残ります。高崎さん歌唱による楽曲ですが、これはどういった経緯でこの形になったんでしょうか？

高崎　アイディアは５年前くらいにはあって、最初は英語だったんですけど、曲調であったり歌唱がすごく気に入っていたので、自分で歌おうと思ったんです。なんだかんだ言って、僕たちも還暦を超えてきて、どっちかと言ったらゴールが近づいてるんで（笑）。そういう想いを歌った曲なんですよね。

――タイトルや歌詞も含めて、ある意味では非常に高崎さんらしい曲なのかなとも思います。ギター・フレーズという点では、「Crazy World」のコーラスの進行やアルペジオもすごく高崎さんらしい。

高崎　そうだと思います。なにか自然体の自分というか、それこそレイジーの頃からの持ち味が出ているんじゃないかな。歌詞には、近年日本人がよく目にするようになったフレーズばかりを書き溜めておいて、それをふんだんに使って言葉遊びをしてみました。今の世の中に対する皮肉であったりメッセージを込めている曲です。

――歌詞というところで言うと、ところどころの楽曲に、過去作品のタイトルがキーワードとして入っているのも特徴的です。

高崎　今はライヴで大声を出せないけど、そういうのがすべて解放されたときに、お客さんと一緒に大合唱できたらいいなと思うし、海外のお客さんが言うようになったらスゴいなと思って。

――日本語の歌詞をそのまま歌っている海外のファンもいますから、これらが合唱されたら圧巻ですね。

高崎　近年はヨーロッパの大きなフェスとかも経験してきたので、ほかにも「All will be Fine with You」イントロのギター・メロディを大観衆が一緒に歌ってくれたら素晴らしいなと思いますね。そういう風景を想像しながら書きました。

――海外ではすでにこれまでと近い形でライヴが行なわれていたりもしますので、早く日本でも安全かつ以前のようにライヴが楽しめるようになるといいですよね。

高崎　ようやく“立ち上がってもいい”という環境になってきたんでね。ルールを守っていけばライヴ会場は安全だということも証明できたし、満員電車よりも全然安全だと思うし。ラウドネスはそういうのも先頭を切って早めに活動してたけど、今となってはエンターテインメント界を引っ張っていくうえでも良かったんじゃないかなと思います。

――そして、もちろん海外公演にも出ていけるようになれば。

高崎　そうですね。日本語だからといって日本での活動だけに留めるつもりはまるっきりないし、「In The Mirror」とかは海外でも日本語でやり続けているけど、ノリが落ちるわけでもないんでね。むしろ、日本語でもいけるって確信したうえでの今回の作品なので。

鈴木　ライヴはメンバーとお客さん、スタッフのエネルギーが全部ごっちゃになって渦を巻いている感じなんですよ。そういうライヴのあとは本当に回復が早いんで自分でもビックリで。

高崎　個人練習よりも、お客さんの前でやることが最高のリハビリになるのかな。

鈴木　お客さんは言葉を出していないんだけど、すごいパワーが来るんですよね。よく見るとみんな表情がいいんです……うまく言えないんですけど、幸せです。

高崎　お客さんの表情まで見てるって余裕あるな～。それだったら、次のアルバムではもっと大変な曲を作らなくちゃダメだな（笑）。

――ちなみに次作となりますと、オリジナル・アルバム形態としては30枚目という、また別の節目・記念もついてきます。

高崎　30枚目？　むっちゃ出してるよね、すごいな（笑）。もうシカゴみたいにタイトルなしの数字だけになっていったりして。

――とは言え、まずは『SUNBURST～我武者羅』を多くの日本人に聴いてもらいたいですね！

鈴木　全部聴くと、明日への活力が湧いてくるから元気になる。一番最初のラウドネスとの出会いから、樋口さんが亡くなったり、そして今倒れて支えてもらってるとか全部ひっくるめて、ラウドネスは命の源だと自分は思っています。だから僕もこのアルバムに全部のエネルギーを入れました。

高崎　トータルで言えば“大和魂”……古来からの日本特有の魂というキーワードが出てきます。自分たちが思う大和魂というのは、“大事な物、愛する者に対して捨て身覚悟で守っていける強い魂”だと思うんです。その魂が今回のアルバムでは全体に宿っていると思うので、そのあたりも感じながら聴いてほしいな！

Interview-02

Talk About
『SUNBURST～我武者羅』

二井原実×山下昌良

バンド内対談、続いては二井原実と山下昌良の登場だ。本作は"高崎晃の40年"を詰め込んだ楽曲群がそろったわけだが、それを具現化できたのは、二井原と山下という絶対的信頼を持つミュージシャンがいたからこそ。高崎の想いを受け取った彼らは、本作をどのように形作っていったのだろうか。

いくら素振りをしていても試合に出ないとヒットは出ない。(二井原)

――先のツアーではまだ客席での声出しはできませんでしたが、それでも盛り上がっているのはステージ上にも伝わってくるものですよね？

二井原実　もちろん。声を出さなくても目の輝きで"あぁ、むっちゃ盛り上がってるわ"ってわかります。

――またステージ内の話として、あんぱんさんの回復も目を見張るものがありました。

山下昌良　うん、回復してますよね。前の100%にはまだ戻っていないけど、合わせるたびに良くはなっていますよ。

――ご本人としても、ライヴが何よりのリハビリでパワーをもらえると言ってくれましたが、それってミュージシャン全員にも言えることなのでは？

二井原　そうですよ、ライヴは経験値がモノを言うんです。いくら素振りをしていても、試合に出ないとヒットは出ない。やっぱりミュージシャンはステージをこなさないと厳しいと思いますよね。

――そうですよね。ちなみに非常に余談でもあるのですが……9月のライヴを観て"山下さんの腕周りがゴツくなってきた"という評判があちこちから聞こえてきて……。

山下　僕らも高齢になってきているんで、体は大事にせなあかんなと。二井原さんは以前から山登ったりプール行ったりしてるし、高崎さんもウォーキングしたり家にジムのマシンを置いていたりで。俺も何かやらなとジムに通い出したら凝り性なもんで、どんどんそっちの方向にいってしまって。

二井原　もうすごく本格的ですよ。

山下　はじめは腹を締めようかと行ったんだけど、ガタイのいいオッサンがバーベル持ってるじゃないですか。俺もやってみようと思っているうちに負けん気が出てきて、そうするとやめられなくなる（笑）。筋肉がついて基礎体温が1℃くらい上がったから、それこそ免疫力がすごいついて、おかげでこの2年、風邪もひいてないもん。これはヨーロッパやアメリカのヘヴィなツアーでも抑えられる体を作るっていうのが一番のメインやね。

――さて、先のライヴでも披露している新曲を擁するニュー・アルバム『SUNBURST～我武者羅』がリリースとなります。高崎さんプロデュースの2枚組40周年アルバムと特別感も高く。

山下　今までと全然違うのは、高崎さんが歌詞も書いたってことだね。曲数も、これまでは"14曲くらい作って12曲で完成"みたいな感じなんだけど、今回の16曲は全部削られへんなって話になって。いつもは二井原さんが歌詞を書いているんだけど、"16曲は大変やろ、俺も考えてみようかな"って日本語でボンボン書いてきて。

二井原　すごいのよ、ある日を境に1日に3曲分くらい歌詞が送られてきて。

山下　1曲目のときは"えらいストレートやな"、2曲目のときは"え、これ大丈夫？"、3曲目が来たときには"高崎さん今酔うてるかな？"って（笑）。夜中の2時頃にメールが届くから。

――ハハハ、それはスゴいですね！

二井原　モチベーションが高くなって熱量がすごいんで。英語の歌詞も8割くらいで

初めてアメリカに行ったとき、
すべてに圧倒されて。
捨て身の魂でいかんと
勝てないと思ったよ。
――山下

逆に向こうに行ってから、
日本が見えてきた。
“あ、俺ら日本人やな”って、
いろいろな場面で痛感する。
――二井原

きあがって歌入れも始まっていたんだけど、本人がこれだけ日本語に力を入れているから、まずは日本語をやろうと。

――おふたりにとっても、日本語の歌詞というのは予想外だったんですね。しかも、かなりメッセージ性が高く。

二井原　驚いたけど、それこそバンドを立ち上げた人間が高崎晃であって、その人の40年の想いにとことんつき合おうと頭を切り替えました。だからタッカンが作ろうとしている歌詞そのものを、僕の声で具現化する。誤解は承知で言うけども、ある意味では“高崎晃のソロ・アルバムに二井原実が参加した”くらいの割り切り方で歌ってます。これ悪い意味じゃなくて。

山下　僕は最初メールで歌詞だけ見たときに“この曲にこの歌詞は合うんかな？”ってちょっと不安やったけど、ニイちゃんの歌を聴いたら、“あ、これって『DISILLUSION～』の次のアルバムのイメージだ”と感じたというか。次の『THUNDER IN THE EAST』から英語になったわけだから、俺はそっちのイメージでアリやなと。

――まさにおっしゃるとおりで、二井原さんが歌うことで、いわゆる“日本語ロックの曲”とは違うラウドネスらしいヘヴィメタルの歌唱なんだけど、歌詞の内容はしっかり伝わるというか。

二井原　ただ、なかなか難しくて、歌入れだけでも1年くらいやっていたかな。ここだけの話、つい数週間前まで歌入れをしていたんですよ。“ごめん、今さら悪いんだけど1曲直してくれへんか？”って恐怖のメールが（笑）。

――あ、そんなに（笑）。

二井原　デモ・テープは本人が歌っているんですね。それを聴いて“こんな感じか、OK”って自分流に消化して歌うじゃないですか。それがねダメなんですよ、デモのとおりに歌ってくれと。それからはちょっとしたフレーズやニュアンスもがっちり聴いて……そういうのは初めてだったからけっこう時間はかかりましたね。

山下　日本語だから伝わりやすいじゃないですか。だから今までだったらそこまでは言わへんなっていう語尾の伸ばし方とか感情にも相当こだわって。

どうせやんねやったら マッチョなベース・ソロにしようと。（山下）

――高崎節が炸裂する新曲群ですが、なかには非常に懐かしさを感じる曲もあります。それもそのはず、「輝ける80's」や「エメラルドの海」は、山下さんの昔のストックから再構築した曲だそうですね。

山下　今、80年代を意識して作っても、そんなリフは絶対出てきませんよね。80年代にアメリカに住んでその情景を見て作った

曲だからそのリフになる。このリフを聴いたとき、毎日レインボーでパーティして、一緒にいたバンドとの風景を思い出す……そういう曲になっていると思いますね。

――本物の80年代モノだからこそ醸し出せる雰囲気ということですよね。

山下　まさに80年代の曲です。それをやり直しただけだから。

二井原　僕が抜けて、マイク・ヴェセーラがいた頃に作った曲だよね？

山下　ニイちゃんがおったときのもあるよ。

二井原　え、そうなの？　じゃ、なんでこの曲レコーディングで使わへんかったんやろ。プロデューサーがいたからか？　まぁ、僕が初めてこれらのアイディアを聴いたときは、“これは高崎さん逆に嫌がるかな”と思って。

山下　同じく。

二井原　でもスゴくいいから、実を言うとマネージャーに“なんとか高崎さん説得してこの曲やろうよ”って裏工作してたんだけど、そんな心配もなくやることになって。

――なるほど。逆に現代的ラウドネスさがあり、かつインパクト大なのが「大和魂」です。ベース的にも、ここまでソロを弾いているのは初めてなのでは？

二井原　ほんまやな。

山下　高崎さんが“ここ、たまにはベース・ソロやれ”って言ってきたんですよ。僕は“えぇー！”って。どうせやんねやったら、ジムで鍛えまくってるマッチョなベース・ソロにしようと思ったから（笑）。往復ビンタでバシバシみたいな、ひとつの音をゴリ押しして“筋肉で弾いてます”みたいなソロを作ろうと思ったからこうなったんですよね。

――山下さんの個性という点では、高崎さん曲が並ぶなか「STAND OR FALL」を作曲しています。

山下　「BLACK WALL」とか「HEAVY CHAINS」もそうなんだけど、高崎さんのデモ・テープにないタイプの曲を作るんだよね。アイアン・メイデンとかベースから作るバンドはシャッフルが多いじゃないですか。高崎さんはそういうのをあまり作ってこないから、あったリフを完成させようと思って。

――ボレロ的リズムにストリングスも入ってきて、これも往年感がありますよね。

山下　往年感ありすぎるよね（笑）。

二井原　もう“オーオーオー”って大合唱やもんね。

山下　最近、改めてアクセプトとマノウォーが好きなんですよ。フェスで観てもむっちゃ盛り上がるし、そういう曲を作りたいなと。歌詞もマノウォーをリスペクトして“やるか、やられるか”みたいな。

――冒頭の音は［タウラスⅢ］ですか？

山下　そう、サビのところもタウラスで。気持ちいいじゃないですか、ブィーンっていうあのローがね。「Milky Way」でもベースがハイ・ポジションでやったときなんかに、ベースのルートをタウラスで踏めるからいいんです。

二井原　あれ踏まれるとね、低音で顔歪むねん！

――ハハハ、低音が強烈すぎて！　さて、おふたりから見て、最も高崎さん色が出ていると感じる曲とは？

山下　はい、三途の川です（「The Sanzu River」）。出まくってると言うか、横で歌われてるような気分になりますよ（笑）。

二井原　僕は「輝ける80's」。すごいシンプルな曲でしょ。ある意味、これぞ高崎晃の真骨頂かなっていう気がするんだよね。ほかの日本のメタル・ギタリストじゃ、なかなかここまで……こういうスタイルのハシリでしょ、高崎さんって。「大和魂」や「OEOEO」とかモダンな感じも当然なんだけど、この80's な感じはなかなかできんだろうと。これがひとつのアルバムのなかで同居しているっていうのは、高崎晃でないとできない芸当だなと思います。

――40年続けて、いろいろなものを培ってきた強みですね。

山下　逆に“これは二井原さんや”っていうのは「All will be Fine with You」ですね。“ディス・イズ・ラウドネス・バラード”やし、これは二井原さんでないと成り立たへんなっていう。

二井原　いや、これも苦戦したんですよ。歌自体はシンプルなんだけど、高崎さんのなかにある世界観の声に近づけていくのが。

山下　でも高崎さんは自分にも厳しかったもんね。「The Sanzu River」で“sanzu river～♪”って英語で歌ってたけど、途中“三途の川～♪”に変えたやん。そっちのほうが伝わるし語呂もええって。

――まぁ、三途の川を“Sanzu River”って英語化したのも、かなりのパンチラインですけど（笑）。

二井原　三途って日本語なのに、それを英語のローマ字に変えてしまうっていう。

山下　外人もわからんからね、三途の川のほうが潔いいよね。

二井原　そういう意味で言うと「The NAKIGARA」もローマ語のタイトルだけど、英訳をしてくれた先生が“二井原君、ここはあえてNAKIGARAにしましょ”って。最近は日本語でやるのもアリなんやなと。

山下　マレーシアとか英語じゃない国にも行くけど、その人たちにとっては英語も日本語も一緒だと思いますよ。だからそれはそれでいいんじゃないかなと思う。別に英語である必要はないと思うね。

二井原　英語で歌ったって、聞き取れていなかったら“こいつら日本語で歌ってる”って思うよ。英語っぽく聞こえるけど日本語やろなって。

山下　MTVとかラジオが主流で、英語で歌ってアメリカで売れようって時代やったら違うと思うけど、今はそういう時代じゃ

ないしね。

――歌唱ということでは、チューニングによる歌いやすさの違いはあるものですか？「The NAKIGARA」はD音、「仮想現実」ではC音まで落としたりと、ベーシックの音域が異なってきます。

二井原　再結成した頃はダウン・チューニングの曲が多くて、その音像に慣れなくてしばらくは難儀しましたね。僕はずっとレギュラー・チューニングできたから、考えている音と実際のチューニングが違っていたりして。今はもう大丈夫だけど。

山下　低いほうが聴きとるのがツラいんじゃない。ベースの僕ですら、セットリストの“半音下げコーナー”になったら“あっているのかな？”って思うし。EとDっていうのはわかりやすいけど、E♭だと、どれが正解かわかりづらい。

二井原　一瞬ね、聴覚が錯覚を起こすの。この音のはずだと思って体が反応するでしょ？　すると全然違う音がポーンと出てしまう。今は体が慣れてそういうこともなくなったんですけど。

――つまり、今はその違いでの歌いやすさの差はないと。

二井原　実は今、その話を聞くまで、この曲がダウン・チューニングだって気づかなかった。でもそのくらい、僕のなかではダウン・チューニングは気にならなかったんだろうね。そうそう、今回はドラムもふたりいるから、聴いている人もいろんな発見があっておもしろいと思いますよ。

山下　それも1曲のなかにふたりいてBメロでドラムが代わるって、前代未聞やろな。

――ドラムとベースは他パート以上にコンビネーションが重要となってきますが、そのあたりでの意識の違いはあるものですか？

山下　そこはまったく意識してないです。僕はギターのリフに合わせて弾くって決めてるから。

海外に出るまでは、日本だの海外だの考えたことがなかった。（二井原）

――さて、まだまだ今日・明日にという状況ではありませんが、もっとコロナの情勢が落ち着いたら当然海外公演も視野に入ってきますよね？

山下　来年の3月もアメリカ・ツアーをやる予定やし、4月にはヨーロッパ・ツアーなんだけど、まだキャンセルされてないから一応あるんだよね。

二井原　まぁ様子見やね。また第6波も来るでしょうし、イギリスとかあっちのほうはまた増えてるからね。そこはまだわからへんね。

――もちろん、まずは日本でもライヴが万全になってほしいところですしね。さて高崎さんは“『SUNBURST』は俺たちの大和魂だ”という旨の話をしてくれましたが、おふたりが持つ“ラウドネス的大和魂”というと？

二井原　なかなか難しい質問ですね……個人的には海外に出るまでは“日本だの海外だの”って考えたことがなかったんだけど、逆に向こうに行くことによって、日本が見えたっていうか。“あ、俺ら日本人やな”って逆にいろいろな場面で痛感する。向こうでやることによって、逆に日本って大事な国だってことを改めて感じるというかね。口だけで大和魂だって言ってる人と比べてもナンセンスだけど、僕らは日本という国がどれだけ素晴らしいか身をもってわかってるので。そういう意味ではすごく日本を愛しているバンドだなって強く思う。

――世界に出たからそこわかるという。

二井原　『THUNDER IN THE EAST』のデザインってアメリカ人が考える日本のイメージで作ったんだけど、あれが出たとき僕らはなんとも思わなかった。でも今やっぱりああいう旗を見ると、大事なもんやってすごく思うから。もちろん“左だ、右だ”という話じゃなくてね、すごく純粋にそう思いますね。

山下　初めて4人でアメリカに行ったのが1983年なんだけど、背も違うし動きもデカいしで、すべてに圧倒されて。8ビートひとつ取っても、どうやったら、あんな風に叩けたり弾けるんやろって。それこそ「大和魂」じゃないけど、捨て身覚悟の魂でいかんと勝てないなと思ったよ。日本人がアメリカでロックをやる前例がなかったから、ニイちゃんも旭日旗の服を着てたし、僕も神風のハチマキをしたり。昔は今と違ってアジアの国の違いがわからないから、“日本から来てるんや”って明確にするっていうのもあったけど、精神としてはでっかいヤツに立ち向かう。演奏技術は練習したらなんぼでもうまくなるけど、ロックのスピリットっていうのは向こうにずっといないと養えない。それを負けへんぞってやったのが、僕のなかでの大和魂かな。

二井原　ロックってなんだかんだ言って白人のものだから、海外のフェスに出てドカーンと盛り上げるって相当覚悟決めていかないとできることじゃないんです。何万人って白人さんがいるわけやから、それはもうちょっと想像を絶する。

山下　楽屋にいるバンドも、ガタイがいいじゃないですか。それなら俺も大和魂で鍛えよって。

――最後はそこにつながる！？

二井原　生きのいいバンドマンはマッチョやから。皆すごいよ。

――肉体的にもですが、ぜひ新作のサウンドでも世界を圧倒してほしいです！

山下　そこも負けないように大和魂でいかないといけないね。

二井原　そのとおり。圧倒します！

Interview-03

Live Photo by Shigeyuki Ushizawa

高崎晃が見てきたヘヴィメタルの40年

新作対談に続いては、この40年間、ヘヴィメタル・シーンの最前線を走ってきた高崎に、自身が見てきた世界のメタルの潮流について語ってもらった。その盛衰や環境の変化、そしてラウドネスへの影響と、トップに身を置く彼ならではの実体験は、他者とはまた違う興味深い内容だと言えるだろう。

自分の音楽的思考も時代の影響を受けながら変わってきたと思うけど、最初にラウドネスとして世の中に与えたイメージが、同じバンドで活動する以上一番大事なんじゃないかな。

パンク・ムーブメントは ひとつのファッション的感覚で 自分の好きなタイプではなかったかな。

——まずは40年よりももう少しさかのぼり、ギターを始めた1973年頃の話を聞かせてください。当時はまだ洋楽ではなく、日本の音楽を楽しんでいたという感じですよね？

ギターを始めたのは11歳くらいで、最初は吉田拓郎さんとかチューリップとか、日本のフォークを聴いて育ったんです。外国のロックだと一番最初はクリームで、『ライヴ・クリーム Vol.2』（1972年）を聴いてエレキ・ギターに転向していった感じですね。それと同時期にディープ・パープルの『マシン・ヘッド』と『ライヴ・イン・ジャパン』（両作ともに1972年）、レッド・ツェッペリンの『レッド・ツェッペリンⅡ』（1969年）やちょっと戻って『レッド・ツェッペリンⅠ』、ブラック・サバスの『パラノイド』（1970年）……あの辺りが最初のロックとの出会いです。

——英国ロックの波がいい感じに日本に届いていた時期ですね。

そうですね。ハードロック、ヘヴィメタル……どっちの名称が正しいのかはわかりませんが、ひとつのスタイルとして確立されてこっちに入ってきた頃です。中学2年の頃にエアロスミスの『飛べ！エアロスミス』（1974年）が日本で紹介されて、キッスやクイーンあたりのバンドももちろん好きだったし、初来日から全部観に行きました。パープルが来たら［日本武道館］でやったり、ツェッペリンが来たら［フェスティバルホール］でやったり、大きな会場にたくさんの人が集まっていましたよね。

——その後、高校時代にバンド活動が本格化して、レイジーとして1977年にデビューしますが、同年にはセックス・ピストルズやダムドがアルバム・デビューをし、UKパンク・ブームが起きようとしていました。その流れはどう見えていましたか？

ロンドンやイギリスではパンク・ムーブメントがあったかもしれないけど、ひとつのファッション的な感覚で捉えていて、自分の好きなタイプではなかったかな。僕が上京した1978年にヴァン・ヘイレンがデビューしていたりして徐々にハードロックの扉が開かれていったので、どちらかと言えばそっちに注目していたし、その影響を受けましたね。

——確かに、ギタリスト的にはそうなりますよね。

そうですね。僕がパンクのムーブメントを感じたのは、ラウドネスで初めてイギリスに行ったときですね。すでにパンクも下火になっていてユーロビートが出てきているような時代だったけど、それでもパンクのファッションをした若者たちが道路に座っていて、ちょっと差別的な言葉を受けたりもして、パンクを肌身に感じたのはその頃ですね。

――その反動もあって、1980年にはアイアン・メイデンがデビューしてNWOBHMが生起します。

レイジーと比べるとレイジーのほうが早いんだろうけど、ラウドネスと比べるとほぼほぼ同時期でしたよね。デフ・レパードであったり、ガールであったり。

――それらの同世代バンドは、日本にいる頃の高崎さんにはどういう存在だったんでしょうか？

その頃はまだ雑誌に書かれているレビューや写真なんかを見て“こんな感じなのかな？”と想像してレコードを聴いていたような時代だったので、生で観ないと実際にどうなのかが、なかなかわからないですよね。ただ、自分たちと同世代のバンドが出てきたな、多分同じような音楽……ツェッペリンであったり、パープルやサバスであったりを聴いて育ったんじゃないかなとは思いました。

――のちのち、同じシーンで鎬を削っていく相手だと思ったりはしましたか？

そういうのはなくて、ただ“演奏技術では負けへんぞ”くらいで。あの頃はスケジュール的にも音楽的にも次から次へと新しいことが入ってきていて、あまりほかのことを感じたり、考える余裕がなかったんです。1983年には海外レコーディングを初めて経験したり、初めての海外ツアーであったりと、自分たちのやっていることに精一杯で、実際のところほかのことが見えていなかったですね。

――ただ、やはり演奏力では負けてない、と。

樋口（宗孝）さんのドラムも『宇宙船地球号』の頃からすごく太くて。ラウドネスでデビューしてからも、より自分のスタイルを確立させていったので心強かったし、バンドのなかでもライバル意識を感じながら“彼がこっちなら、俺はこういこう”と競い合っていたような時代でした。

いつの時代でも世の中にはメタル・ミュージックの好きな人がたくさんいるという実感はあります。

――片やアメリカではモトリー・クルーもデビューし、世界規模でメタル・ブームが起き始めます。

モトリーはデビュー・アルバムを買っていて、前評判がすごかったですからね。女性ファンも大勢いてどんどんメタルが派手になり、ひとつの新しいメタルが確立されてるんだなと思いました。ボン・ジョヴィを含めてLAメタルのスタイルが一世風靡していた時代で、そんななか自分たちは『THUNDER IN THE EAST』（1985年）を出して。

――ただそのときも、あくまでもラウドネスらしく、自分たちのサウンドを作ればいいという心持ちだったのでは？

そうですね。ラウドネスの本質はどちらかと言うとブリティッシュ・メタルからきているので、そのあたりを大事にしながら日本のバンドとしての個性を打ち出していくのが大事だなと思っていたんです。まぁ『THUNDER IN THE EAST』はロスで3ヵ月暮らしながら作ったアルバムだったので、LAメタルっぽい要素も自然と出ているかもしれないけど（笑）。

――海外レコーディングということでは、一番最初は『DISILLUSION～撃剣霊化～』（1984年）ですよね。

そう、ロンドンの［サームウエスト・スタジオ］というところでやったんですけど、実際音もだいぶ変わりましたね。ラウドネス以前にも海外レコーディングをウリにしている日本のアーティストもたくさんいたと思うし、自分ももちろんそれを経験してみたかったので『DEVIL SOLDIER～戦慄の奇蹟～』（1982年）と『THE LAW OF DEVIL'S LAND～魔界典章～』（1983年）ではアメリカ人エンジニアを日本に呼んでレコーディングをしたけど、やっぱり本格的に海外レコーディングを試したいなというのはありましたから。

――やはり、その違いを実感しましたか。

随分変わりましたね。だけど例えばドラムのレコーディングに関しては、最初はマイクの本数とかめちゃくちゃ少なくて。キック、スネア、ハット、上に2本立てるくらいでドラムの音作りをしたんですよ。それでも充分いい音はしていたけど、樋口さんは全部にマイクを立ててほしいってやりとりをしていたりね。

――ギターということでは？

日本とは電圧が全然違うので、同じマーシャルでもこんなに音が違うのかと驚きました。それは今でもそうで、ヨーロッパ・ツアーで一発音を出すたびにビックリします。例えば日本で同じくらいの音を出そうと思ったら、まあまあのパワーを込めて弾かなきゃいけないんだけど、向こうの電圧ならバッと弾いただけでそれが出る（笑）。すごい音圧の違い。それはアメリカに行っても感じてはいたけど、特にヨーロッパでは感じるんですよね。

――そのあたりは、いかに機材が進歩してもなかなか同じようにはならないんですね。

今のデジタル系アンプだとそこまで変わらないと思うんですけど、真空管アンプはやっぱり変わりますね。例えば西日本と東日本でも変わるらしいから。

――なるほど。さて同じく1983年にはヨーロッパ・ツアーも行なっています。同地域でのヘヴィメタルの動きなど、日本との違いを感じるところはありましたか？

日本でも“ジャパメタ・ブーム”が来ていたと思うんですけど、日本以上にあの頃のドイツやオランダ……ヨーロッパはやっぱりスゴかったです。アムステルダムの［パラディソ］で2日間ライヴをやってソールド・アウトにしたんですけど、オープニングで出たオランダのバンドが、すでにラウドネスのカバーをやっていたりして（笑）。今でも『EUROBOUNDS』（1984年）で残っていますけど、お客さんの盛り上がりもものスゴくて、本当最高の歓迎を受けてビックリしましたね。

――世界的な波が来ている音楽ジャンルの先端に自分たちもいるんだ……という実感はありましたか？

それは感じましたね。ただ、それは今でもそうで、“メタルはもう古い、下火だ”と言われる時代でも、海外のフェスに行くといつも何万人も集まってくる。いつの時代でもメタル・ミュージックが好きな人たちは世の中にたくさんいるなという実感はあります。

――そのとおりです！　1985年には全米ツアーも行なっています。メタリカやスレイヤーもデビューして、アメリカではスラッシュ人気も高まってきた頃ですが、その流れは高崎さんにはどのように映っていたのでしょうか？

その頃は、いわゆるヘア・メタル系とスラッシュ系と、大きくふたつに分かれていたかもしれないけど、ラウドネス自体は“どっちにもいけた”くらいの微妙な立ち位置だったと思うのね。『DISILLUSION』までのセルフ・プロデュースをしていた頃はどちらかと言えばスラッシュ寄りというか、自分たちのなかにもスラッシュの原型になるような部分があったのかもしれないです

ね。最初にベイエリアでやったときも、今のスラッシュの連中らも観にきてくれていましたから。『THUNDER ～』はマックス（ノーマン）のプロデュースで、あのときはどちらかというとLAメタル寄りの作品を作りましたけど、アメリカにいてロビーのテレビをつけると激しいスラッシュ系のバンドもたくさん出てきていて。ハードでカッコいいなと思っていましたよ。

――マックスとしては“ラウドネスにはこっちがいい”という判断だったんでしょうね。ただ、その後の『HURRICANE EYES』に収録される「S.D.I.」などは、スラッシュ・メタルをも凌駕する激しさが詰め込まれるようになったり。

エディ・クレイマーのプロデュース手腕が発揮されているアルバムで、発売当時も日本のチャートでは最高位までいってたんですけど、どちらかと言うと今のほうが評価が上がっている感じなんですよね。

――お、なるほど。

僕自身は作ったときから気に入っていましたけど。1曲目の「S.D.I.」とかは派手なので、インパクトは強いと思うんですけど、いわゆるB面というか、曲が進むに連れて深い感じの曲が多くなっていくので、最初はとっつきにくいかもしれないけど、リフもむっちゃ構築されてるし、今聴いても“よくこんな複雑なリフ生み出してたなぁ”って（笑）。

短パンでライヴをやるようになって最初はかなり驚かれましたからね。

――80年代中盤以降も、日本でもヘヴィメタル・バンドがいろいろとデビューをしていきます。"国内シーンもまだまだ大きくなるな"という感覚でしたか？

やっぱりその頃も自分たちのことで精一杯で、あんまりまわりが見えていなくて（苦笑）。ただXの『BLUE BLOOD』のレコーディングには僕も顔を出したりしていて……共通の友達がいたんで、ただ見に行っただけなんですが（笑）。そのときにTAIJI（沢田泰司）とPATAと仲良くなって、その後呑みに行ったり僕の家に来たりもしていましたね。

――そこからのつき合いだったんですね。『BLUE BLOOD』がリリースされた年（1989年4月）に、ラウドネスは『SOLDIER OF FORTUNE』（同年9月）を発表しています。また同年にはニルヴァーナが『ブリーチ』でインディ・デビューし、のちにグランジ・ブームがアメリカで起きました。徐々に音楽的ブームの潮目が変わってきたと感じたりはしましたか？

『SOLDIER OF FORTUNE』は対照的な"テクニカルバリバリ"で、向こうはグランジで作風は全然違うけど、もちろんMTVでも観たしラジオでも聴きまくってカッコいいなとも思ったし、僕は今もあの辺りのグランジ系バンドは大好き。サウンドガーデンなんかも大好きだったし、あとはパール・ジャムやアリス・イン・チェインズは今でも大好きですね。

――とは言え、やはりラウドネス的に参考にするということではなく。

そのときは全然思わなかったんですけどね。ただ、90年代半ばまで時代が動き出してきた頃は、自分もまぁまぁなグランジ風になっていってましたけど（笑）。

――他方で1990年代に入ると、メタル・シーンではパンテラを筆頭とするグルーヴィなスタイルが主軸になっていきます。

とは言えパワー・メタル的なノリというのは、80年代中期にアメリカ・ツアーを回っているときからすでに感じていたんですよ。サンフランシスコではモッシュ・ピットも始まっていましたから。だから本当サンフランシスコって、アメリカのなかでもスゴく早いと思うんですよね。サイケデリック・ロックもそうだったけど、いろいろな部分で音楽的な感覚が進んでいる。その洗礼を事前に受けていたんで、そこで特に驚くことはなかったかな。

――90年代、ラウドネスのルックスもストリート感が出ましたが、グルーヴ・メタル的というよりは、そこはグランジ的だったということでしたか。

僕が短パン履いてライヴをやるようになったときに、最初はかなり驚かれましたからね。90年代アタマはまだ"ハードロックやメタルで短パン履いてやるなんて信じられへん"みたいに言われる時代だったんで。だけどマイケル・シェンカーも短パン履いていましたしね。誰でも暑かったら履くわって（笑）！

――快適な服装であれば、プレイも向上するし（笑）。

うん、ロック・バンドだけに限らず、文化としてのファッションも変わっていったんじゃないかな。

――グルーヴ系で見ますと1994年にマリリン・マンソンやKORNが出てきて、1997年にはリンプ・ビズキッドがデビュー。さまざまな要素が入り混じったヘヴィ・サウンドというのが若者を中心に発展していきます。

ラップであったりファンクであったりといろいろな要素が入ってきて、メタルもハードロックも新次元に入っていった時代ですよね。ロックが誕生してからこれだけ時間が経つと、今まで聴いたことのない形態の音楽が入るのは本当に大変なんだけど、あの頃はまだ新しいものが入ってきた時代だと思うし、最初に聴いたときにはすごく刺激にもなりました。なんでもアリっていうわけじゃないけど、音楽を作るうえでのアイディアって大事だなと思いましたね。

――自分たちの音楽にも参考になるものだと感じましたか？

まぁ影響を受けやすいタイプなんで。だけどそれをそのまま出すんじゃなしに、自分らのなかで背負ってラウドネスなりに料理をしてやる。その時代その時代に合ったラウドネスを、自分たちで作っていた感じですね。

――例えばダウン・チューニングということであれば、もう少し早くから取り入れていましたよね？

ラウドネスとしては泰司が加入した『LOUDNESS』（1992年）で半音下げをやったのが最初で……半音だからダウンと言っていいのかわからないけど、ジミヘンはもともと半音下げてたし、ヴァン・ヘイレンも半音下がっていたんでね。それで、実質的なダウン・チューニングは、『ENGINE』（1999年）の「BUG KILLER」で全音下げて。その後もどんどん下がって……2006年頃まではそうだったのかな。

――デビュー時からほかのバンドよりもハードなサウンド目指していたラウドネスとしては、ダウン・チューニングに行き着くのも必然だったと言えますか？

それもあるし、実際に実験してみたら圧倒的にどエラい音がしたので"これは使わない手はないな"というのが本音ですよね。Cチューニングにしたときのあのズン！っていう音は、それまででは出ない音圧感だったり低音感でしたから。ただそれだと『THUNDER～』であったり『DISILLUSION』で出していた"ハイな感じ"は出ないんですよ。それで、2010年以降は曲によってコーナーを分けてやっていたんです。

――確かにロー・チューニングには魔性の

◎こちらは30周年！

『ON THE PROWL 30th ANNIVERSARY LIMITED EDITION』
ワーナー／WPZL-31926～9
※12月24日発売

マイク・ヴェセーラをヴォーカリストに迎え、1991年にリリースされた『ON THE PROWL』が、30周年記念版として発売決定！ 3CD＋DVDという豪華仕様で、スペシャル・ブックレットや1991年USツアー・パスのレプリカも封入。

魅力があると思います。

最初にＣの音を出したときは気持ちよかったし、その時代に出てくるバンドがそれくらいの音圧なのに、こっちが高いのでやってもね……どうしてもかわいく聴こえちゃうんで。ただ、今はレギュラー・チューニングでもスゴい低音感を生む弾き方も身につけているから、単にチューニングを下げたからって低音が生まれるんじゃないってことは充分分かってるけど、あの頃はまぁ夢中になりましたよね。

地球の長い歴史から言ったら若いのも年寄りも同じ年みたいなもん。その個性が一番大事になる。

――2000年代に入ってくるとベテラン・バンドが復活したり、片や若いメタルコアが元気だったり、サブ・ジャンル的トレンドがない状況になったとも言えそうです。

どうなんでしょうね。地球の長い歴史から言ったら若いのも年寄りも同じ年みたいなもんで、そのアーティストの個性が一番大事になる。だから、そのあたりは年齢とか関係ないのかな。特にステージに上がっちゃえばね。

――ステージでカッコいい音を出した人の勝ちという。

そうなりますね。

――また近年はアニメやゲームであったり、アイドルの楽曲であったりと、ヘヴィメタル・ライクなアレンジを使うことも当たり前になってきました。良く言えばメタルが普遍的な音楽になったと解釈できますし、逆に言うとコアなものではなくなったということでもあり。

それこそ昔で言えば、オーケストラがアニメの音楽を演奏していてね。大勢……ヘタすれば40名くらいいるなかでのアレンジだったりをバックに、歌手が歌っていたわけじゃないですか。そのあたりに影響を与えたのは、やっぱり井上俊次であったり影山ヒロノブだったりだと思います。そして、今、こういう形態がスタンダードになってきて……僕は70年代のアイドルの曲をやっていたときから、世の中は絶対にそっちに進むと信じていて、その道がどんどんメイン・ストリートになってきた感じかな。

――何事も信じて進むということは大切ですね！

そうですね。"こうなるだろう"って感覚が何となくわかるんです。"ハード系がこれからくるんじゃないか"とか、そういうところが敏感に反応するんですよ。

――とは言え、すべて流行に合わせるわけではありませんよね。

そんな奴いたらおもろいけどね（笑）。自分の音楽的嗜好も、時代の影響を受けながら変わってきたと思うんだけど、結局は最初に世の中に与えたイメージ、ラウドネスとして世の中に与えたイメージが、同じバンド名で活動する以上は一番大事なんじゃないかなって思います。"らしさ"を大事にして、王道のラウドネスの道をずっと歩んでいくのが、ファンの人達も安心する。それが40年やってきて思うところですよね。

――1stのイメージをずっと持っているって、ファンの真理でもありますから。

それを期待して来ているのに、全然違うものを観せられたら"こんなんか"ってなっちゃいますからね。

――その点、セットリストにしても、ラウドネスはそこも大切にしているからこそ、ファンは毎回満足して帰れるのかな、と。

思うツボです（笑）。

――さて2020年代以降、このメタル・シーンはどんなスタイルが盛り上がっていくと思いますか！？

うーん、何がくるのかは僕もわかりません。だけどラウドネスはラウドネスらしく、このまま突っ走ります！

山下昌良 × ラウドネス・オフィシャル・シャンパン

ラウドネス特集の最後は、山下によるバンド・オフィシャル・シャンパンの実飲レビューだ！　特別なシチュエーションで呑む印象もあるシャンパンだが、呑み口のさっぱりしたラウドネス印のこの一本、カジュアルなシーンでも楽しんでみては？

［LOUDNESS シャンパン］

価格：5,500 円（税込み）
容量：750ml
アルコール度数：12 度

ラウドネスのオフィシャル・ドリンクである［LOUDNESS シャンパン］は、フランスはエペルネーにて製造される純然なシャンパン。使用されるブドウはピノ・ノワール 50%、シャルドネ 35%、ピノ・ムニエ 15%という割合になっており、各品種の特徴が絶妙なバランスで表現されている。

ホワイト・フラワーとドライ・アプリコットのアロマが香り、また強い発泡とともにその余韻が長く続くフレッシュな味わいが魅力だ。一般的なシャンパンよりも酸味が抑えられていて口当たりも柔らかなので、食事のお供にはもちろん、食後の一杯にもピッタリのお酒と言えるだろう。

■詳細・購入はこちらから

◎都商会ロック酒通販サイト（MIYAKO WEB CHANNEL）

※これはお酒です。二十歳未満の方の飲酒は法律で禁じられています。

◎年末ライヴ会場でも販売決定！

現在は左記サイトにて先行発売されている本シャンパンだが、バンドの年末ライヴ当日（12 月 28 日・29 日）には、会場となる［EX THEATER ROPPONGI］でも販売されることとなった。ぜひ、直接チェックしてみよう。バンド好きの友人・知人への贈答用のほか、お部屋のインテリアにもオススメ♪

◎ラウドネス・ビール も発売中！

発売から好評を博している［40 周年記念 LOUDNESS オリジナル・クラフトビール］も絶賛発売中だ。“GOLDEN ALE”、“RED ALE”、“WHITE ALE” の 3 テイストから好みに合わせて選べるようになっている。

また、年末のライヴ会場でビールを購入すると、これまではシールを貯めて応募しないと手に入らなかった “オリジナル T シャツ（下画像）” がゲットできる《TOD カード》が購入できるキャンペーンも開催。こちらも見逃せないぞ

■ビールのお求めは［A!SMART］で！

▶ラウドネス・ビール・オリジナル・デザインの T シャツは、＜ 3 パターン× 7 カラー＞の全 21 種類（サイズは S ～ 2XL）。この T シャツを着れば、いつでもパーティ気分でロックができそう！？

ファンの方は既婚者も多いので、結婚記念日にもいいですよね。

ラベルがカッコいいなぁ～。ひと口目の印象は……どちらかというとサッパリした味わいで、あとからブドウの香りがグゥーっとくる。ヨーロッパは硬水が多いからお酒もミネラル分が強くてわりと硬いんですけど、これは口当たりがなめらかで、甘すぎずクセもないので、ナンボでも呑んでしまいますね（笑）。

食事だったらやっぱり魚介類と合わせたい。蒸した貝とかいいですよね。ほかにもチーズやナッツがあれば、ひとりで１本いけそうです。もちろん、ご飯を食べたあとのドリンクとしても最適だと思います。くつろぎながらラウドネスの曲を聴いたり、ライヴDVDを観ながら呑んでもらいたいですねぇ。

記念日に開けるというのもアリで、もちろん誕生日やクリスマスにもピッタリです。ラウドネス・ファンの方は既婚者も多いので、結婚記念日にもいいですよね。ほかにも息子さんや娘さんの記念日とか、例えばピアノの発表会であったり卒業祝いであったり。そういうお祝いを家でなさるとき、このラウドネス・シャンパンで祝っていただければ我々も嬉しいです。僕も息子があと１年で二十歳になるので、これで乾杯したい（笑）。

※

普段の僕はビール党で、最初に生ビールを２～３杯呑んだあとは、その日の気分でずっと焼酎だったりウイスキーだったりを呑んでいます。お酒はなんでも好きなんですけど、日本酒だけは弱くって。

実は年齢とともにますます強くなっていて、今が一番強いですね。二日酔いで“あかん、やってもうた”ってあるじゃないですか。昔は夕方までアウトだったのが、今は昼くらいには復活してくるんですよ（笑）。酔っても、記憶を失くしたことは一回もなくて、普段よりデカい声で喋って笑うくらい。カラむことも絶対にない。

メンバーで一番強いのは、今だったら高崎さんちゃうかな。ただ、樋口さんはダントツで強かった。以前はジャック・ダニエルを１日１本呑んでましたから！

CHRONICLE

選盤：竹内伸一

MHJ Vol.8 特化 主要バンド作品リリース年表

本誌に登場する国内バンドをメインに、海外バンドの話題作品を参考追加した、本号に特化したリリース&トピック年表だ。各作品がどのようなタイミングでリリースされ、それぞれどれどういった時系列にあるのかを知る参考にしてほしい！

1977

●6月
『ラヴ・ガン』キッス
●7月
「Hey! I Love You!」レイジー

1978

●2月
『炎の導火線』ヴァン・ヘイレン

1979

●3月
『オーヴァーキル』モーターヘッド

1980

●4月
『鋼鉄の処女』アイアン・メイデン
●9月
『ブリザード・オブ・オズ〜血塗られた英雄伝説』オジー・オズボーン
●12月
『宇宙船地球号』レイジー

1981

●11月
『悪魔の招待状』AC/DC
『THE BIRTHDAY EVE〜誕生前夜〜』ラウドネス
『華麗なる激情』モトリー・クルー（自主制作盤）
◎2月、レイジーが調布公演中に解散を宣言。5月に正式解散。高崎晃と樋口宗孝はラウドネスを本格始動。
◎ユナイテッドが結成。

1982

●3月
『魔力の刻印』アイアン・メイデン
●7月
『DEVIL SOLDIER〜戦慄の奇蹟〜』ラウドネス
◎聖飢魔Ⅱ（前身バンド）が結成。
◎Xが結成。
◎筋肉少女帯が結成。

1983

●1月
『THE LAW OF DEVIL'S LAND 〜魔界典章〜』ラウドネス
●7月
『キル・エム・オール』メタリカ

1984

●1月
『DISILLUSION 〜撃剣霊化〜』ラウドネス（7月には English Version もリリース）
●11月
『パーフェクト・ストレンジャーズ』ディープ・パープル

1985

●1月
『THUNDER IN THE EAST』ラウドネス（アトランティック・レコードと契約し、全米74位を記録）
●2月
「Destroy Metal」ユナイテッド
●6月
「I'LL KILL YOU」X（自主制作盤）
『キリング・イズ・マイ・ビジネス』メガデス
●8月
『とろろの脳髄伝説』筋肉少女帯
●9月
『聖飢魔Ⅱ〜悪魔が来たりてヘヴィメタる』聖飢魔Ⅱ
●10月
『狂気のスラッシュ感染』アンスラックス

1986

●3月
『SHADOWS OF WAR』ラウドネス（海外では『LIGHTNING STRIKES』として7月にリリース／全米64位）
『メタル・マスター』メタリカ
●4月
『THE END OF THE CENTURY』聖飢魔Ⅱ
「オルガスム」X
●8月
『ワイルド・イン・ザ・ストリーツ』ボン・ジョヴィ
●10月
『レイン・イン・ブラッド』スレイヤー
●11月
『地獄より愛をこめて』聖飢魔Ⅱ

1987

●3月
『ノゾミ・カナエ・タマエ』筋肉少女帯
『白蛇の紋章〜サーペンス・アルバス』ホワイトスネイク
●7月
『アペタイト・フォー・ディストラクション』ガンズ・アンド・ローゼズ
●8月
『HURRICANE EYES』ラウドネス
●11月
『BIG TIME CHANGES』聖飢魔Ⅱ
◎サポートで参加していたPATAがXに正式加入。

1988

●4月
『Vanishing Vision』X
●5月
『JEALOUSY』ラウドネス
●6月
『仏陀L』筋肉少女帯
●8月
『守護神伝 - 第二章 -』ハロウィン
●12月
『THE OUTER MISSION』聖飢魔Ⅱ
『SISTER STRAWBERRY』筋肉少女帯
◎9月、ユナイテッドに吉田"HALLY"良文が加入。
◎12月、ラウドネスから二井原実が脱退。

1989

●4月
『BLUE BLOOD』X
●6月
『ブリーチ』ニルヴァーナ
●7月
『猫のテブクロ』筋肉少女帯
●9月
『SOLDIER OF FORTUNE』ラウドネス
『ドクター・フィールグッド』モトリー・クルー
●12月
「元祖高木ブー伝説」筋肉少女帯
◎筋肉少女帯から三柴江戸蔵が脱退。橘高文彦が加入、本城聡章が復帰。
◎9月、ラウドネスにマイク・ヴェセーラが加入。

1990

●2月
『サーカス団パノラマ島へ帰る』筋肉少女帯
●7月
『カウボーイズ・フロム・ヘル』パンテラ
●9月
『有害』聖飢魔Ⅱ
『ペインキラー』ジューダス・プリースト
●10月
『Bloody But Unbowed』ユナイテッド
●11月
『月光蟲』筋肉少女帯
◎2月、筋肉少女帯が初の日本武道館公演。

1991

●2月
『ON THE PROWL』ラウドネス
●7月
『Jealousy』X
『断罪！断罪！また断罪!!』筋肉少女帯
●8月
『メタリカ』メタリカ
●9月
『ノー・モア・ティアーズ』オジー・オズボーン
◎8月にXが初の東京ドーム公演。
◎10月、ラウドネスからマイク・ヴェセーラが脱退。

1992

●2月
『俗悪』パンテラ
●5月
『エリーゼのために』筋肉少女帯
●6月
『LOUDNESS』ラウドネス
●7月
『イメージズ・アンド・ワーズ』ドリーム・シアター
●9月
『Human Zoo』ユナイテッド
●10月
『恐怖のレストラン』聖飢魔Ⅱ
◎XからTAIJI（沢田泰司）が脱退。8月にはHEATHが加入し、X JAPANに改名。
◎1月、ラウドネスから山下昌良が脱退。沢田泰司、山田雅樹が加入。

1993

●4月
『UFOと恋人』筋肉少女帯
●8月
『ART OF LIFE』X JAPAN
●10月
『ハートワーク』カーカス
◎11月、ラウドネスから樋口と沢田が脱退。

1994

●4月
『レティクル座妄想』筋肉少女帯
●7月
『PONK!!』聖飢魔Ⅱ
●10月
『Korn』KOЯN
●12月
『HEAVY METAL HIPPIES』ラウドネス
◎ラウドネスに本間大嗣が加入。ツアーでは柴田直人がサポート、のちに正式加入。

1995

●2月
『N.O.I.Q』ユナイテッド
●11月
『スローター・オブ・ザ・ソウル』アット・ザ・ゲイツ
◎12月、ユナイテッドから古井義明が脱退。

1996

●2月
『ルーツ』セパルトゥラ
●3月
『ステーシーの美術』筋肉少女帯
●6月
『メフィストフェレスの肖像』聖飢魔Ⅱ

●11月
『DAHLIA』X JAPAN
●12月
『キラキラと輝くもの』筋肉少女帯
◎3月、ユナイテッドに稲津信一が加入。

1997
●2月
『Reload』ユナイテッド
●7月
『NEWS』聖飢魔II
『GHETTO MACHINE』ラウドネス
●10月
『最後の聖戦』筋肉少女帯
◎9月に、X JAPANが解散を表明。12月31日、東京ドームで解散ライヴを開催。その後《第48回NHK紅白歌合戦》に出演して活動を終了。

1998
●3月
『ULTRA HIGH』レイジー
●4月
『Distorted Vison』ユナイテッド
●7月
『Happy Time』レイジー
『MOVE』聖飢魔II
●8月
『DRAGON』ラウドネス
●9月
『メカニカル・アニマルズ』マリリン・マンソン
◎5月2日、hideが逝去。
◎8月、筋肉少女帯から太田明が脱退し、活動休止に。
◎12月、ユナイテッドから内野裕一が脱退。

1999
●6月
『スリップノット』スリップノット
●7月
『ENGINE』ラウドネス
●10月
『LIVING LEGEND』聖飢魔II
◎2月、ユナイテッドに中村雄介が加入。
◎5月、筋肉少女帯から橘高が脱退。
◎6月、筋肉少女帯から大槻ケンヂが脱退。
◎年末の東京ベイNKホール3デイズ黒ミサをもって、聖飢魔IIが地獄へ帰還。

2000
●10月
『チョコレート・スターフィッシュ・アンド・ザ・ホット・ドッグ・フレイヴァード・ウォーター』リンプ・ビズキット
◎5月、ラウドネスがオリジナル・メンバーで再集結。
◎9月、ユナイテッドから稲津が脱退。翌10月、湯浅正俊が加入。

2001
●3月
『SPIRITUAL CANOE 〜輪廻転生〜』ラウドネス
●4月
『Infectious Hazard』ユナイテッド
『ウェイジズ・オブ・シン』アーチ・エネミー
●11月
『PANDEMONIUM 〜降臨幻術〜』ラウドネス

2002
●8月
『Core』ユナイテッド
●9月
『BIOSPHERE- 新世界 -』ラウドネス
●11月
『宇宙船地球号II』レイジー

2003
●3月
『フォールン』エヴァネッセンス
◎12月、ユナイテッドから中村が脱退。

2004
●1月
『TERROR 〜剥離〜』ラウドネス
●6月
『ワンス』ナイトウィッシュ
●11月
『Racing/ 音速』ラウドネス（翌年には英語バージョンを欧州でリリース）
◎4月、ユナイテッドにAKIRAが加入。12月には湯浅が脱退。

2005
●3月
『アセンダンシー』トリヴィアム
●12月
『Nine』ユナイテッド
◎6月、ユナイテッドにNOBが加入。

2006
●8月
『サクラメント』ラム・オブ・ゴッド
●12月
『BREAKING THE TABOO』ラウドネス
◎7月、筋肉少女帯に大槻と橘高が再加入し、12月に復活ライヴを開催。

2007
●9月
『新人』筋肉少女帯
●10月
『アヴェンジド・セヴンフォールド』アヴェンジド・セヴンフォールド
◎X JAPANが再結成を表明

2008
●1月
『I.V.』X JAPAN（配信）
●2月
『METAL MAD』ラウドネス
◎3月、X JAPANが東京ドームで再結成ライヴ。
◎11月30日、樋口宗孝が逝去。
◎12月、ユナイテッドからNOBが脱退。

2009
●5月
『シーズン2』筋肉少女帯
『THE EVERLASTING - 魂宗久遠 -』ラウドネス
●9月
『悪魔NATIVITY "SONGS OF THE SWORD"』聖飢魔II（海外では7月に配信）。
◎2月、ラウドネスに鈴木"あんぱん"政行が加入。
◎5月、X JAPANにサポート参加していたSUGIZOが正式加入。
◎10月、ユナイテッドにKEN-SHINが加入。

2010
●4月
『ペリフェリー』ペリフェリー
●5月
『KING OF PAIN 因果応報』ラウドネス
●6月
『蔦からまるQの惑星』筋肉少女帯
●7月
『悪魔RELATIVITY』聖飢魔II（海外での配信は6月）
◎8月、X JAPANの横浜国際総合競技場ライヴにTAIJIがゲスト出演。

2011
●4月
『Tear Of Illusions』ユナイテッド
●9月
『Eve to Dawn 旭日昇天』ラウドネス
◎7月17日、沢田泰司が逝去。

2012
●8月
『2・0・1・2』ラウドネス
◎12月、ユナイテッドからKEN-SHINが脱退。

2013
●9月
『サージカル・スティール』カーカス
◎4月、ユナイテッドに湯浅が復帰

2014
●2月
『BABYMTEAL』BABYMETAL
●6月
『THE SUN WILL RISE AGAIN 〜撃魂霊刀』ラウドネス（全米では翌年10月にリリース）
●8月
『マキシマム・オーバーロード』ドラゴンフォース
●10月
『THE SHOW MUST GO ON』筋肉少女帯
◎5月13日、ユナイテッドの横山明裕が逝去。
◎10月、X JAPANがマディソン・スクエア・ガーデンでライヴ。

2015
●8月
『メリオーラ』ゴースト
●10月
『おまけのいちにち（闘いの日々）』筋肉少女帯

2016
●6月
『MAGMA』ゴジラ

2017
●10月
『Future!』筋肉少女帯
●12月
「Slow and Steady」レイジー
◎3月、X JAPANのドキュメンタリー映画『We Are X』公開。『WE ARE X オリジナル・サウンドトラック』もリリース

2018
●1月
『RISE TO GLORY - 8118 -』ラウドネス
●3月
『ファイアーパワー』ジューダス・プリースト
●7月
『Absurdity』ユナイテッド
●10月
『ザ・シサ』筋肉少女帯
◎2月、ラウドネスの鈴木が脳梗塞のため緊急入院。9月のイベントにて、鈴木が1曲プレイする。
◎4月、ユナイテッドにサポート参加していたGEORGEがJurassic Jadeを脱退。ユナイテッドに正式加入

2019
●6月
『ゴールド・アンド・グレイ』バロネス
●11月
『LOVE』筋肉少女帯

2020
●9月
『オームズ』デフトーンズ
●11月
『旧約魔界聖書 第I章』Damian Hamada's Creatures
●12月
『旧約魔界聖書 第II章』Damian Hamada's Creatures
◎10〜12月、聖飢魔IIがヴィデオ黒ミサ・ツアーを開催。

2021
●11月
『君だけが憶えている映画』筋肉少女帯
『魔界美術館』Damian Hamada's Creatures
●12月
『SUNBURST 〜我武者羅』ラウドネス
『REVIVE』NEMOPHILA
◎7月、レイジーが『宇宙船地球号』完全再現配信ライヴ。
◎10月から、聖飢魔IIがヴィデオ黒ミサ・ツアーを開催。

Continue to Next Year...

Interview by Takahide“THUNDER”Okami
Live Photo by LisA=kozai

大槻ケンヂ×橘高文彦

「サンフランシスコ」、「詩人オウムの世界」、「イワンのばか」、「スラッシュ禅問答」、そして新作『君だけが憶えている映画』における「大江戸鉄炮100人隊隠密戦記」……と、数々の様式美ヘッドバンギング・チューンを持つ筋肉少女帯は、ものを思うに、ヘヴィメタル・バンドと言ってもいいのではないか！？彼らをジャンル分けするなんて非常に不毛な話でもあるが、今回はハマー的“筋少はメタルなのか！？”という問いに、オーケンと橘高が鋼鉄魂全開で答えるっ！

筋肉少女帯は“ヘヴィメタル・

◎２年ぶりの最新オリジナル・アルバムが発売中！

『君だけが憶えている映画』
徳間ジャパンコミュニケーションズ
TKCA-74993（初回盤）
TKCA-74994（通常盤）

バンドなのか!?”と問うならば！

ものすごい正統派なヘヴィメタル・サウンドに対抗しうるには、邪道なナゴムの詞しかない。それをぶつけ合うことで、化学変化や異化効果が生まれる。
―― 大槻ケンヂ

高校生バンド時代の選曲が今の筋少を表わしていたな、と。（大槻）

――突然ですが、今回は"筋肉少女帯はメタル・バンドだ！"という意気込みで話を聞いていきたいと思っております！

大槻ケンヂ　そもそも筋肉少女帯は40年前に高校生バンドとして組まれたんですね。最初のライヴは新宿の［JAM］で、そのときにPANTA & HALと頭脳警察、ヒカシュー、そしてレインボーのカバーをやったんです。これが非常に高校生らしいセレクションだと思うんですけど、今になってみると筋肉少女帯も頭脳警察のような日本語パンク的な歌詞と、当時のヒカシューの持つニュー・ウェイヴな感じ、そしてレインボーのようなハードロック・スタイルというものが合体したバンドだと思うんですよ。だから非常にそのときの選曲が、今の筋少を表わしていたな、としきりに思います。

――初志貫徹というか、そのときの気持のまま今も突っ走っているという感じですか。

大槻　やっぱり世代として、ヘヴィメタルが流行っていた時期だったということもあったんです。それで筋肉少女帯の2ndアルバム（『SYSTER STRAWBERRY』1988年）でメンバーが辞めて、誰かヘルプでギターを入れなくてはというときに、筋少のヘヴィメタルの方向性ができかかった気がします。だからその次にギタリストを選出するときにも、やはりハードロック色のある人を、と思ったんじゃないですか。

――そして、『猫のテブクロ』（1989年）のタイミングで橘高さんが加入するという。

大槻　そうですね。

――それ以前の初期曲……例えば『仏陀L』（1988年）での「釈迦」はすでにサウンド的にもかなりスピード・メタル的であったり、「サンフランシスコ」ならば様式美的メタル・ナンバーとも言えます。どういった認識で作曲し演奏していたのでしょうか？

大槻　その頃は、今後どういうジャンルをやっていこうかがわからなくて。暗中模索で少年時代のいろんな引き出しから作っていったところ、結果的にああいうサウンドになったという記憶があります。僕らよくケラ（有頂天）さんのナゴム（レコード）でやっていたんですけど、ケラさんはメタルが嫌いで。それでメタルっぽいのはどうかなっていうのもあったんだけども、ナゴムでありながらメタル好きっていうのもけっこういて、それを中和していたのが筋肉少女帯だった気がするなぁ。

――ナゴムのライヴにあって、お客さんの反応というと？

大槻　ラウドなナンバーっていうのはやっぱり盛り上がりますよね。シンプルに盛り上がったんじゃないかな。

――それで"この音楽性はありだな"という感触を得たりも？

大槻　ただその頃は、僕はパンクの方向のつもりでやっていたかもしれない。パンクとヘヴィメタルって敵対関係にあって、ものすごく仲が悪かったんですけど、ちょうどGASTUNKが現われた頃からボーダレスになってくるんですよね。だから筋少もパンク、ニュー・ウェイヴっぽく、ヘヴィメタルがボーダレスになる境目に生まれたバンドだったような気がします。

「釈迦は」パープル、「サンフランシスコ」はELPを楽しむみたいな。（橘高）

――その後、『猫のテブクロ』で橘高さんが加入します。橘高さん本人としては、バンドがハードな要素を欲しているなという感覚はありましたか？

橘高文彦　俺の場合は経緯がおもしろくて。高校生時代のアマチュア・コンテストがありまして、俺が高三のとき、そのコンテストに筋少が出てきて。俺らは決勝にいったり個人でもベスト・ギタリスト賞や優秀賞をもらうタイプで、筋少は予選落ちするんだけどベスト・パフォーマンス賞を取るタイプだったんですよ。結果、ベスト・ギタリスト賞を取る高校生とベスト・パフォーマンス賞を取る高校生が今の筋少になっているというのがひとつの側面でわかりやすいところなんだけど。

――まさに（笑）。

橘高　ジャパニーズ・ヘヴィメタル・ブームの勢いもあって俺らは1984年にデビューしたわけだけど、その後に彼らもデビューして"え、そういうタイプだったんだ"って驚いたくらい。でもギタリストがいないということで、当時大槻君から連絡があったのかな。俺はAROUGEが解散して音楽スタジオでバイトをしていたんだけど、たまたま休みの日に連絡があって"これから2ndアルバムを作るんだけど、正式なギタリストがいない"と。そのときには横関（敦）さんに弾いてもらうことになっていると聞いて、"彼が弾くようなバンドになったんだ"って最初は驚きました。俺からしたらテクノの要素が強い感じだったので。

――そうかもしれませんね。

橘高　しばらくしてオーディションという形を取りたいということで、『仏陀L』と2ndのラフ・ミックスを数曲もらって。横関さんが弾いている曲は"こういう曲にはこういうギターを入れるよな"ってすぐにわかったんだけど、それよりも「サンフランシスコ」においてはプログレッシブな要素があるヘヴィメタルで、そのなかで特異な大槻ケンヂというヴォーカル。俺からしてみたらオジー・オズボーンみたいなもんだったの。最初にオジーを聴いたときみたいな"え、このヴォーカルなんなんだ"っていう。だから俺がもし筋少に入ってもっとハードな部分を強調したら、おもしろいものができるんじゃないかな、と。

――大槻さんとしては、『猫のテブクロ』にて橘高さんの個性をどれくらい出したいと思っていましたか？

大槻　おいちゃん（本城聡章）はわりとカッティングの人で、その前にいた三柴江戸蔵が超絶技巧のピアニストだったので同じようなキーボーディストを入れるのは不可能だし、じゃあソロイストを入れたツイン・ギターという体制に変えてみたらおもしろいんじゃない？って。若かったんでパッと切り替えて橘高君が来てくれて、芝浦で初お披露目ライヴをやったんですよ。僕もそのときに橘高君の初ステージを観たんです

ね。そうしたら始める前に袖がヒラヒラした服に着替えだしたんですよ！　そのヒラヒラ加減が自分のナゴムとかアナログ・パンクの世界とは違うもので、“ノヴェラかよ！”と思って（笑）。いざ始まったら、いわゆるへヴィメタル・ギター・ヒーローのスタイルだったわけですね。

——それまでは、AROUGEでのステージを観たことがなかったんですか？

大槻　今じゃ信じられないんですけど、当時はお互いのスタイルを知らないままバンドを組むっていうのはあったんです。橘高君の評判は聞いていたんですけど、考えてみたらそんなにちゃんと観たことがなかった。そこで初めて彼のスタイルを観て“わ、スゴい人が入ってきた”と。メキメキ弾いていたので“あ、これは筋肉少女帯がヘヴィメタルにシフトしていくのかな”とステージ上で思った二十歳前半の芝浦の夜でした（笑）。

——まるでお見合いのようなステージですね（笑）。

大槻　そもそも、僕はあんまりヘヴィメタルは通ってないんですよ。内田（雄一郎）君のほうが好きで、彼はわりとすぐに理解したんじゃないかな。彼は常にディープ・パープルとして解釈している感じがあったので。

橘高　『仏陀L』の「釈迦」なんかも、彼はパープルごっこみたいな遊び方をしていたと思うのね。「ハイウェイ・スター」とかのグルーヴを筋少に取り入れて、彼なりに楽しんでいたっていう。

——おぉ、“「釈迦」＝パープル説”！

橘高　あと俺、クイーンがすごく好きな子供だったんだけど、筋少に対して少しクイーン的なものを感じていて。例えばディキシーランド・ジャズだったり弦楽四重を取り入れようと思ったら、その人たちを呼んでやったりするでしょ？　でもクイーンってそれを自分たちだけで取り入れる。危険な言い方をすれば“似非でいーじゃん”って、それがクイーンのすごくいいところだなと思っていて。筋少も今に至るまでいろいろなものにインスパイアを受けて、いろいろなジャンルのものを取り入れているんだけど、基本的にはそれをそのジャンルの人と同じように再現しようとは思っていなくて、自分たちでそれを楽しむっていう。

——おぉ、“筋少＝クイーン説”！

橘高　それを振り返ると、内田君の「釈迦」

大槻ケンヂのヴォーカルは、俺からしたらオジー・オズボーンみたいなもの。だから俺が筋少に入ったら、おもしろいものができるんじゃないかと。——橘高文彦

はパープル・テイストで遊んでみよう、「サンフランシスコ」では ELP を楽しんでみようみたいな。そのコンセプトを"楽しむ範疇"でやるからバンドのオリジナリティが崩れないというのかな。筋少の、そのある意味クイーン的な音楽に対する姿勢に共感できたの。つい"モロのこと"をやらないと非難されるんじゃないかと思っていたけど、AROUGE を解散してから"何かをなぞっている間はオリジナルじゃない"ってことに気づいて。俺は本当に純粋な本職メタルなんだけど、ほかのメンバーと一緒じゃないとオリジナルにはならない。逆に言うと、俺のクローンを集めてバンドを組んでも、やっぱり何かみたいなものになってしまう危惧を感じていたんです。

「イワンのばか」がきたときは"ここまでメタルか！"と（笑）。（大槻）

——そんな橘高さんのカラーがより出てくるのが、『サーカス団パノラマ島へ帰る』（1990 年）なのでは。作曲を担当した「詩人オウムの世界」はすごく筋少的でありつつ、スピード・メタルでもあり。さらに同年に出る『月光蟲』の「イワンのばか」では、橘高さんのメタル魂が炸裂しつつも、決して筋少の枠をはずれていないという音楽性を完成させました。

大槻　「イワンのばか」のデモ・テープがきたときに、"いや、ここまでメタルか！"と思ったんですよ（笑）。

——ハハハ、メンバーとしては。

大槻　メタル的なアプローチをしていくことにはなるだろうけど、ここまで本格的な正統派ヘヴィメタルをやるんだっていう驚きがありまして。やはり僕もジャパニーズ・ヘヴィメタル・ブームは通過していて、5X とか 44 マグナム、マリノとかいろんなジャパメタを見てきたときに"歌詞が違うな"って……上目線で言うんじゃなくて、自分が影響を受けてきた歌詞とはまた違うものだなと思ったんです。だから僕には遠藤ミチロウ（ザ・スターリン）さんとか町田康（INU）さん、巻上公一（ヒカシュー）さんとかが書くようなニュー・ウェイブの歌詞のほうがビンビンきていたので、そこがちょっと相容れないなと。「イワンのばか」とか「詩人オウムの世界」なんかの正統派ヘヴィメタルがきたときに、さてここにどうやって自分が影響を受けてきた人々のテイストを、そしてナゴムの雰囲気を入れていくかっていうのが課題なんだなと思いましたね。

——それこそが、筋少の血を入れるということでもありますよね。

大槻　ものすごい正統派なヘヴィメタル・サウンドに対抗しうるには、邪道なナゴムの詞しかないなと思って。それをぶつけ合うことで、何か化学変化や異化効果が生まれるんじゃないかなと思ったように記憶しています。

——橘高さんとしては、こういった正統派なメタルを筋肉少女帯でやってやろうという気持ちがあったということですよね？

橘高　バンドに所属しつつも自分のライフワークはヘヴィメタルで、しかも自分自身が完成させたいヘヴィメタルっていうのがあって。だから楽曲を出すときって、自分のライフワークを出すみたいな。『猫のテブクロ』では自分の曲は書いてないんですけど、メンバーとしてまずは筋少というものを体感して、"ここで俺のストイックなヘヴィメタルを出しても筋少になるだろう"という確信を持ったあとに『サーカス団〜』で出していったから。

——大槻さんなら、それに筋少らしさを加えてくれるとわかったと。

橘高　きっと大槻ケンヂなら、これに"悪魔と戦って"とかじゃない歌詞を乗せて、オリジナルのヘヴィメタルにできると信じていたので出せたというのがあるかな。もし加入してすぐだったら、"何で歌詞書くんだよ"ってなったと思う。逆に言うと、「詩人オウムの世界」や「イワンのばか」でやっと自分が聴いたことのなかったヘヴィメタルが生まれたなって。

——大槻さんはこういったタイプの曲を歌っているとき、"ここではメタル・シンガーだぜ"という気持ちになるものですか？

大槻　いろんなイベントでヘヴィメタル・シンガーの方と共演する機会が多くて、それこそ坂本英三さんとか二井原実さんとか寺田恵子さんとかとセッションしたりもするんですけど、そういうときに"僕はヘヴィメタル・ヴォーカリストではないな"と、ものすごく思いますよね。ヘヴィメタルを愛して歌っている人は、ヘヴィメタルを歌うために生まれてきたような……もう体力も精神力も違うんです。だから同じ部分で歌ったらとてもじゃないけど勝てないなという気持ちがあって。ヘヴィメタルな曲はどうしてもヘヴィメタル的に歌わないと形にならないんですけど、寄せはするけどそうはならないようにと考えて歌ってはいますよ。

橘高　大槻君はそうは言ってるけど、ヘヴィメタル的視線で言うと、彼みたいにラウドな音のなかでも会場の一番うしろまで声を響かせうるヴォーカリストってとても少なくて。それは熱なのか声量なのか……俺は声に含まれる倍音成分の効果も多分にあると思ってるんだけど……大槻君のうるさいなかでも会場全体に声が届くという点は加入時から魅力に感じていたところで、それを確信したうえでヘヴィメタル要素を押し出していたところもあったんだよね。

大槻　それこそギターもそうだよね。たまに無茶苦茶ウマいんだけど、あまり聴こえてこない人もいたりするから。でも最近になって思うのは、中高生時代にもっとヘヴィメタルを聴いておけば良かったなって。ラウド・ヴォーカリストのテクニックみたいなものも、いろいろあるんだろうな。

橘高　ただそうじゃなかったから、俺は筋肉少女帯のオリジナリティに魅力を感じたんだけどね。

——そうですね。それこそ、何かのコピーになってしまっていたかも。

橘高　「元祖高木ブー伝説」の冒頭でブレイクして"高木、ブー！"ってシャウトするんですけど、そのシャウトに尽きるというか。そこではパンキッシュな表現に聴こえるんだけど、それが「イワンのばか」みたいな正統的ヘヴィメタルの上だと、それはラウド・ロックなシャウトになると思っていたのね。よく"いつもどおりの大槻ケ

ンヂでやってくれ”ってお願いをしていたんだけど、それはそういうことだったんだよ。

大槻　歌唱法で影響を受けたヴォーカリストがいるとしたら、町田康さんだもんな。つまりルーツにはジョン・ライドンで、そこからラウド・バンドのヴォーカルっていうのはなかなかいないだろうからね（笑）。

橘高　パンクもヘヴィメタルも、結局はラウドな音のなかでシャウトしてきたっていう意味では似ていて。だからその後のヘヴィメタルの進化には、パンクとミクスチャーしていった時代があるじゃないですか。

――パンクとメタルの融合といえばスラッシュ・メタルもそのひとつですが、筋少的スラッシュと言えば「スラッシュ禅問答」があります。

橘高　あれはクイーン的で、スラッシュ・メタルの人に聴かせると“あれはスラッシュじゃない”って。

大槻　え、スラッシュじゃないの！？

橘高　今で言うメロスピだよね。ただ大槻ケンヂがああいうメロスピを聴いたときに“スラッシュっぽい”と思って「スラッシュ禅問答」ってタイトルをつけるところが筋少のおもしろさで。本物をちゃんとやらなきゃいけないって人だったら、あのタイトルは怖くてつけないわけ。

大槻　そうだったんだ～。今の今まで、ああいうのをスラッシュ・メタルだと思っていました（笑）。あと、90年代後半くらいからメタルって全部ハネる感じになった印象があるんですけど、筋少ではいわゆるハネたメタルってそんなにないんじゃないかな。

橘高　実は筋少はけっこう早い時期にミクスチャーのファンク・メタルみたいなものには手を染めていて。本城君の16ビートをベースにしたものに俺がヘヴィメタル風のアレンジを足すことで、ファンク・メタルみたいな曲になって。これをストイックなヘヴィメタルの人が嫌いなのは重々知っているんだけど、俺もすごく切磋琢磨して“これって合うのかな”と思いながらアレンジを加えた覚えがある。

大槻　じゃあ、オーケンが常々思っていた筋少のメタル的謎で、7弦ギターや5弦ベースをやらないのは？

橘高　ブラック・サバスなんかでもダウン・チューニングをしていたりして、音楽ジャンルで言うと決して新しいわけではないのよ。低音が出せる楽器と音響の時代になっ

て刺激的な部分だったんだけど、俺からすると"麻薬的な逃れられない快感"にも感じて。だから今も、あえてやらないようにしているだけで。

大槻　レギュラーかダウンかで相当変わるんでしょ？

橘高　変わるね。とても刺激的だし、ラウドな音楽で人を威圧するには最高の発明なんだけど。パンキッシュな要素が強くなっていくという意味では筋少にも合っているから、クイーン的な解釈でいうとやっちゃってもいいんだけど（笑）。

大槻　うーん、勉強になります！

――メタル・チューンで言えば、「再殺部隊」もはずせません。

橘高　大槻君も俺も、お互いが交じらないように曲を作ってきた歴史があるんだけど、そういう意味であの曲は大槻君の小説ともリンクしていて、一曲で映画的な世界観が浮かび上がり、それでいて激情がヘヴィメタルという音楽に乗って表現されている最初の曲だと思っているの。世の中にない筋少独自のヘヴィメタルを目指してきたんだけど、自分にとってもすごく記念碑的な楽曲です。

――ちなみに、スピード・チューンとして一番速い曲は「ヘドバン発電所」ですか？

橘高　うん。BPMという意味ではあれより速い曲もあるんだけど、"しっかりツーバスを踏み切って"での最高点は「ヘドバン発電所」。「イワンのばか」のテンポの上がった最高地点があそこかな。

こういう音楽が、閉じた時代でも力強いものになれば嬉しい。（橘高）

――さて、メタル的な話をしつつ、実際にはさまざまなスタイルを持っている筋少の、その多様なカラーが出た一枚が、今回の新作『君だけが覚えている映画』です。本作には、その名も「COVID-19」があり、コロナ禍を映した楽曲であれば、それこそ重々しい曲調であったり、悲壮感のあるものだったりと選択肢があると思いますが、本曲はパワー・バラードとなりました。

大槻　僕がパンデミックに対してセンシティブというか、歌詞を書く者として思うところは、今回コロナ禍による分断であるとか人間そのものの尊厳であるといったことに広げていこうと思ったことですかね。それで内田君が作った曲がハマりがよくて、そのものズバリにしたという。

――曲調と歌いたいテーマが合致したと。

大槻　このアルバムを作っているとき、今後コロナ禍がどうなっていくかわからない時期だったんですよね。歌詞を書いている頃は非常に良くない状況だったので、ネガティブに捉えていた部分があったんですけど、なんか楽曲としては読みどおりになったというか、緊急事態宣言も明けてっていう時期になりましたね。

――まさに"その先に希望あり"という曲に感じました。

大槻　そうですよね。希望を歌ったほうがいいでしょうからね。

――そして、そんな「COVID-19」に続くのが、我々メタル好きが待ってましたの「大江戸鉄炮100人隊隠密戦記」です。曲順的にもそろそろくるんじゃないかな、と（笑）。

橘高　ありがとうございます（笑）。

大槻　これも実はパンデミックに関わっている詞で。そもそも《撃ちまくれ　撃ちまくれ》って、ワクチンを打ちまくれという状況にかけてるのかも？“鉄炮百人隊”自体は江戸時代に本当にいて、ただ結局は泰平の世で一度も出撃することなく終わったんですけど。でも“実は一度だけ出撃したことがある”という架空の小説を書こうとしていた時期がありまして、さすがに時代モノは難しかったんですけど、今回それを楽曲に入れてみようかと。いわゆる「詩人オウムの世界」から始まった様式美なロックのテーマを決めるというのも、なかなかおもしろいですよね。ロックンロールなら“お前が好きだ”ってずっと歌っていればいいわけですけど、様式美なヘヴィメタルは抑揚があるのでどうにも展開しないと始まらない（笑）。だから昔からあの手この手でいろんな歌詞を書いていて、最近は怪談モノが多かったんですが、今回は時代モノにまでいったという。次どうするか怖いですよぉ！

――ハハハ、なるほど！　曲構成としては、どのようなテーマがありましたか？

橘高　さっきも言ったように自分のライフワークみたいなもので、毎回自分のオリジナリティ溢れるヘヴィメタル・ミュージックを体現したいなと思っていて。これまでは“アルバムを作ってツアーをして、またアルバムを作って……”を40年弱やってきたわけですけど、今回はライヴができない、お客さんとのコール＆レスポンスができないと思っていて。今までは「イワンのばか」でも、“イワンの……ばか！”って想定していましたから。

――ここでお客さんが声を上げてくれるってパートですよね。

橘高　そう。だからこのアルバムのソングライティングがどうなっていくのか、自分でも興味深かったんです。で俺、中学のときに不登校だったんですけど、考えてみたら今のパンデミックの状況に似ていて。不登校の少年を救ってくれたのはヘヴィメタルだったし、ライヴを想像してかろうじて外とつながって戻ってきたっていう経緯があるから。

――メタルのパワーが背中を押してくれたわけですね。

橘高　だからこういう音楽が、この閉じた時代でもすごく力強いものになれば嬉しいな、と思って初めてトライした経緯もあって。この曲が書けたことで自分自身を鼓舞できるアルバムにもなったし、激しい楽曲は前向きになれるって改めて感じましたね。

▲本城聡章（g）、内田雄一郎（b）、大槻ケンヂ（vo）、橘高文彦（g）／L to R

――本当に、メタルのパワーで少しでも街が活気づけばと思います。

橘高　メタルってフィジカルな要素がすごく多くて、みんなが死に物狂いで楽器を鳴らすことで溢れてくる生きたパワーに俺も救われたんだって、一周してわかったっていうか。

――ですね。ちなみに曲を聴く前はタイトルで曲調を想像するんですが、「OUTSIDERS」もそっち系かなと思ったら哀愁系バラードでした（笑）。

橘高　“きっと想像どおりじゃない”というお楽しみを何十年もやってきたバンドだなって自分たちでも思います。だって届いた歌詞見ていつもビックリするんだもん。

――まずはメンバーがビックリ（笑）。そんなバラエティ豊かな本作ですが、きっとメタル・ファンも全篇で楽しめるのではと思います！

大槻　ちなみにヘヴィメタルが好きな方にぜひお聞きしたいんですけど、筋肉少女帯がヘヴィメタル・バンドだという認識をどの程度されているのかな？

――個人的な感想ですが、初期の代表曲に「イワンのばか」や「サンフランシスコ」といったハード・チューンが多いということと、当時のルックスとして橘高さんはもちろん、大槻さんのロングのソバージュだったというイメージも強くインプットされていて、そこから“メタル・バンドでもある”と思っている人も一定数いるのでは……。

大槻　なるほどなるほど、わかりました。いわゆる“ヘヴィメタルのエリア”に入れていただけても対応するバンドなんだ、って僕は思います。でも逆に完璧なるヘヴィメタル・バンドだと思われてしまうのも、大槻ケンヂ的には違うのかなって複雑なところはありますね（苦笑）。

橘高　それこそクイーンがさ、グラム・バンドなのかプログレ・バンドなのか、ハードロック・バンドなのか……そこを取っても筋少ってクイーン的かなと。それゆえのネガティブなことも味わってきたし、それゆえ得てきたものもあるっていう独特な距離を持ったバンドだなって。さらに俺に至ってはヘヴィメタ村にはヘヴィメタじゃないって言われたし、ナゴムにはナゴムじゃないって言われてきた33年間だから。そういう意味では、それこそがヘヴィメタルだなとむしろ思ってる。

大槻　なるほどね、それこそが筋肉少女帯の特異性というかね。

――ですね。では、ぜひ『METAL HAMMER JAPAN』に出るときはメタル・バンドの顔でお願いします（笑）！

大槻　ちなみにライヴでのお客さん入れのSEは、よくモーターヘッドがかかっています。パンク、ニュー・ウェイヴの人も、ヘヴィメタルの人もみんないいっていうのはモーターヘッドだけなんですよねぇ〜。

ヘヴィ・ギタリスト"温故知新"対談!

聞き手と写真：オカミ・タカヒデ

PATA (X JAPAN/Ra:IN) × 吉田"HALLY"良文 (UNITED)

ここにふたりのギタリストが10数年ぶりに顔を合わせた。ひとりはX JAPAN、Ra:INのPATAだ。言わずと知れた日本を代表するロック・バンドのギタリストであり、エッジィなリフ・ワークで、90年代のメタル〜ヴィジュアル・シーンに大きな影響を与えた。片や吉田もUNITEDのギタリストとして7弦ギターを暴れさせ、日本のモダン・ヘヴィネス・シーンを草創期から盛り上げてきた。
実はこのふたり、同学年・同県出身であり、10代の頃から鎬を削ってきた盟友でもある。今回の対談では、そんなふたりの"着飾らない"会話から、当時の空気感を体感し楽しんでほしい。……やはり、お酒を呑んでいると何かが進展するということを再確認！

PATAは、ロックがわかるヤツがニヤッとするようなフレーズ弾いたり。——HALLY

PATA　うわ〜、久しぶり。最後に会ったのはいつだ？

HALLY　話すの何年ぶりだろ。でも俺はPATAが出ているの観てるんだよ。

PATA　マジか？　でも直接話すのは……西千葉か！　稲毛だ！

HALLY　もう20年近く前か〜（遠い目）。

——おお、そんなに久しぶりでしたか！　では呑み始める前に、ふたりの写真撮影をしてしまいましょう。

HALLY　いや、俺の写真はいいよ。

PATA　じゃ、俺の写真もいいよ。

HALLY　イラストにしちゃえば？

——いや、それはおかしいでしょ……こちらにお願いします……。

†

——ということで、改めてよろしくお願いします！　直接会うのは相当久しぶりだったんですね。

HALLY　ただ、さっきも話したんだけど、オレはX（JAPAN）のライヴはちょくちょく観ているんですよ。LUNA SEAのとき（《LUNATIC FEST.2015》）とかジーン・シモンズが来たとき（《VISUAL JAPAN SUMMIT 2016》）とか。こんな小っちゃくだったけど、東京ドームだって1回行ったよ。あれはいつだったんだろう？

PATA　相当やってねぇからな。

HALLY　確かジャイアンツ戦をトバしてやったとき。本当は巨人の開幕戦だったっていう。

PATA　違う違う、Xのせいで開幕戦がなくなるわけないでしょ（笑）。そうだったら俺が怒るわ！　だから実際には、千葉の居酒屋で呑んだのが最後だったかな。ただ、すでに今は久しぶりな気がしないんだけど。

HALLY　会えば"よう！"みたいな感じだから。

PATA　もともとは10代から知ってるんだもんね。

——そもそも初めて会ったのはいくつ頃のことになりますか？

HALLY　18〜19歳くらいかな。地元としてはまったく一緒ではないけど、俺が前にやっていたディメンシアっていうバンドと彼がやっていたジュディってバンドが、稲毛にある楽器屋さんの貸しホールでよくライヴをやっていて。それが最初だよね。それまでは接点がなかったから。

PATA　HALLYが幕張で、俺が西千葉なのよ。その間の駅が稲毛で、そこの楽器屋に集まってて仲良くなって、近くで呑んだり遊んだりしてて。

——年齢も一緒ですよね。

PATA　うん。その頃からディメンシアはけっこう有名だったから。俺、HALLYのローディをやったこともあるんだよ。

HALLY　あ〜、そんなこともあったね。俺は遊びに来てもらいたかっただけなんだけど（笑）。

PATA　遊びに行って、エフェクター1個か2個つないで"はい"って。あとはバミってそれで終了って感じだったけど。それでディメンシアのみんなとも仲良くなって呑

取材協力：FROM DUSK TILL DAWN Shinjuku

新宿は歌舞伎町にある、ロック＆ヘヴィメタルなどを楽しみながらお酒が呑めるロック・バー。週末には DJ パーティーも開催。

営業時間：20:00 ～ 5:00
所在地：東京都新宿区歌舞伎町 2-27-7　第 7 金嶋ビル 3F
TEL：070-6486-2666
Web < http://www.f-d-t-d.com/ >

10代の頃は仕事をしていると思っていたけどな。その頃の自分に"まだギターを弾いてる"って言ったら、ゾッとすると思う（笑）。

みに行って。最終的にメンバーの家で寝て次の日に解散みたいな。

――当時のPATAさんってどんな人だったんですか？

HALLY　なんかカッコよかったよ。レス・ポール・カスタムとか持って。それでうまかった。音楽をよく知っていて、ロックがわかっているヤツがニヤッとするようなフレーズを弾いたりもしてね。そういうのを見て"やるなー"って。

PATA　HALLYもレス・ポール使ってたよね？　彼は速弾きの人でしたよ。

HALLY　でも俺のは昔の速弾きだから。

PATA　でも右手の刻みも速いから。俺がX入ってからも"ヒジから刻んだほうがいい"とか、そういう話はしていたよね。でも印象は全然変わらないかな。今、話していても変わらない。

――当時の千葉のハード系シーンには、その後大きくなっていくバンドがたくさんいましたよね。実際、どういった雰囲気だったんでしょう？

PATA　大きく千葉って言ってもXは館山のバンドだから、俺らのテリトリーとは違う。しかもライヴをやるのは都内がメインだったから。

HALLY　そうだよね。千葉でも上のほう……市川周辺、本八幡（※市川市）とかのほうが多かったのかな。多分、東京のバンドが来やすかったんじゃないかと。あれ、ジュディはYOSHIKIが叩いていたこともあったよね？　俺、プロージョン（[神楽坂エクスプロージョン]）で観てるよ。

PATA　3回くらいあるんだよ（笑）。それこそ多田屋（※楽器店のイベント・スペース）でやってるよ。

HALLY　いや、多田屋はXでしょ。

PATA　違う違う、ジュディでYOSHIKIが叩いてるよ。

HALLY　そうだっけ？　あれでしょ、大暴れして"こっち系"の人が出てきちゃったやつ（笑）。いや、あれはディメンシアとXだよ。

PATA　とりあえずToshIがサンダル姿でローディをやっていたのは憶えている。たいがいディメンシアとXがいると、ろくなことにならないから（笑）。ただディメンシアもモテるバンドでしたよ。

HALLY　そんなことねーわ。

成人式の日に偶然会って
サイゼリアに行って呑んだっけか。
――PATA

――今もって"HALLYさんはXのメンバーだった"説が、まことしやかに語られていますよね。実際のところは？

HALLY　2週間くらいね。

PATA　俺、HALLYがイントロを作った曲やっていましたよ。あのときのベースってTAIJI？

HALLY　そう。でもライヴは1回もやってないし、"通用しねーな"って自分から辞めたクチだから。そんな音楽性がどうのこうのって言える立場じゃない。

――そもそもは、どういった流れで声がかかったんですか？

HALLY　当時TAIJIと一緒にディメンシアをやっていて、TAIJIが脱退してXに入るってときに"一緒にどう？"って。その頃は"もうちょっと何かできるんじゃねーかな"って……18歳くらいで子供だったし、そういう欲もあったんじゃないかな。"じゃあちょっと練習行ってみるよ"ってギターを持って行ったの。それでやるかってなったんだけど、そんなにうまくはいかないよね。

PATA　その頃も仲良くって遊んではいたよね。成人式の日に稲毛の楽器屋さんに行ったら偶然会って、それでもうひとりとサイゼリアに行って呑んだっけか。

HALLY　よく覚えてるね。

――成人式の日に会うくらい仲が良かったんですか。

PATA　別に電話して会おうって言ったわけじゃないから（笑）。たまたま暇つぶしに行ったヤツが3人集まったの。

――それでも、運命的なものを感じますよ。そして今もテーブルを挟んでいるという。

HALLY　こんなことやってるなんて、想像もつかなかったよ。だいたいこの年までバンドをやってると思わないから。

PATA　むしろ、雑誌で正式な対談をするなんて誰が想像しますかって。これぽっちも考えたことがないですよ。

――ちなみに、PATAさんがXに入る流れ

を改めておうかがいしますと。

PATA　ジュディはドラムが辞めてたんだけど、すでにライヴが入っていたんですよね。それでそのときはXはやっていなかったのかな……館山でドラムをやっているのはふたりしかいなかったので、YOSHIKIに頼んだら“いいよ”って話になって。それでそのまま引っこ抜こうと思ったら、逆に引っこ抜かれたっていう（笑）。

――そしてさっきの話にあるように、ディメンシアとXが対バンをしたりして、そのシーンはさらに大きくなっていくんですね。

HALLY　俺がユナイテッドに入ったのが22歳のときだから、PATAがXに入ったほうが早いよね……じゃ、もう40年くらいやってるの？

PATA　いやいや、34年くらいだよ（苦笑）。俺は二十歳のときからXだから。俺はHALLYがユナイテッドに入ったってビックリしたよ。

HALLY　そうそう、俺がユナイテッドに入って最初のライヴに来てくれたんだよね。[目黒鹿鳴館］だったんだけど、PATAが観に来てくれて。

――やっぱり仲いいじゃないですか！

PATA　だっておもしろいじゃない（笑）。意外とは思わなかったけど、“なるほど”とは思いましたよね。横ちゃん（横山明裕）に誘われたの？

HALLY　まぁ、横山さんに誘われたら断れないよね。ディメンシアもベースが決まらなくて全然活動していない状態で。ただ俺は割とまだまだギターを弾いてバンドがやりたいと思っていたから、横山さんに声をかけられてとりあえずギターを持ってスタジオに遊びに行って、そのあと酒呑んで勢いで入っちゃった。

――ハハハ、やはり酒の勢い！　ちなみにXとユナイテッドも、古くから交流があったものですか？

PATA　俺個人としては、そんなにだね。多分バンドの名前もYOSHIKIから聞いたんだと思う。

HALLY　当時のXと当時のユナイテッドは、何回か対バンしていたと思う。まぁ、当時はメイクしているからとかじゃなくて、仲がいいから対バンするというのがあったから。その直後からヴィジュアル系とかが出てきて。

PATA　やっている音楽もちょっと変わってくるからね。

LAの日本風酒場なんだけど隣にジョー・ウォルシュもいて（笑）。――HALLY

――1980年代中～後半の両バンドは、まさにスラッシュ・メタルを突き進んでいました。その頃は“激しいサウンドならスラッシュ！”という風潮でしたか？

HALLY　どうなんだろうな、速い曲が好きか嫌いかなんじゃないかな。

PATA　そのときつるんでいたなかだったら“誰が速いのか、どの曲が速いのか”だったんだけど、全体的に見るとそういうわけでもないんだよね、きっと。

――一緒にプレイしたことは？

HALLY　それはないね。一度、楽器屋さんで隣で弾いていたことがあった気もするんだけど、覚えてないなー。

PATA　あれ、確かガールの「ハリウッド・ティーズ」やったよね？　今思い出したよ……なんでそうなったのかは覚えてないんだけど。

HALLY　おうおうおう、楽器屋さんの貸しホールで。PATAはもうXで、俺はユナイテッド……いやまだディメンシアだったかも。まぁ、やっぱりPATAはうまかったよ。ラウドネスのコピーもやってたよね？　それも観てるな。

PATA　けっこうディメンシアのライヴには遊びに行ってたから、その頃のHALLYはしょっちゅう観てた。“今日ダメだな”とか“今日はイケてんな”とか、そういうのはありましたよ。

HALLY　俺もPATAもタイプ的には最初は似ていたかもしれないけど、その後どっぷりスラッシュのほうにいっちゃったじゃない。それでやっぱりリフも変則的なこととかやるようになったりして、だいぶ俺が変わっちゃったのかもしれない。

PATA　俺、そこにはついていけないんで。あんま考えてギター弾いてなかったからなぁ（笑）。

――いやいや、PATAさんの刻みも相当ビッシビシでしたよ！

PATA　あの頃の自分を聴くと、うまかっ

そうそう、俺がユナイテッドに入って最初のライヴが［目黒鹿鳴館］だったんだけどPATAが観に来てくれて。

たなって思うよね。“ああ、弾けたんだな”って（笑）。

HALLY　最近は俺もそういうの多々あるよ。

PATA　モダンなことはできないし、いまだに“スウィープ・ピッキングってなんですか？”って感じだから。とりあえずネックに右手持ってっちゃいけない人だから（笑）。でもそこはHALLYも変わってないっちゃ変わってないよね。

HALLY　両手タッピングをするわけでもないし、がっつり握って弾くタイプだから指を立てて速弾きもしないしね。確かに変わってないよ。

――それは昔から自分のスタイルを突き進めていたということでもあると思います。さて両バンドは、Xならば1988年に『Vanishing Vision』、ユナイテッドならば1990年に『Bloody But Unbowed』を作り、それまでよりも大きく世の中に音が届くようになりました。

HALLY　雑誌を観ると載っているから、頑張ってるんだなーって。こっちはまだ出ていなかったから。

――そこに“悔しい”という気持ちはあるものでしたか？

HALLY　彼はもう爆発的に売れちゃったから……こっちも頑張んなきゃなとは思ったけどね。どっちかというと俺はヴィジュアル系を落第したクチだから、もうユナイテッドで頑張るぞみたいな。

PATA　でも『Vanishing Vision』を作っている最中は俺まだ稲毛で、そのときも会ってる気がするんだよね。

――ちなみに同作には「紅」（「KURENAI」）が収録されていますが、先日はYOSHIKIさんのTwitter上で“教科書にも載っている”と話題になっていましたよね。

HALLY　へ～、どこの小学校？　館山？すごいね！　ビートルズとかと同じで、偉大な曲って教科書に載るんだね。

――高校野球の応援歌としても、もう定着していますしね。

PATA　それはいまだに聴きます。“この曲なんか知ってんな”って思うと、あ、この曲弾いたことあるって（笑）。

――ハハハ、俺弾いてるな、みたいな。その後ユナイテッドはさらにモダンなスタイルとなり、Xも言わずと知れた規模での活動となっていきます。

HALLY　90年代はバリバリやっていたもんね、大変だろうなとも思っていましたよ。あ、LAで一回呑みに行ったよね。そこにはHIDEもいて。

PATA　横ちゃんがHIDEに連絡を入れたのかな。HIDEが“横ちゃんと呑むんだけどつき合ってくんね？”って。あのふたりは幼馴染なんだけど、会うと絶対にケンカするから。それで行ったらHALLYと慎吾（大谷慎吾）ちゃんが。

HALLY　大谷さんと横さんと俺の3人と、PATAとHIDE……地元の日本風酒場なんだけど、隣にジョー・ウォルシュもいて（笑）。“スゲーな、サインもらおうかな”って。

PATA　あのお店はジョーさんの行きつけだったの。HIDEと横ちゃん喋ってるから、3人で外に出てタバコを吸ってくっちゃべったよね。LAには5年くらい住んでいて、まぁアパートがあって行ったり来たりだったんだけど。あのときユナイテッドはなんでロスにいたんだっけ？

HALLY　なんだったのかな、レコーディングか……いや、ライヴやったんだ。ライヴをやって、帰る前日だったんじゃないかな。

PATA　いや、どこかでやって、もう1ヵ所……サンフランシスコに行くとか言っていたような。それでその合間に横ちゃんがHIDEに連絡を入れて呑んだんだ。多分店もHIDEが決めたんだろうね。ユナイテッド・チームがどこに泊まっているかも考えずに、俺らはよく行く店だったからそこにしようって（笑）。

HALLY　結局アメリカでのライヴはあれ以降やってないよ。メンバー・チェンジも

LIVE INFORMATION この12月には、両バンドのライヴがそれぞれ開催！

Ra:IN

フェスへのゲスト出演で、2年ぶりとなるライヴが再開！

《-ALLDEADDIESFES2021-》
日時● 2021年12月21日（火）
開場：15:00／開演：15:30
会場● CLUB CITTA'（川崎）
出演● dieS／ZIZ／test-No.／MADAME EDWARDA／emmurée／AGE of PUNK
［Special Guest］Ra:IN
◎バンド・オフィシャルHP
＜ https://rock-and-inspiration.com ＞

UNITED

2年ぶりとなる年末恒例のワンマン・ライヴ！

《INFECTIOUS HAZARD 2021 ONE MAN》
日時● 2021年12月28日（火）
開場：18:30／開演：19:00
会場● SHIBUYA CYCLONE
出演● UNITED
◎バンド・オフィシャルHP
＜ http://www.united-official.com/pc/ ＞

けっこうあって、タイミングが難しかったんだよね。

――そんな海外での接点がありつつ、やはり90年代はお互い忙しくなかなか会う機会のない時代ですか。

HALLY　なかったね、彼は忙しいから。

PATA　ただ、もともと示し合わせて会おうとかっていうことがないじゃん。

――そう思うと、成人式の日や海外で偶然会えちゃうっていうのが逆にスゴいです。

PATA　たまたまですよ。笑えるけど。

とりあえずやり続けたらおもしろいことがあるかもよ。――PATA

――それからもキャリアを積んだ現在、フィジカルという面では20代、30代のときと比べるとどうしても落ちてきてしまう部分はあると思います。それでも、"ハードなギター・サウンドを鳴らす"という気持ちは変わらずですか？

PATA　この音しか出せないからしょうがないよね。

HALLY　結局、今自分がやれることしかできないからね。渋くブルースを弾いたりファンキーなカッティングしたりとかカッコいいと思うけど、どっちにしろそれもできないからコレでいいんだと思うよ（笑）。

――先ほどと同じ話になってしまいますが、やはり少年の頃から目指してきた音に一途なんですよね。そしてそれがファンに求められている音にもなっていると思います。

PATA　求められているのかはわからないけど、俺はコレしかやってないからね。

HALLY　意識して作ったつもりもないんだけどね。いろいろまわりに影響されてきたってところもあると思うし。

PATA　"そして今に至る"ってやつだろ。考えてみりゃ"あのとき努力してりゃーな"とか、いろいろありますけどね。

――実際に、10代の頃に描いていたヴィジョンを、ここまで歩んできた道のりと比べるとどうですか？

PATA　10代の頃、俺はちゃんと仕事をしていると思っていたけどな。その頃の自分に"俺、まだギターを弾いているんだけど"って言ったらゾッとすると思う（笑）。

HALLY　同感。少なくともこの年でバンドをやっているとはまったく思わなかったよね。50代後半に差しかかってまでやっているなんて想像もつかないよ（笑）。ただ、まだ先輩たちも頑張っているから俺らもやれるって。

PATA　それを考えちゃうとそうなんだよな。もっと先輩もいるから……キッス先輩とか（笑）。彼らと比べたら俺らガキじゃん。だから先輩たちがいるからやれているんだなっていうのもあるからね。自分たちが10代のときなんて、30歳近い人を"ジジイじゃん"と思っていたけど、そんなこと全然ないんだよね。

HALLY　30歳って、今考えたら全然若手だよ。

――では、30代のバンドマンで"そろそろバンド辞めるか……"なんて考えている人がいたら、"いや待て"と声をかけたい？

HALLY　なんかね、頑張ったほうがいいと思うよ。簡単に諦めないで頑張ったほうがいいです。

PATA　とりあえずやり続けたら、なんかいいことがあるかもよ。おもしろいこともあるかもよ。

HALLY　俺がこの年までやれているのって、正直運がいいだけだよ。まわりに助けられて引っ張られて、なんとかやってたらこの年になっちゃっただけの話。本当に運がいいだけですよ。

PATA　俺はYOSHIKIに引っこ抜かれてどうのこうのあって、結局こんな感じになっちゃってますけど。HALLYだって、横ちゃんに引っこ抜かれてユナイテッドの人になったわけでしょ。

――出会いというものの大切さも、改めてわかりますね。

HALLY　やっぱ運だな。やり続ければ運もついてくるよ！

PATA　うまいこと言うな。

――運も実力のうちですから（笑）！　さて、そんなふたりの今後の目標と言いますと？

PATA　ない（笑）！　まぁ、もうちょっとギターを弾いていられればいいかな。12月には久しぶりにRa:INのライヴも決まっていて、イベントのゲスト出演なんだけど"肩慣らしにやりませんか"って声をかけてもらったんで。

HALLY　いいライヴをやって、お客さんが喜んでくれればそれがいいよね。今年はコロナでなかなかライヴができなかったけど、俺らも年末に1本入っているから。

PATA　どこでやるの？

HALLY　渋谷の［サイクロン］。あ、そうだPATA、俺はいつも観てるんだから、たまにはユナイテッドも観にきてよ！

PATA　え〜、考えとく（笑）。

Damian Hamada's Creatures

ダミアン浜田陛下が語る
聖飢魔Ⅱ結成前夜、日本でのヘヴィメタルとはどういったものだったのか!?

聖飢魔Ⅱの始祖であり、現在はDamian Hamada's Creaturesを率いるダミアン浜田陛下。彼が世を忍ぶ仮のロック青年だった1970～80年代、日本におけるヘヴィメタルとはどういったものだったのだろうか。聖飢魔Ⅱを始動させ数々の名曲を生み出したとき、世界のメタルからの影響はあったのか？ そして最新大聖典『魔界美術館』には、陛下のどのような美学と魔力が込められているのか！？

現在とはまったく違った＜時間の流れ＞・＜情報の伝達＞・＜機材性能＞だったあの頃、音楽を志した多くの若者たちが共有した情熱と感情が、今、よみがえる。

Interview by Takahide"THUNDER"Okami

Profile：ダミアン浜田陛下

聖飢魔Ⅱの初期の楽曲のほとんどを手がけ、地球デビュー前に魔界に帰還した地獄の大魔王。魔暦22年（2020年）、聖飢魔Ⅱが果たした人類への悪魔による洗脳をより強固なものにすべく、改臓人間を従え、Damian Hamada's Creaturesとして人間界に顕現。11月には初のライヴを開催、自身も22年ぶりのステージを飾った。

◎改臓人間を従え、Damian Hamada's Creaturesが3枚目の大聖典を発表！

『魔界美術館』
アリオラジャパン
BVCL-1181～2（CD＋DVD／初回生産限定盤）／画像（左）
BVCL-1183（CD／通常盤）／画像（右）

ヘヴィメタルを開拓する、新しい音楽を聴いていこうとすることは、今とは比べ物にならないくらいエネルギーのいることだった。

私にとっては、高校時代から常にバンド・ブームなのだよ。

——現在は10万60歳となりますダミアン浜田陛下ですが、世を忍ぶ仮の（以後省略）中学生頃となると、魔暦前24年（1975年）前後となります。その年頃に楽器を始める人は多かったと思いますが、当時のバンド少年たちは、海外のハードな音楽というものをどのように見ていたのでしょうか？

私がギターを始めたのは高校に入ってからなので、16歳くらいになるかな。当時は45人クラスで男子ばかりだったんだが、各クラスに1バンドできるくらい……つまり5～6人はバンドをやってるクラスメイトがいたな。やはりハードロック～ヘヴィメタルは完全に輸入品だったので漁っていたものだ。

——それが1977年とすれば、ジューダス・プリーストは『背信の門』をリリースした年ではありますが、ブラック・サバスであれば『テクニカル・エクスタシー』が出たあとで、ディープ・パープルはすでに解散しており、英国内としては少々盛り上がりにかける時期とも言えそうであります。

私がメタルやハードロックを聴き始めたのが中三の頃だったので、確かにその頃はあまり盛り上がっていない時期とも言えるな。ただ、なんせ今と違って秒単位で情報が入ってくるわけではなく、音楽雑誌を頼りに月単位で入ってくるもので、リスナーは常に好きなジャンルの音楽情報に飢えていた。時間の流れや手間暇のかけ方が全然違うということを忘れてはならない。

——確かに。

バンドをやるにしても、音楽を聴くにしても、メタルやハードロックを開拓する、新しい音楽を聴いていこうとすることは、今とは比べ物にならないくらいエネルギーのいることだったんだな。そんななかで自分たちも、“その瞬間に流行っていたもの”というよりは“過去のいいもの”を漁っていた。ハードロックを聴くきっかけになったのがパープルの『ライヴ・イン・ジャパン』（1972年）なんだが、実際に聴いたのは『ライヴ・イン・ジャパン』が出て何年も経ってからになるから。

——つまり1970年代は、まだ日本と海外では違った時間軸があったということですよね。

先ほど語ったように情報が伝わる速度が遅いので、リアルタイムではなく、そのバンドを何年も遡っていいところを見つけていくという手法が多かったということだな。“そのときのもの”よりも“そのバンド自体”が与える影響が大きかったと思う。

——瞬間的な流行りではなく、バンドそのものに蓄積されたカッコよさという。

うむ。ちなみにその頃も、レインボーは頑張っていたぞ。そうそう、さきほど私は『ライブ・イン・ジャパン』と言ったが、実際ヘヴィメタルに目覚めたのはレインボーの『虹を翔る覇者』（1976年）であった。そののちに『ライヴ・イン・ジャパン』を聴いてギターに目覚めたというところだ。

——正確な情報、ありがとうございます！なお、もう少し前には“グループ・サウンズ”ブームがあり、世に言う“バンド・ブーム”はもう少し先の話となり……。

そのバンド・ブームというのは人間界でいう（以後省略）80年代になってからのものだろうが、私にとっては高校時代から常にバンド・ブームだったのだよ。周辺には部活のようにバンドをやっている子もいたし……私は山口県出身なんだが、当時の山口県は遊ぶところがあまりなかったので、部活をやるかバンドをやるかしかなかったのだな。“イカ天”やらのバンド発掘バラエティ番組がバンド・ブームのピークだと思うが、自分にとってはず――っとピークなのだ。

——そしてハードロック／ヘヴィメタルのバンドをやるのも当然であったと。

そうだな。今でこそヘヴィメタルも枝分かれして多岐に渡るが、昔はガンガンにくるパターンと、メロディアスなパターンだけだったから。私は特にリッチー・ブラックモアとかマイケル・シャンカーとか、のちに出てくるランディ・ローズとかのメロディアスでドラマティックな曲調を好んだんだね。そして小学校の頃に聴いていたクラシック、戦闘モノやスポ根モノの主題歌といった仰々しいヤツ。そういう音楽をすごく聴いていたので、琴線に触れてしまったのではないかなと思う。

——のちに作り出す音楽と当時好きなものが、まったくブレていないところがスゴいです！

三つ子の魂百まで……いや、三つ子の魂10万60歳までということだな（笑）！

紫、レイジー、ラウドネスのおかげで若者の意識はすごく変わったと思う。

——いざバンドを始め20歳を迎える頃には、アイアン・メイデンがデビューし、NWOBHMの波が押し寄せます。タイムラグの話を含め、当時のメタル青年たちの肌感覚とはいかなるものだったのでしょうか？

やはり音楽雑誌が情報源で、当然映像なんかほとんど観ることはない。なので自分の音楽仲間の熱気と雑誌がどんなバンドを取り上げているのか、そこがポイントになる。例えば、最新の記事を読んだ友人が“アイアン・メイデン聴いた？”と話しかけてきても、“アイアン・メイデンって何？”という話から始まるわけだ。そして、自分も書店やレコード店でアイアン・メイデンについて調べる。開拓するのにもエネルギーがいったわけだよ。

——新作の音を聴くこと自体が大変だったりするわけですからね。

まずレコードを買う。レコードが買えない者は、友達かレンタル・レコード店で借りる。もしくはラジオで流れる音を聴く。とにかく新しいバンドを開拓しようとしたら本当に勇気がいることで。“アイアン・メイデンか、ジャケットすごいな、買ってみようかな”となれば、帯のタタキや雑誌の記事を読んで、音ではなく文字を頼りに手探りでやっていたので……正直、世間の熱気などはわからなかった。雑誌などで特集が組んであったり、友達同士で盛り上がっ

たりしたら、とりあえず受け入れるしかない（笑）。

――ジャンルにもよりますが、やはり“海外のバンドのほうがスゴい”という意識はあったものですか？

それはあるよね。ヘヴィメタルを聴く前にプログレッシブ・ロックを聴いていたが、その頃から洋楽はすごいなと思っていたな。洋楽至上主義だよ。ただ私が中三の頃に紫というバンドが出てきて、高校に入学してすぐに友達から薦められ聴いたら“パープルそのものじゃないか！”と。日本人でもここまでできるのかと、もう目からウロコで。それから３年くらい経ってレイジーが出した『宇宙船地球号』を聴いて再び目からウロコが落ちた。

――1980年ですね。

またその翌年にラウドネスがデビューするわけだな。あの曲調で日本語で歌っていると。いや、これはもう本当に衝撃を受けたよ。“日本語でメタルをやって、こんなカッコいい曲ができるんだ”と思い、その後自分でも作曲を始めるわけだが、その頃から徐々に私のなかでの洋楽至上主義が崩れ去ったかなと。紫、レイジー、ラウドネスのおかげで、日本の若者のメタル・ファンの意識はすごく変わったと思うね。

――メタル・バンドとしては、演奏能力も重要なポイントになります。そのあたりの差とは？

高崎（晃）氏が出てきてからは、洋楽との演奏能力の差は一切感じなくなった。ラウドネスに続けとばかりにアースシェイカーやX-RAYが出てきた。メイク・アップ、44マグナム、フラットバッカー、ブリザード……みんなテクニシャン揃いで頑張っていたと思うぞ。そして、非常に生き生きとエネルギッシュに活動していた。その人たちのおかげで“ジャパメタ”という言葉も流行したしな。

――その時期に陛下は、のちに聖飢魔Ⅱの構成員となるメンバーに、“お前は悪魔だったのだ”と声をかけるわけですが、やはり悪魔たるもの演奏能力は重要でしたか？

それは……だな、演奏能力というよりも、“ライヴで自分の曲を演奏さえしてくれればいい”くらいでいたんだけれども（笑）。まぁ、デビューしてからは全員すごいテクニシャンになっちゃたがな！

――ハハハ、なるほどです！

当時はテクニックよりもマインドが重要

三つ子の魂百まで……いや、三つ子の魂10万60歳までということだな！

だった。どれだけヘヴィメタルを愛しているのか、そしてどれだけ自分に同調してくれるのかというマインドを持った悪魔を探したんだ。

――実際、オリジナル曲を作るにあたっては、洋楽を意識する部分と日本のバンドらしさと、どちらに比重があったのでしょう？

日本的、洋楽的といった壁はラウドネスが完璧にぶち壊してくれていたので、そういったことを意識することはなかった。むしろメタルは非常にテーマが広く、例えば生と死、あるいはオカルトやホラー、SFやファンタジー、暴力的だったり宗教的だったりと、歌謡曲ではまず聴くことができないテーマがいろいろとある。

――そして"悪魔的なテーマ"があったり。

もちろん私は悪魔的なものに魅かれ、そして悪魔に覚醒したわけなんだが。曲調としては悪魔的であるのはもちろん、宗教的かつオカルトやファンタジーを加えたものがすごく好きだったので、もう自分の好きなものだけを集めて作曲し、それはいまだに続いているわけだが（笑）。

――当時の作曲方法とは？

普段練習しているときにふと湧いたメロディを録音しておいて、その続きを練習後に作り始めるだとか、創作意欲が止まらなくなったらそのまま作曲に突入するだとか。だから何かに感化されて曲を作り始めるというのはほとんどなかったな。

――特に完成までに苦心した楽曲というと？

聖飢魔Ⅱ時代に作った曲というのは、わりと数日でできちゃったりしてるものが多い。「蝋人形の館」は私の曲のなかで一番有名な曲なんだが、"お、いいイントロができた。ちょっとこれ曲にしてみよう"と思うのと同時に、"タイトルは『蝋人形の館』だ"とイメージができた。そのまま作っていき1日か2日でできてしまったんだな。

――大名曲も、時間をかければいいわけではないということがわかる逸話ですね。

その後の個悪魔教典（※ソロ・アルバムのようなもの）を作り始めてからはどの曲も生みの苦しみを味わっている。でも生みの苦しみがいいんだ。私が育ったのは何をやるのにもエネルギーが必要な時代だったので、そういうのは慣れていて。聖飢魔Ⅱ時代のデモ・テープはラジカセ２台でダビングを繰り返しながら、途中で間違えたら最初からやり直しで本当に手間がかかったのだ。MTR（マルチ・トラック・レコーダー）になっても、最初は４トラックだからね。昔はそういう苦労があったから、のちに１曲作るのに１ヵ月かかろうとも全然苦じゃない。生みの苦しみは楽しい。

好きなものだけ集めるという意味では聖飢魔Ⅱと同じ香りがするのもあり得る。

――1985年に聖飢魔Ⅱがデビューし、そのサウンドとキャラクターが"世間のヘヴィメタル像"を構築していったと言っても過言ではありません。それはつまり、陛下の音楽的嗜好が、日本のヘヴィメタル像を築いたとも言えるのでは！？

ハハハ、ありがとう（ニコ）。メタルとはこうあるべきだ……と、教科書的なパターンはやってしまうな。自分の好きなものの集合体が聖飢魔Ⅱであり、Damian Hamada's Creaturesに続いている。

――ちなみに、マーシフル・フェイトはお好きでしたか？

いや、あんまり聴かないな。それ、以前にも曲の雰囲気が似ていると言われたことがあって、聴いてみたんだが……ちょっと違うなと。

――なるほど……失礼いたしました。さて、聖飢魔Ⅱデビュー以降は、ある程度距離をとりながら日本のメタル・シーンを見ていたことと存じます。

日本のメタル・バンドがそれぞれのカラーを盛んに出していて楽しかったな。先程も言ったように、いろいろなテーマがあるじゃないか。取捨選択しながら皆がやっていたと思うんだよ。レインボーを辞めたディオがブラック・サバスに入ったとき、混沌としたなかにも"次はどんな音が出るんだ？"というワクワク感があったけれども、ジャパメタ・ブームのときもこのワクワク感があったんだな。日本独自のヘヴィメタルが枝分かれして、さらには海外に出ていくアーティストもいて。本当にプロ野球みたいでワクワクしたものだ。

――ときが経ち、2020年には新たにDamian Hamada's Creaturesを結成なさいます。11月には３枚目の聖典（※アルバム）『魔界美術館』が発表されましたが、2020年にも２枚の作品を発表しており、今まさに創作意欲が高まっているという具合なのでしょうか？

今、めちゃめちゃ高まっているな！　生きがいだよ、本当に（笑）。世を忍ぶ仮の教職を早期退職して"これから毎日が日曜日だ、わーい"と思ってたのだが、１ヵ月で飽きたね。それでどうしようかと思ったときに、久しぶりに曲を作り始めたら止まらなくなってしまった。もうヘタしたら朝起きて夜寝るまで、ずーっと作曲をしていた日もある。機材も新しくなって、バンドとオーケストラと合唱隊を一挙に自分の手中に収めたような快感もあり、ちょっと止まらなくなってしまったのだ。

――４トラックMTRの時代から考えると、すごい技術の進歩ですよね（笑）。本作のアイディアは、どれもそのタイミングで生まれたものでしょうか？

世仮の20代のものは流石にないんだが、10万30代の頃に作った曲をアレンジし直したものはある。だから作品そのものはとても古いんだ。あ、１曲だけめちゃくちゃ古い曲があるんだった。「Tears in the Rainbow」は、聖飢魔Ⅱの曲よりもまだ古い、RAYというバンドで演奏していた曲なのだ。もう39年前の曲だな！

――最新版は豪華な音像となっていますが、ベーシックとしては昔と変わらないものですか？

基本的に世界観はまったく変化していないが、D.H.C.風の味つけをしたので、何の情報も得ずに聴いた人には"新しく作ったんだろうな"と思ってもらえるだろう。

――正直なところ、"聖飢魔Ⅱ的な楽曲"を期待するファン／信者もいると思います。その辺りを気にしたりなどは？

全然気にしてはいない。聖飢魔Ⅱにもいろいろなカラーがあるので、聖飢魔Ⅱ風といってもイメージが定まらないと思うから。

――"初期２枚の聖飢魔Ⅱのイメージ"ということで言えば、この『魔界美術館』の音楽性はピッタリだと存じます。

▲マスヒロ“バトラー”後藤 (d)、ケン“アレイスター”宮嶋 (b)、さくら“シエル”伊舎堂 (vo)、ダミアン浜田陛下 (g)、秀貴“ジル”栗谷 (g)、宏美“ローズ”稲益 (vo)、大地“ラスプーチン”髙木 (g)

ありがとう。確かにそうかもしれないな。実は今、次の作品のデモ盤音源も完成しているのだが、自分の好きなものだけを集めている。そういう意味で言うと、次回作も初期聖飢魔Ⅱと同じ香りがするかもしれないな。

——1 曲目は作品の顔的楽曲とも言えますが、荘厳なイントロからツイン・リードに流れる「謝肉祭」は、まさに陛下が思うヘヴィメタルの王道をいっていますよね。

そうだな。序曲の代わりに、イントロにも何かしらついているんだ。これは私の美学であるが、50 〜 60 代のハードロック／ヘヴィメタル・ファンにも安心して聴いてもらえると思うぞ。

——で、実は、個人的な感想ではあるのですが、「謝肉祭」には「地獄の皇太子は二度死ぬ」に通じるメロディやコード感があるな、と。「〜二度死ぬ」はルーク参謀の楽曲ではありますが、つまりこれは“その後の聖飢魔Ⅱにも、ダミアン浜田陛下の DNA がしっかりと受け継がれている”ことを表わしているのでは？

「〜二度死ぬ」は、あえて参謀がダミアン風にチャレンジしたらしいんだよね。そなたが言いたいことはそのとおりなんだが、ただ“ニワトリが先か卵が先か”になってしまうというか、私としては、脱退後の聖飢魔Ⅱの香りがすると言われたのはちょっと不思議な感じがするね（笑）。

——そして、そういったイメージはどの曲にもあり、そしてどれも聴きどころが多いんです。

全曲いいだろ？　基本、私のスタンスとして“捨て曲なし”というのがアピール・ポイントだからな！

——本当にそのとおりであります（笑）。演奏に関しては、ギターを含め“改臓人間（※バンド・メンバーのようなもの）”が演奏しています。自分ではないギタリストが演奏することを前提として作っていくものですか？

そうだな。前回の『旧約魔界聖書』はそんなこともなく、バンド結成前にデモ音源を作っていたので“機械なら演奏できるよ”というリフやフレーズも入っていて、その後演奏することになる改臓人間たちはすごく苦労をしていたよ。それで今回はそのあたりも考えたので、彼らも“苦労が少なかった”とコメントしていたよ。

——11 月には、D.H.C. として初のライヴが催され、先程は“次作のデモも完成している”とのお話でしたが、今後のプランとは？

もう私としては作曲熱が収まらず、次の次のデモ音源も準備をしているところなのだ。ライヴが終わったら第五聖典のデモ音源の続きを作りながら、早く第四聖典を世に出す作業に取りかかれたらいいなと思っている。同時に、もしかしたら地方でもライヴができる状況になるかもしれない……そこはもう未知数だが、どっちに進んでも楽しみにしているよ。

——本当に『魔界美術館』には捨て曲がないというか、聖飢魔Ⅱ信者にもドハマリの楽曲がそろったと思います。D.H.C. の今後の弥栄を祈るところであります！

『魔界美術館』……タイトルは美しいが、一旦この聖典を聴き始めると、身も心も切り刻まれ、やがてはその命さえも奪われることになる。それでもいいならくり返し聴くがよい……ハハハ！

The latest article
from UK

Text by Ali Cooper
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』350

Maria Franz
HEILUNG

マリア・フランツ　ハイルング

枝角を付けたミステリアスなペイガン・ヘヴィ・フォーク・バンド、ハイルングの素晴らしいヴォーカリスト、マリア・フランツが、君たちのユニークな質問に答えてくれるぞ。

この衝撃的なヴィジュアルを観て、興味を持っていた人も多いことだろう。“ペイガン・ヘヴィ・フォーク”と称されるHEILUNG（ハイルング）は欧州にて高い人気を誇り、スタンダードなヘヴィメタル・バンドではないものの、徐々に世界規模にて注目を集めている。

今回はヴォーカリストであるマリア・フランツにさまざまな質問に答えてもらい、彼女たちがどのようなミュージシャンであるのか、その一端を知ってもらいたい。ステージ・セットの発想からサウンドへのインスピレーション、空港セキュリティでのやりとりなど……ハイルングへの興味は尽きない。

――あの枝角は本物？

本物よ！　ノルウェーの雌トナカイのものなの。このプロジェクトを始めて、ステージでのヴィジュアルについて話し合ったとき、最初の瞬間からはっきりと頭に枝角を付けなくてはと思っていて、軽くて女性的なものをずっと探していたの。それでこれらを売りたいという人から手に入れて。

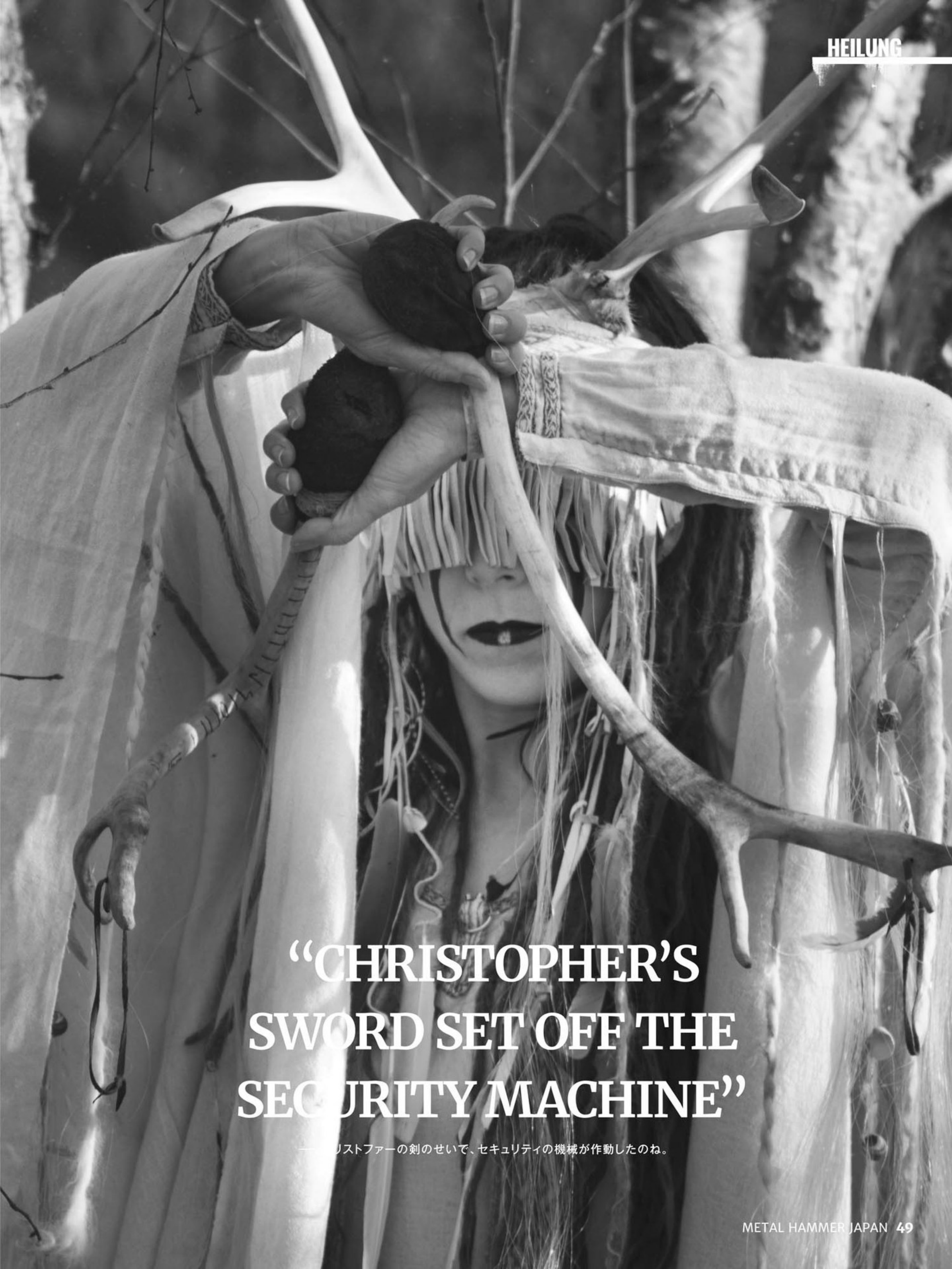
ショウを２～３回やることで、距離感がつかめてきたのね。今では世界中のバック・ステージにある障害物のなかを、とてもゆっくりだけど優雅に移動できるわ。ケーブルが吊るされていたり、ステージ・カーペットがあったりとたくさんトラップがあるけど、枝角は私と一緒によく動いてくれるから。今では頭の５倍もあるものすごく重い枝角を持つ動物が、どうやって歩けるのかも完全にわかる。正しいバランスを保てば、重さをまったく感じないのよ。スタミナもつくし、自然なソーシャル・ディスタンスのツールにもなるしね！

――叩きのめせる最大の動物は何だと思いますか？

マリアとしての私は生まれつき平和主義者だから、動物を叩きのめすなんてことはしない。ただ、シャーマニックなハイルングのキャラクターである私が、必要に迫られ壮大な魔法の戦いをするところを想像してみると、おそらく熊は倒せるわね。

――あなたたちは動物や人間の死体から作られた非常に大きなセットや楽器を携えてツアーをしています。空港の税関を通るとき、それらのせいでトラブルに発展したりはしませんか？

剣や槍を持って空港のセキュリティを通らなくてはいけないので、セットを持って飛行機に乗るのはやめたの。一番おもしろかったのはロシアね。すべての荷物をスキャンされて、「Krigsgaldr」で使う剣が入ったクリストファー（ユール／ハイルングのマルチ奏者でプロデューサー）の箱を通したとき、機械が鳴り出したのよ。セキュリティや警察、空港の偉い人など 25 人くらいに囲まれたわ。大混乱で、結局自分たちは演劇をやっていて、これは小道具だから



“CHRISTOPHER’S SWORD SET OFF THE SECURITY MACHINE”

——クリストファーの剣のせいで、セキュリティの機械が作動したのね。

“THE METAL CROWD ARE EPICALLY GOOD DRINKERS”

——メタルの観客は本当にお酒の呑み方がうまくって。

持ち込めるんだと説得したのね。かなり危ないところだったわ！

槍のせいでロンドンで止められたときは、とても感じのいいセキュリティ担当が私たちをチラっと見て、“ヨーヴィック・ヴァイキング・フェスティヴァルに行くんですか？”なんて言ってたっけ。

そんなことがあるから今ではカーゴを使っていて、会社が書類と一緒にすべてを詰めるようにしているの。空港で私たちが“ええ、この太鼓はトナカイの皮でできているのよ”なんて説明をしなくてもいいようにね。

——「In Maiadjan」はどのような経緯で『セヌアズ・サーガ：ヘルブレイドⅡ』の予告篇に使用されたのでしょうか？　ゲーム本篇にもバンドの音楽が使われるんですか？

彼らはかなり初期段階で私たちのことを見つけていて、2018年の初めに連絡をしてきてくれたの。メインのサウンド担当と、オーナーのタミーム・アントニアデスがやってきたんだけど、ちょっとオーディションのような感じで数日間一緒に過ごしたのね。

ハイルングがゲームにどんな貢献ができるかを話すのは、とても興味深かったわ。ともに同じゴールに向かっていることがすぐにわかったから。彼らはコンピューター・ゲームが持つヒーリングの側面に注目していて、精神的に病んでいる主人公が自らの疾患を旅するという物語を作っていた。とても運命的で、かなり早い段階から一緒にうまくやっていけるだろうと感じていたから。

ただ頭のなかからアイディアを拾うのではなく、シーンや風景を想像してみるのはものスゴく興味深かった。これがゲーム業界との初接触で、本当に気に入ったわ。発売されたら、みんながどんな反応を示すかとても興味深いわね。

——お気に入りのテレビ・ゲームは？

ガッカリさせてしまうけど、実は私たちは誰もゲーマーではないから、その質問には答えられないかな。私たちはスーパー・オールドスクールだから、やるのはボード・ゲームだけ！　時間ができ次第、『ヘルブレイド』はやってみるつもりだけれど。まずはじっくりと最初のを、それからパート2もやりまくるわ！

——ハイルングに入る前は、どんな音楽を聴いていましたか？

ハイルングに入る前は、長い間フォーク（民族音楽）に惹かれていたのね。ヘドニンガルナというスウェーデンのグループがいて、これは“The Heathens”（異教徒たち）という意味なの。クールでモダンなスタイルのドラム・ビートという点では、彼らの影響は非常に大きいわ。エレクトロニックな要素もあるからとてもダンサブルで、しかもロックっぽいの。

それから実験的なジャンルになると、ビョークには最高に惹かれる。彼女は自分の表現において、あえて非常に実験的なことをやる私たち世代の女性シンガーよね。間違いなく彼女は私のインスピレーションだわ。“ここからどうできるかしら？　ビョークならどんなクレイジーなことをするんだろう！？”なんて考えるの！

——リレハンメル大学に通っていたとき、フェリックス・パブには行った？

ええ、もちろん！　行けるときはいつも

あそこにいたわね。ハイルングのクリスも行っていて、ビールを何杯か呑んでいたわ。確か一度あそこでジャンケンのヨーロッパ大会があって、とてもおもしろかったの。ジャンケンで優勝するにはどうすればいいか、研究したりして。ポーカーフェイスと相手をあざむくこと……このコンビネーションね。

――アモン・アマースとのコラボレーションというのはどうでしょう？

コラボレーション・プロジェクトはいつでも超興味深いし、どんなプロジェクトであれ新たなエネルギーをもたらすものよ。時間と状況が許せば、もちろんやるわ！

――ハイルングを始めたとき、特にメタルのコミュニティがあなたたちをこうも熱狂的に歓迎すると想像してはいましたか？

ひと言で言ってしまえばノー。こんなに歓迎されるとは思ってもみなかった。ダークな要素がメタル・ファンにも共鳴するであろうことはわかっていたけど、信じられないほどの温かい歓迎を受けたから、メタルのオーディエンスには改めて畏敬の念を抱いたわ。

私はノルウェー出身だから、もちろんいつも友人を通じてメタルのコミュニティの一部だった。バーテンダーとして何年か働いていたんだけど、カウンター越しに見ていても、メタルのショウがいつも一番素晴らしいものだった。メタルのお客さんはお酒の呑み方が良くて、決して喧嘩をしないし一緒にいて素晴らしかったから。

ハイルングを始めてからは、特に期待もせずにたくさんのメタル・フェスティバルでプレイをするようになって。歓迎してもらえて、本当にありがたかったわね。

――まだプレイしていないところだと、どこでやってみたい？

ときどきバハマとか暖かいジャングルの雰囲気を夢見るの。いつもいる寒い場所ではなくてね。素晴らしいと思わない？　イルカに乗って颯爽と登場したり！

それから、世界には本当に壮大な洞窟や自然の円形劇場があって、とても魅力的で素敵でしょうね。だから、どこか特定の場所を挙げるのではなく、もっと自然のなかでプレイすることで魔法が起こせる……と言っておくわ。

The latest article
from UK

Text by Dave Everley
Photo by Stefen Raduta
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』353

LIFE LESSONS

JØRN 'NECROBUTCHER' STUBBERUD

メイヘム ヨルン"ネクロブッチャー"ストゥッベルド

**彼ほど壮絶な事件を間近で見てきたミュージシャンはいないかもしれない。
ノルウェーの伝説的ブラック・メタル・バンド、メイヘムの創設メンバーであるヨルン"ネクロブッチャー"ストゥッベルドは、エクストリーム・メタルに人生を捧げている。この53歳のベーシストは1984年のバンド結成以来、90年代初頭の3年を除いてバンドの舵取りをしてきた。
ペル"デッド"オーリン(元vo)とオイスタイン"ユーロニモス"オーセト(g)の死という劇的な出来事、そして長年に渡る数々の論争を乗り越えてきた彼が、その人生から学んだことの一端を我々に示してくれる。**

俺は早く成長しなくてはならなかった。

俺は"子供の頃にこんなトラウマがあって"なんていうタイプじゃないが、いくつかの出来事のせいで必要以上に早く成長し、自分の生活に少々の責任を持たなくちゃならなかった。父親がいなかった俺は、ワルいヤツらの仲間になっていたんだな。

つまり、乱暴者や犯罪者たち、不法侵入したり車を盗んだり、アンフェタミンをやってるようなワルい連中のなかで育ったのさ。ただ、こういう輩に囲まれているときは、賢く立ち回らないとこっちが殺されちまう。だから俺はあっという間に世渡りがうまくなったんだな。

他人に自分自身の歴史を書き換えさせるな。

俺がメイヘムを辞めたと言うヤツがいるが、それは間違いだ。俺がバンドを始めて、ロゴを描き、オイスタイン(ユーロニモス)を引き入れたのさ。ヤツはクソ野郎だった。友達の死体(シンガーのデッド/1991年に自殺)の写真を撮りやがったから、"俺に電話をする前に、その写真を全部焼け"と言ったんだ。

だがヤツはそうしなかった。どうしたと思う? 何とあの殺人鬼(ヴァーグ・ヴィカネス/カウント・グリシュナック)に電話をかけて、俺の後釜にしやがったんだ。そのことはみんな知ってるだろう。俺がメイヘムを辞めたって? 俺はメイヘムを辞めたことなんてない。本当にこ

"EURONYMOUS WAS A FUCKING ASSHOLE"

──ユーロニモスはクソ野郎だったね。

の誤解にはウンザリだ。

長持ちする豚の頭もある。

1985年、ギグ用に豚の頭を4つほど注文したんだ。だけど、ギグがキャンセルになってしまってね。だからその豚の首を、祖母の冷蔵庫に1年ほど入れておいたのさ。

取り出して写真撮影もしていて、そのなかの一枚は「Ancient Skin」（1997年）というシングルで使ったな。当時豚の頭は、ショックを与えようと思って使っていたもので、動物虐待とは無関係だ。すでに死んでいた豚だからね。

今はもう豚の頭は注文していない。頼んでもいないのに、プロモーターが用意してくれることもあるけどな。彼らはライダー（※ライヴをやる際にバンドがプロモーターに要求する食べ物、飲み物、タオルなどのリスト）を見て、“豚の頭が載ってないぞ？”なんて思うんだろう。

メイヘムが導き、ほかのバンドが追従する。

俺たちが豚の首を使ったら、多くのバンドがそれをマネし始めたんだ。ゴルゴロスが羊の頭を100個ステージに並べたのも見たね。

それに俺たちもかつてはパイロやたいまつを使っていたけど、ラムシュタインが出てきてすべてをぶっ飛ばしたよ。それ以降“爆弾一発爆発させるごとに、500ポンド燃やしているようなものだ”と思うようになったから。

メイヘムはメタル界のローリング・ストーンズ。

俺はミック・ジャガーやローリング・ストーンズと同じ戦略を持っていることがわかったんだ。

彼らは“その国にやって来る最初の西洋のバンド”になることの重要性を理解していたのさ。そういう国に行けば、神様になれる。実際はその国にいる人たちのほうが優れていたとしてもな。

だから俺も、あらゆる国で“そこに最初にやって来たメタル・バンド”になりたいんだ。ラオス、ベトナム、フィリピン、パキスタンでプレイしたいね。アフガニスタンはって？　それはどうかな。ヤツらは冒涜の罪でメタル・バンドを10年間服役させたからな。アフガニスタンの刑務所に入るリスクを冒す覚悟はできていないよ。

マネージャーをつけろ。

3年前までは、俺がメイヘムのマネージャーだった。だけど、感謝してもらえないから辞めたよ。しばらくすると、さも俺がやるのが当然という感じになったから、頭にきてね。だからマネジャーを雇ってさ。

今はみんなマネジメント費に何千ポンドも消えていくと文句を言っているけど、俺に言わせれば、以前は俺がその金をもらう権利を持っていたんだけどな。

メイヘムは、労働階級のためのブルーカラー・ミュージックを作っている。

何年か前、廃品置き場で金を払おうとしたとき、“お金はいらないよ。メイヘムはここではお金を払う必要はないから”って言われたことがあって。あるときには、下水の詰まりを直しに男が来てくれたんだが、彼は車を停めてサテリコンのTシャツで出てきたんだ。

"PEOPLE COMPARE ME TO LARS ULRICH BECAUSE I'M A SMALL GUY AND I GO BALLISTIC ALL THE TIME"

——体が小さくていつもキレているから、みんなが俺をラーズ・ウルリッヒに例えるんだ。

俺は"あのTシャツじゃダメだな"と思い、男にメイヘムのシャツをあげてね。すると"あなたがここに住んでることは知ってたけど、ただちょっとカッコつけようと思ったんだ"だとさ。

下水処理場や廃品置き場で働く彼らは、俺の仲間なのさ。ときどき彼らが地元の銀行や航空会社のデスクで働いていればいいのに、なんて願うこともあるけど……ハハハ！

名声が何かわからない。

自分が有名だと感じるかって？　そんなことはないね。10歳の孫は、俺が有名だとは思っていないよ。自分のおじいちゃんはいつもステージに上がったり、テレビや新聞に出ているから、それが当たり前だと思っているのさ。

だけど、彼を学校に迎えに行くと、先生たちの膝が震えていたな。ということは、俺は有名なのかも。まぁ、何とも言えないが。

テクノロジーは最悪。

みんな、SNSなんてやるもんじゃないってことはわかっている。最後まで携帯を持たなかったのも俺。最後までインターネットをやらなかったのも俺。バンドの連中は"Facebookをやれよ！"なんて言うけど、やりゃしないね！

まぁ……最終的に、メッセンジャーでやりとりをすることには同意したけどさ。そうしたらどうなったと思う？　バカどもが俺にコンタクトをするチャンスを得ただけだった。

我慢は美徳……ある程度まではね。

外では大人しく、礼儀正しいよ。もしかすると、礼儀正し過ぎるかもしれない。"あの野郎と仲良く話すんじゃなく、ファック・オフ（※消え失せろ）と言ってやればよかった"なんて思うこともあるくらいだからね。

ときにはキレてもかまわない。

俺をラーズ・ウルリッヒに例えるヤツは多い。体が小さくて、いつもキレているからだ。なぜかって？　キレるときはキレるべきだからだよ。

だけど、それはキレるべき状況のときだけさ。例えば機材はライヴハウスに揃っていると言われていたにも関わらず、なかったときとかな。俺は大量のM&Mチョコを要求して、青いのが残っていたからってキレたりはしない。

スピリチュアルな考え方には興味がない。

俺の心が狭いということじゃない。俺はどんなことにもオープンだよ。

救世主の再臨の兆候なんてことがあったら、とんでもないことだろうな！　あるいは死後の世界。目が覚めたら死んだ友人たちや親戚たちがそこにいるらしいから、パーティをするね！　だが、実際はそうはいかない。意識を失って死ぬ……ただそれだけさ。

賢く投資。

多くのミュージシャンは、ドラッグと女にすべての金を使ってしまう。それを賢い投資と言うヤツもいるだろう。

俺は90年代はじめ、不動産への投資をしたんだ。まぁ、小屋のような小さな家を買っただけだけど。アイアン・メイデンやメタリカみたいに稼いでいたわけじゃないから、それ以上のものは買えなかった。

だけど、俺は今でもその家に住んでいるさ。もちろん改修はしたよ。今ではノルウェーの金で何百万もの価値がある。価値が上がるのは不動産だけさ。

家族第一。

俺は父親であることを楽しんでいるぜ。祖父であることは、さらに楽しんでいる。

娘は、俺が23歳のときに生まれたんだ。それで人は変わるよ。自分を見つめて"娘を養わなくちゃ。家もいるし、児童相談所に連絡されずに幼稚園へお迎えに行けるよう、もっといい車もいるな"なんて考えなくてはいけなかったから。

今は孫もいるんだ。彼の名は俺にちなんでヨルンというくらいだから、俺のやってきたことは正しかったんだろう。俺たちは彼のことをジュニアと呼んでいるよ。自分の子供よりも責任が少ないし、もっと楽しいね。だけど、彼はメイヘムのファンじゃないんだ。今は……ね。

壊れていないものを修理するな。

長い間、何かをやり続けているんだから、突然自分は偉大だなんて思ったりはしないよ。俺は自分が知っている人のなかで最も堅実な人間さ。1993年からずっと同じ家に住んでいるしね。

久々に会うヤツらは"ファック、お前はまったく変わらないな"なんて言うけど、なぜ勝利の方程式を変えるんだ？

自分自身を広げろ。

メイヘムは、どんな困難も乗り越えてきた敗北者だった。そして俺は無から何かを作り出した起業家だ。このことは、何にでも適用できる。ビジネスの世界でも、芸術の世界でも、何でも。

本（※2018年に『The Death Archives:1984-1994』という本を書いている）も出版して臨時収入も得たし、おかげでトーク・ショウや討論会みたいな変わったオファーも舞い込むようになった。俺は不測の事態を予測することを理解している。そういう考え方を持っていれば、どんなことにも対応できるのさ。

STARS' WORDS

トミー・モーリー　シュザイの復習

EPISODE-7

トミー・モーリー

音楽専門誌にて、通訳／ライターとして活動。ギリギリ関東首都圏・築30年弱の物件で満足な暮らしをしていたものの、家主の事情により取り壊しとなり近隣の新居へ引っ越し。都心のライヴ会場に行くのはシンドイままだが、激安不動産事情の田舎暮らしの快適さは手放せず、たくさんのギターを愛でる生活は今後も続く。

The greatest frontman of all time is Bruce Dickinson!

――史上最高のフロントマンはブルース・ディッキンソンだ！

By Michael Poulsen

当コラムでは、本誌通訳の私トミー・モーリーが、アーティストとの取材時に交わした会話のなかから、こぼれ話とともに、英会話としても使える言い回しをピックアップしていきます。

今回はデンマークよりヴォルビートのフロントマン、マイケル・ポールセン氏の《Stars' Words》です。ヘヴィメタルにさまざまな音楽性を取り入れ、《ビルボード・チャート》にも頻繁に登場する彼ら。北欧にはネイティブ並みの英語力を持つアーティストは多く、もともと英語教育が進んでいた国々ですが、昔から英米のテレビ番組が観られたため“自然と体に入っていった”と語るミュージシャンに遭遇したこともあります。

さて今回ピックアップした［The greatest ～ of all time］は、氏がリスペクトして止まぬヘヴィメタル・シンガーたちについてうかがった際に出た言葉です。特に難しい単語を使っているわけではありませんが、日本人的には“そういう言い方もあるのか”と感じるものだったりも。［The greatest］＜最も偉大な～＞と、［of all time］＜すべての時代の＞を組み合わせて、＜史上最高な＞という意味で口語的に使われることが多々あります。

この［The greatest ～ of all time］、SNSがポピュラーとなった昨今、目にする機会が増えました。ただし、頭文字をとって［G.O.A.T.］という形でスラング化していることもあり、“どういう意味だ？”と思った人も少なくないのでは？　ときには［Goat］という単語に引っかけて、ヤギの絵文字で表現されていたりもします。

言葉の持つ意味からして、記録を破ったときや偉業を称えるときに使われますが、よく目にするのがスポーツの分野です。2021年の野球界の顔となった大谷翔平選手、サッカー選手として最高年俸を記録するリオネル・メッシ選手など、彼らはみんな［The greatest ～ of all time］です。

ブルース・ディッキンソン、ロニー・ジェイムス・ディオ、オジー・オズボーン……と、さまざまな［The greatest ～ of all time］を挙げてくれたポールセン氏。彼らに続くような名演を、これからも届け続けてくれることでしょう。

ではまた次号でお目にかかりましょう！

［The greatest ～ of all time］

【意味】史上最高の

例文

Shohei Ohtani is G.O.A.T.!

（大谷翔平は史上最高の選手だ！）

The 500 Greatest Songs of All Time.

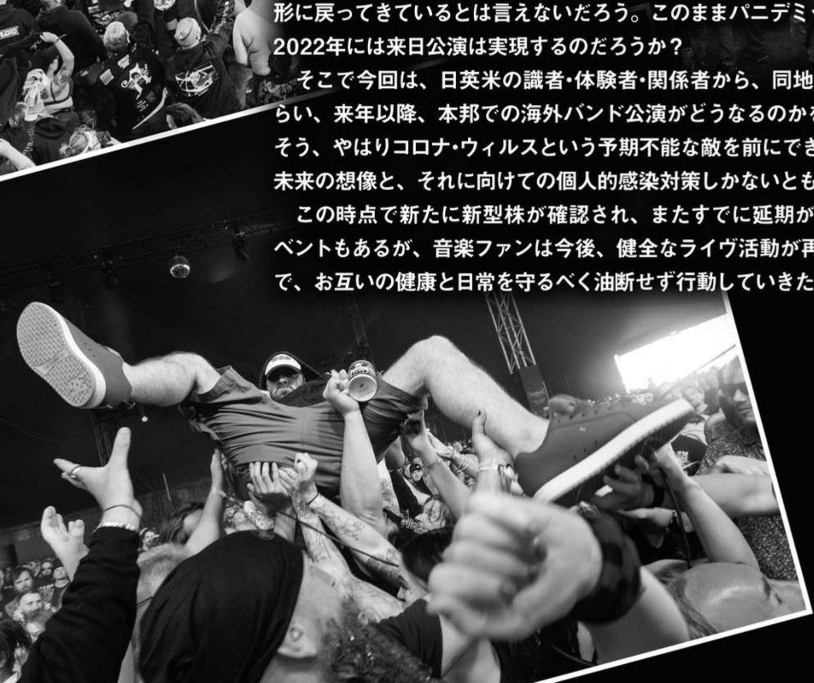
（史上最高の500曲）

特集
日英米の識者・体験者・関係者に聞く
2022年、来日ライヴは実現するのか!?

11月末現在、日本での新型コロナ・ウィルス感染者数は減少傾向を維持し、ライヴを含むイベントの入場者数制限は緩和され、また飲食店でもこれまでの賑わいを取り戻そうとしている。ただこれが、国外バンド需要の高いハードロック／ヘヴィメタル界隈となると、まだ“来日ライヴ”は実現しておらず、本来の形に戻ってきているとは言えないだろう。このままパンデミックが終息すれば、2022年には来日公演は実現するのだろうか？

そこで今回は、日英米の識者・体験者・関係者から、同地の状況を伝えてもらい、来年以降、本邦での海外バンド公演がどうなるのかを想像してみたい。そう、やはりコロナ・ウィルスという予期不能な敵を前にできることは、明るい未来の想像と、それに向けての個人的感染対策しかないとも言える。

この時点で新たに新型株が確認され、またすでに延期が発表されているイベントもあるが、音楽ファンは今後、健全なライヴ活動が再開されるその日まで、お互いの健康と日常を守るべく油断せず行動していきたい！



■企画内のコメントについて

本企画内でのコメントは、取材時（10月～11月）のものとなります。その後、状況変化に伴う変更があった事柄があることも、予めご了承ください。また、一部内容には個人の感想が含まれており、すべての事例に該当するものではありません。

証言 I

バンド・イベントも開催された英国。ロック・ダウンを経て行なわれたラウド系フェス状況を聞く。

まずは、伝統あるメタルの本場イギリスはロンドンより、『METAL HAMMER』副編集長であるエレノア・グッドマン氏の報告からだ。イギリスでは"パイロット版"ではあるものの《Download Festival》や、《Bloodstock Open Air》といったラウド系音楽フェスが開催された一方、これまでも複数回ロック・ダウンが施行されてもおり、またヨーロッパ圏としては再び感染者が増えている傾向もある。

今回の話は11月上旬のものになるが、その時期のライヴ状況などは、やはり日本とはまた違ったものだった。

話を聞いたのは……
エレノア・グッドマン

英『METAL HAMMER』編集部・副編集長。幅広い音楽の知識を持ち、同誌ではゴシック系から大御所まで、多くのインタビューや記事を担当。BABYMETAL企画の編集も行なう。日本語を勉強中という、親日家でもある。

毎日１度だけ、散歩に行くことが唯一の外出でしたね。

●ロック・ダウン中の街の様子は？

ロック・ダウンは何度もあったので記憶があやふやになってしまいそうですが、大規模なもので３回行なわれました。またロンドンではありませんでしたが、イギリスの各地では、ローカルなレベルでのロック・ダウンも行われていましたね。

政府は毎回、当初２週間のロック・ダウンを予定しているんですが、それらはおおむね延長されていきました。方針もなかなか定まっていなかったところもあったので、市民には"いつロック・ダウンが始まっているのか"をハッキリと把握できていない人たちもいましたし、自分がどういったスケジュールで動いているのかすらよくわかっていない感じもあったんです。

今年の６月末で終えた最後のロック・ダウン時では、すべてのバーやレストランが営業を停止し、在宅勤務の徹底、公共交通機関の極力の不使用が求められました。ライヴ会場も含め、どこもかしこもロック・ダウンだったので、みんな出かけようという気すら起こらなかったと思います。ただ毎日１度だけ散歩に行くことだけは許容されていて、それが唯一の外出でしたね。

●11月現在の状況は？

ワクチン政策が始まってから１年近くが経過しようとしていて、現在では10代以下の接種や、高齢者の３度目の接種が始まろうとしています。

ロンドン市長は現在、公共機関でのマスクの着用を求めていますが、着用率は６～７割といった状況で、重篤化しづらい若年層では特に不着用が見られますね。ただ、次の波が来る前に、在宅やマスク着用の規制を導入すべきではないかという議論は、政府を中心に行なわれています。

とはいえ、現在のロンドンでは、何ひとつ不自由するようなことはないんですよ。

●では、ライヴもこれまでどおり行なわれている？

規制が緩和されたのは７月のことで、その時点で、すでにコロナ・ウィルスの検査結果などを提出する義務は特にありませんでした。

ただ、NHS（National Health Service：イギリスの国営医療サービス事業）が発行するワクチン証明書や当日の抗原検査結果などを持参することは推奨されています。NHSが主導して開発した各種アプリなどをインストールすることも推奨されましたが、飲食店を含めて、多くの施設がそれを導入していたわけではありませんでしたね。中規模のシアターに行ったときもそういったものはありませんでしたし、先日スキンドレッドのライヴに行った際も、何の提出も求められませんでした。

ただ、大規模なライヴであったり主催者の方針によってワクチン接種証明などが求められる傾向もあって、これはあくまでも行政の判断によるものではありません。

●ライヴ会場内での規制はある？

日本では"鑑賞位置の固定"や"声出しの禁止"などがあるようですが、私が参加したライヴを見る限り、そういったものはなかったですね。普段と同じようにスクリームするオーディエンスもいました。

もちろんマスクを着用することは尊重されてますが、アルコールも通常と同様に販売されていますし、飲食店ですらソーシャル・ディスタンスはあまりありません。

▲ダウンロードでのトリは、やはりウェールズ出身のブレット・フォー・マイ・ヴァレンタインが務めた。

▲ブラッドストックでは、コメントにもあるデヴィン・タウンゼンドのほか、ドイツ出身のクリーターなど、国外バンドも出演。

参加者はある意味被験者でもある。

●《Download Festival（以下：ダウンロード）》の開催が発表されたときの、音楽ファンの反応は？

発表があったとき、ファンたちはかなり興奮していました。かつてのような音楽ライヴに戻れることに対する喜びが爆発していましたよね。

ただ通常のダウンロードとは状況が大きく異なり、アナウンスは開催の約２週間前で、規模もかなり縮小されました。また、これはコロナが終息に向かうなかでの政府主導による音楽ライヴの検証実験的な位置づけでもあったので、誰もが“開催はされるだろう”という思いを強く持っていたとは思います。“安全を守りながらライヴを開催する”というステートメントが明確だったんですね。

参加者はある意味、被験者的な立ち位置であることも了承していて、これがキャンセルになるとは誰も思っていませんでした。むしろこれをきっかけに今後ライヴが再開されていくことを祈っていました。

●参加への条件は？

参加者全員に、イベント前後でのPCR検査の報告が義務づけられていました。入り口にスタッフが配置され、観客が持参した各種の陰性結果をチェックしていきます。しかしそれ以外のことについては、入場時に特にされたわけではなかったですね。

会場のいたるところに手指消毒用のエタノールが置かれていましたが、それ以外は普段のライヴ会場と変わらず、フェス当日に規制を感じることはまったくありませんでした。

スケール・ダウンこそありましたが、今まで馴染みのあったダウンロードが、こういった環境下でも以前と同じように行なわれていたということに、少し違和感を覚えるところはありました。ロック・ダウンがずっと続いた日常だったのにも関わらず、いきなりあんなにも大勢の人が集まっている光景を目にして……それは多くの人が同じように感じたのではないでしょうか。

それでいて今までの鬱憤を晴らすかのように、みんなハグしあったり、食事を楽しんだり、地べたに寝転んだり、そしてバンドを観るといったことのすべてを楽しみ、“かつてないほど素晴らしい”といった雰囲気を味わっていたようにも思います。

●国外バンドの出演について。

今回のダウンロードはパイロット的な意味もあったので、イギリス国内のバンドだけで固められています。そのためメタル色の強い例年に比べ、大きく“ロックに特化したラインナップ”だったとも言えましたね。そして、より若いバンドが集められたような印象もあり、それによっておもしろい企画になったとも思います。

もうひとつ、同様に行なわれた大型イベント《Bloodstock Open Air》では、いくつか海外のバンドを招くことができました。例えばカナダからデヴィン・タウンゼンドが参加していますが、彼の場合、数週間早めにイギリス入りをして、ホテルで自主隔離をしていました。あの頃は規制レベルが日に日に変化していましたが、彼は飛行機の利用、検疫、検査といったことに関して、最大限の規制が敷かれたなかでの参加となってしまいました。

メタルに限らず、開催されたどのフェスを見ても、基本的にはイギリスの出演者で固めていたと思います。《ALT+LDN》というフェスではアーキテクツがプレイしましたが、入国が難しく出演を断念した海外のバンドもかなり出たため、多くの抗議が寄せられたようです。この夏のフェスではフライトの制限による出演キャンセルといった話をちらほら耳にしましたが、来年のフェスに関しては、アメリカやヨーロッパ諸国のバンドの出演がかなり期待できると思います。きっと、今年とは様子の異なるイベントになるでしょうね。

●個人的に、今後ライヴ会場にて必要になると感じる対策は？

イベントの裏側では、かなりの対策を講じていると思います。イギリスには《Music Venue Trust》という団体があり、数ヵ月前に彼らと話をしてきたところです。

このパンデミックで音楽会場の多くが収入を失い、今後どのような安全対策をもって運営していくのかについて真剣に考えています。代表のマーク・ダヴィッドを中心に、安全な運営のための換気システムの向上やワクチン・パスポート、抗原検査などの導入、消毒液の設置など、さまざまな議論をしています。

ライヴ会場は怖い場所という印象を持ってしまった人たちを戻すために、“ライヴ会場は、もはや危険な場所ではない”というメッセージを発信することに尽力しています。

ライヴをこれからも継続させていくことを目指して、彼らは真剣に動いています。出演者を含めて、ライヴ運営に関わる従事者たちのワクチン接種や検査の推奨、スタッフたちのフェイス・ガードの着用、手指消毒、そして何よりも互いに配慮する気持ちを持つことを推奨しているんですね。

そしてこの団体はライヴ会場のみに目を向けるのではなく、地域との連携も視野に置いており、ある意味、この音楽産業のなかで最も高い意識を持って活動しているのは、会場側の人たちだという印象さえも受けます。

参考情報>《Music Venue Trust》が発信しているガイドラインについては、下記HPをチェック。
◎https://musicvenuetrust.com/gig-guide/

証言 II

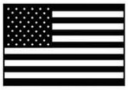
エンタメの本場ニューヨークでの、音楽イベント状況を聞く。

続いては、音楽、舞台、映画などを始めとする興行の本場ニューヨークより、一般市民がどのように日常生活を送り、エンターテインメントと接しているのかを聞いていこう。同じロック大国でも、英国とはまた違った状況なのがわかるだろう。そして日本の音楽ファンも、近く彼らと同じような環境でライヴなどに参加できるようになるのだろうか？

なお当インタビュー内容は10～11月時のもので、時期、州や市、イベントの趣旨によってもルールはさまざまであり、またあくまでも個人の感想であることを念頭に起き、現地での状況を知るひとつのケースとして参考にしてほしい。

話を聞いたのは……
羽村萌

国内のレコード会社での勤務を経て、ロサンゼルスに留学。帰国後はフリーランスで音楽宣伝やライター、YouTube番組制作に携わる。現在はニューヨークへと拠点を移し、東京での業務とともにワールドワイドに活動中。



ワクチンを打っていないと本当に何もできないんですよ。

●まずは、市民のワクチン接種状況について教えてください。

現在（10月上旬）は予約なしで誰でもワクチンが打てて、例えば薬局でも打つことができるんです。4月頃からは“誰でも打てます”という感じになって、例えば海外からの留学生でも打つことができる。それくらい“ワクチンを打ちなさい”という感じですね。

アメリカは“ワクチン接種カード”があって、2回目の接種が終わって2週間経つと、QRコードが提示されるアプリが落とせるんです。それには1年間の期限がついているんですが、市の決まりで、今はそれとIDを持たないとレストランで店内飲食もできないし、映画館にも行けません。当然ライヴにも行けないなど、けっこう厳しいんですよ。ワクチンを打っていないと、本当に何もできないですね。

●接種率は、ある時期からあまり上がっていないというニュースも。

それもありますね。そのため、例えば《グローバル・シチズン》という自然環境や医療を支援する団体が、著名人を呼んで大がかりなワクチンの普及を呼びかけるライヴをやったりもしていて。バイデン大統領のコメント動画が流れたり、ヘンリー王子が舞台に出てきたりと、エンターテインメント・イベントでも摂取を啓蒙しているようでした。

●ただ、州によって規制や意識にも違いがあるという。

あると思います。例えばボストン（マサチューセッツ州）は感染率が低いということもあって、ニューヨークよりも規制は緩いと聞きます。ほかにもオハイオ州やケンタッキー州は、飲食店でのワクチン接種カードの提示は義務づけられていないようです。カリフォルニア州はノー・マスクで歩ける時期もあったんですが、再び感染率が上がってきたので、またマスク着用になりましたよね。このあたりは州によって変わってきます。ただ、ライヴでマスクをしている人はほとんどいないんですけど……（苦笑）。

●飲食店や小売店、商業施設など、各店舗での感染対策もなされているのですか？

あります。検温は最近見なくなりましたが、しっかりとしたお店や施設だと、今も検温とハンドサニタイザー（手指消毒薬）を置いています。ただ、最近はハンドサニタイザーに手をかざしても出てこないことも少なくなくて……補充されておらず、とりあえず置いてはいるというようなこともあったり（苦笑）。

会場内に入ったら2019年と同じ印象も。

●ライヴに参加するための、ワクチン接種の義務は？

基本的には必須です。ニューヨーク・メッツの球場駐車場（屋外）で行なわれた《THE GOVERNORS BALL》の場合では、入場前にワクチン接種カードとIDを見せる時間があって、そこで証明となる黄色いリスト・バンドをもらわないとなかに入れません。入場パスとなるリスト・バンドと、もうひとつのリスト・バンドをしているということになります（右ページ上写真）。

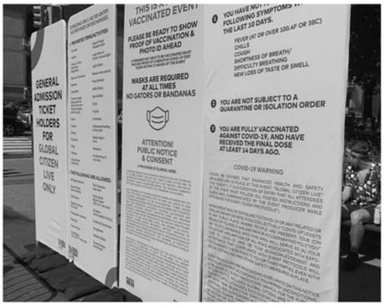
▲入場列の付近ではスタッフが声をかけてまわっており、そこで接種証明となるリスト・バンドを取得する。

もちろん“ワクチンは打たない”という人もいるので、そういう人たちは、参加に際して毎回検査を受けます。例えば薬局などで鼻から検査をして約1時間後にメールで結果が来る“迅速テスト”という検査方法もあり、そこで当日陰性が証明できれば入れます。

●会場内でのマスクについては？

会場内でのスタッフによるマスク着用の呼びかけは特になく、日本での“声を出してもいけない”、“観賞位置は固定”といったこともガイドラインには載っていません。あるのは、やはり“＜ワクチン接種の証明書＞か＜検査で陰性を証明＞した人ではないと入れない”ということ。

だから会場内に入ったら、2019年以前と同じ印象ですね。もちろん自主的にマスクをしている人もいますが、それは少数派と言えます。やっぱりライヴ会場に入るとみなさん気持ちが上がっちゃいますから(笑)。ただハンドサニタイザーはいたるところにあるし、スタッフは飲食ブースを含めて全員マスクを着用しています。



▲イベントの立て看板には、各種ガイドラインも明記されている。

●屋内ライヴハウスでの場合は？

私が参加したアッティラのライヴは[GRAMERCY THEATER]という“スタジオ・コースト(新木場)よりも少し小さい”くらいのサイズだったんですが、ここでも入場を待っている間にIDとワクチン接種カードを出して手の甲にスタンプを押してもらうという具合でした。ただ、大きいフェスよりはゆるめで、なかに入ってしまえばマスク着用について何か言われることはなかったですね。

《グローバル・シチズン》はワクチン接種は当然として、ライヴが始まる72時間以内のPCR検査もしくは当日の迅速テストによる陰性の証明書を出さないといけないなどありますが、そのあたりはイベントによって規定が違いますね。

お国柄としては やらないか、いつもどおりか。

●アメリカでのフェスには国外バンドの出演もある。海外からアメリカに入国する際のルールなどは？

フェスには、海外からのバンドも出ています。これは自分たち一般の外国人に対するケースとしての話しですが、私が5月下旬にアメリカに再入国したときは、自主隔離もありませんでした。陰性証明書を提出すると言われてはいたんですが、アメリカに着いてもチェックはなかったです。もしかしたらランダムだったのかもしれません。

街も以前に近い感じで、最近ブロードウェイも再開されたので、国内観光客は戻ってきている印象です。“いつまたコロナがヒドくなるかわからないから、今のうちに行っておこう”という感じのようで……このあたりは国民性かもしれませんね(笑)。ただ、やはり街のいたるところには“マスクをしよう”という掲示がされていて、電車やバスなど公共の場でマスクをしていない人はかなり目立ちます。個人としては、みなさん細心の注意を払っているんじゃないでしょうか。

●なお、アジア人への不当な扱いなどはなかった？

私個人としてはありません。5～6月頃は人混みで睨まれ追いかけられたり、電車で因縁をつけられたりという話を聞きましたが、最近はそういうニュースを見なくなりました。

●このあとも、ライヴやイベントは通常どおり開催されると思う？

もちろん、コロナの再拡大などにもよるとは思いますが、行なわれるのではと思います。アメリカのお国柄としては、“やらない”か“いつもどおり”かなので。あとは自己責任で、という部分もあるんじゃないでしょうか。ただボン・ジョヴィやシステム・オブ・ア・ダウンなど、最近またライブの中止や延期のニュースも目立ってきましたので、やはり事態に合わせた対応はなされてくると思います。

先程も言ったように、ワクチンを打っていることや陰性証明書を出すことがマストにはなっています。こちらは支持者が多いアーティストを使って“ワクチン接種を広めましょう”という宣伝もしています。個人的な印象としては、エンタメ業界と一緒になってワクチンを打つことを進めてる部分はあるかもしれないですね。

11月にテキサスで行なわれたフェス(《Astroworld Festival》)で、観客がステージに殺到して死亡者が出た事件がありましたよね。コロナ禍であることと直接関係がなかったとしても、少なくともこれは“観客たちが久しぶりにライヴに参加できたことでの高揚”が生み出した結果であるとも思います。もし日本のように鑑賞位置固定のレギュレーションがあったら……と思うと、まだまだアメリカも今後のライヴ運営について考えるべきところがあるのではと思います。

証言 III

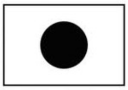
ライヴ興行制作会社スタッフに聞く、来日公演実現のために必要なこと。

日本で海外ミュージシャンの公演を企画するのが、"イベンター"、"プロモーター"と呼ばれる興行制作会社だ。小規模の単独公演から大掛かりなフェスまで、さまざまなイベントを企画・制作している。本企画のラストは《サマーソニック》や《ラウドパーク》といった日本を代表するロック系イベントを主催する[株式会社クリエイティブマンプロダクション]の現場担当者氏から、今後海外ミュージシャンの日本公演を実現するために必要なステップなどについて話を聞かせてもらった。

※会話の内容は10月上旬のものとなります。

話を聞いたのは……
安藤竜平

2007年3月、[株式会社クリエイティブマンプロダクション] 入社。宣伝部として、おもにパンク、ハードロック／ヘヴィメタル公演やイベントを中心に担当する。2012年頃からはアーティストのブッキングも行なっており、以降もラウドネスを始め、アウトレイジ、LOVEBITES、アンセムといった日本のヘヴィメタル公演も担当している。



お客さんにも協力してもらわないと成功はしない。

●海外からの渡航のハードルが高いなか、東京オリンピック／パラリンピックが開催されたことでの状況の変化はあった？

オリンピック／パラリンピックでアスリートが来日するということは、海外のアーティストが日本でライヴができるということにもつながってくるという意味で、その開催は洋楽プロモーターにとっては期待していた面がありました。

ただ開催が近づくにつれて無観客になり、その後もコロナ陽性者の隔離方式が機能してなかったりとほころびが出てきたのを受けて、開催うんぬんではなく、あまりいい雰囲気ではないなとは感じていたのですが。来日したアスリートが陽性者だったり選手村で陽性者が出たりということもあって、オリンピック後に規制が厳しくなるんじゃないかという心配もありましたね。

●オリンピック／パラリンピックで参考になったことは？

オリンピックだけではなく、サッカーの試合などでも"アスリート・トラック"として隔離を２週間ではなくで３日間にする処置があり、その後の移動はバブル方式なので、その条件を《SUPERSONIC》でも適用できるように動き、実現しました。結果としては、オリンピック開催が来日実現につながったのかなとも思います。

●９月に開催された《SUPERSONIC》では、海外ミュージシャンも出演しました。開催に向けた準備とはどういうものだった？

クリエイティブマンとしてのコロナ後のフェスは、今年５月に開催した《JAPAN JAM》が最初だったんですが、地元の方や行政との話し合いも含めてニュースにもなりましたし、まわりからもいろいろな意見がありました。当日、問い合わせの電話では"なんでこの時期に開催するんだ！"という意見もあったり。そういった声も理解はできるのですが、こちらとしては地元と行政に理解を得て開催をしており、コロナ・ウィルスへの対策も万全を期しているという自負があったので、理解していただけるよう心して話をしました。

その経験があったからこそ、SUPERSONICで何が必要なのか、というのが感覚としてわかっていたと思います。だからお客さんから"やり過ぎなんじゃないか"と言われるぐらいしっかり対策をしていました。それだけ無事にイベントを終えることに対しての意志は持っていましたね。

● SUPERSONIC での準備と対策とは？

事前の対応以上に、当日の場内スタッフに人数をかけていました。場内で検温、消毒、荷物検査などをするスタッフですね。アリーナの各通路には２～３人ずつスタッフがいて、"正しいマスクの着用"などの声かけがすぐにできるような態勢をとっていました。お客さんにも協力をしてもらわないと成功はしないと思っていたので、ステージ上の MC の方にもうまく促してもらったり。

もちろんお酒の販売はないのですが、持ち込みもしないようかなり徹底して荷物チェックをして。そこがやっぱり大きかったのではないかと思います。正直、どのような状況になるか予測がつかなかったところもあるので、かなり慎重にやっていましたね。

写真：© SUPERSONIC All Copyrights Reserved.

▲▶コロナ禍における、日本の大型音楽フェスの指針ともなった《SUPERSONIC 2021》。入場ゲートでは検温・消毒のほか、アルコールの持ち込みなどが厳重にチェックされていた。また場内でも設備の消毒が徹底されたほか、常時スタッフがマスク着用を呼びかけていた。

誰が感染しても おかしくない時期に、安全に開催できたことを 知ってもらいたい。

●国内のエンターテインメント興行に関しては、今もさまざまなルールが適用されています。この内容について、関係者には事前に通達があるものですか？

事前にはわかりません。こちらも政府が出すガイドラインを確認して、会場がどのような対応をするかで開催内容が決まってきます。ただ、ここまでくるとベースがあるので、そこから変わった部分をその都度チェックしています。自治体によっても微妙に違ってくるので、その各地のガイドラインを確認しつつ公演の内容を調整していきます。

●大都市近郊では緊急事態宣言の発令が複数回あり、それに合わせ公演内容を急遽変更しなければならないこともあったのでは？

そうですね。そのため新しい公演を決めて発表するときは、現時点での最低ラインを想定した内容にしています。通常はオール・スタンディングでやりたい公演も、椅子を設置したり立ち位置の枠を用意して収まってもらったり。先を見通してやるというのがなかなか難しいです。実証実験として“ワクチンを打っていることが証明できたらキャパを上げる検証をする”というニュースが出てもいますが、今後の動きとしては、状況を見ながら緩和されたときにチケットが追加できるような形を考えていかなければと考えているところです。

SUPERSONICは当初スタンディングで売っていましたが、最終的にはアリーナに椅子を置いて自由席として1席ずつ空けてコロナ対策をしていました。今後もそういう対応を想定しつつ、最終的には席種が変動するかもしれないということを前提に考えていかないといけないかもしれないですね。

●公演によって“ひと席空き”や“全席使用”など、着席の配置にも違いがあります。これは会場側の判断となる？

そこは会場や自治体、主催者によって違います。例えば私が担当した9月のラウドネス公演では、クラシックと同様に声を出さないという形で、全席指定のフルキャパで開催しました。ほかにも“グループ・ディスタンス”といって、グループごとに並んで座るという方法もあります。

●ロック系の公演は、他の興行と比べ規制が厳しいと感じる？

個人的には“そんなことはない”と言えば嘘になります（笑）。1万人以上入ったスポーツの試合で歓声が上がるシーンをニュースで見ていると、音楽のほうが危ない場所とされているのはちょっと……。感染拡大初期にライヴハウスでクラスターが出たので、今もそういう印象があるんだと思います。

この1年半、音楽業界全体が感染防止に努めてきているのを見てきました。ライヴ再開後は状況に関わらずライヴハウスやホールも含めた各会場、各公演ではしっかりとコロナ対策をしていて、安全に開催しているということはもっと知ってもらいたいですね。

待っているだけではなく、率先して道標を作っていく。

●海外ミュージシャン公演の実現に向けた次のステップとは？

今後クリエイティブマンとしては、洋楽公演を開催していきたいと考えています。ただ待っているだけではなく、政府に訴えかけていく形を作りSUPERSONICで来日

◀2021年、大物ロック・バンドとしては初めての来日を果たしたキング・クリムゾン。11月末からの日本ツアーに向けて、公演の1週間以上前に到着。久々の海外ミュージシャンということもあり、日本到着自体がニュースになったことも記憶に新しい。

を実現させた実績もあるので、ある意味クリエイティブマンが率先して来日公演を始める道標を作っていくつもりでやっていかないととは思っています。

SUPERSONICの次の段階としては、地方でツアーをするというところですね。

●海外ミュージシャンから、日本でライヴをやりたいというオファーはある？

あります。とは言え、すでに延期になり2022年で再調整をしている公演もあり、それが通常どおりできるのか様子を見ている段階で、それが"スタンディングのフルキャパで"という現状だと、まだ100%見えてはいないところでもあって。アーティストは"発表をしたらもう延期はしたくない"という感じなので、来日にはより慎重にもなっていますね。

私が担当したザ・ストラッツは2020年・2021年と延期をして、2022年に再度調整をしているんです。エージェントを通して"その時期は大丈夫なのか？"と言われるのですが、自信を持って答えられず、なかなか話が前に進まないですね。逆に新規のアーティストのほうが話が進みやすい部分もあります。

また、訪日の際は3日間の隔離でいいけれど、母国に帰ったときに2週間の隔離になるなどの制約もあります。これは日本だけの事情では話が進まないので、そういう部分で来日が難しいアーティストもいたと思います。

●来日した際の日本でのルールとは？

今はそこを関係省庁とも話し合っていて、どういう条件で来日できるのかということを調整しています。現状ではホテルでの隔離期間や交通機関の利用に関しても制限がかかってしまうので、そのあたりのルールが早く緩和されることが、来日公演が本格的に再開できるポイントになってくると思います。

SUPERSONICでの実績を踏まえて単独公演でも応用ができると考えています。

メタル・ファンの皆さんにも、ぜひ健康を維持していただきたいですね。

●ワクチン接種も進んできた現在、エンタメ公演に復調の兆しは感じる？

ワクチン接種が進むことが"通常＝オール・スタンディング公演でフルキャパ"に戻るために必要なことのひとつだと思っていたのですが……そこじゃないのかな？と思い始めたりも。ワクチンが進んだからといって、ライヴに関して緩和が一気に進むというところまでの雰囲気は感じていないですね。その見通しがいつになるのかは、まだ見えていないです。

逆に今の状態に慣れすぎて、いきなりパンパンな状態に戻るとヒイちゃう人もいるのかなと。ただ、どっちがいいのかは人それぞれだとも思います。空間があってゆったりがいい人もいれば、ガツガツいくのがいい人もいますしね。

●ライヴができるようになったのちも、配信コンサートは定着すると思う？

公演をやりつつ、配信や収録も同時にするというのが一般的になるかなとは思います。ただ、邦楽はそれができても、洋楽は権利的な問題もあり厳しいかな、と。SUPERSONICでは無料生配信をやったのですが、単体ライヴでやるとなると少々難しいですね。

"生でやるか、収録でやるか"でも違ってくると思います。生演奏でも問題なくできるアーティストは、ライヴを生で配信するのが一番ですよね。リアルタイムで観られる感じって、やっぱり収録ものとは違うじゃないですか。実際、私も自粛期間中にメタリカの配信を毎週観ていたんですが、"webで観ているけど、世界中のみんなが生で観ている"という一体感は今までになかった感覚だなと感じたので、うまくできれば洋楽もビジネスにつながるのかなとも思います。

●ズバリ、2022年にメタル・バンドの来日はある!?

それはもうできるかどうかではなく、やるしかないという感じです。まずはアーティスト的にも来やすいフェスから入って、もうちょっと状況を見ながら単独になり、そして地方に。そのためにも、まずはキング・クリムゾン公演（※11～12月）を成功させるというのが重要なポイントじゃないでしょうか。

だから観に来てくださるメタル・ファンの皆さんにも、ぜひ健康を維持していただきたいですね。やっぱりそこが一番ですから（笑）。そして、12月には何か発表されているかもしれないので、楽しみにしていてください！

Blooms...
The 1st Impact!
NEMOPHILA

Text & Photo by Takahide "THUNDER" Okami
(except：P.77～79)
Live Photo by Shigeyuki Ushizawa

NEMOPHILA

mayu × SAKI

DDCZ-9073
（初回限定盤／ CD＋DVD）

『REVIVE』
MASTERWORKS

1.「REVIVE」
2.「DISSENSION Remastered」
3.「鬼灯」
4.「HYPNOSIS」
5.「GAME OVER」
6.「Life REVIVE Ver.」
7.「SORAI Remastered」
8.「Rollin'Rollin'」
9.「Change the world」
10.「雷霆 -RAITEI- Remastered」
11.「OIRAN REVIVE Ver.」

DDCZ-2285
（通常盤／ CD）

あなたはNEMOPHILA（ネモフィラ）というバンドをご存知だろうか？
"Mary's BloodのSAKIが新たに参加したバンド"、"YouTubeでさまざまな楽曲を披露しているバンド"……
どれもそのとおりであるが、最も適切なのは"それまでにない個性を持った、
真正のラウド・メタル・バンド"なのではないだろうか。女性のみのグループではあるが、
そのサウンドに男女の隔たりなどなく、多くの人はその激音に魅了されていることだろう。
そんな彼女たちのラウド・サウンドの詰まった1stフル・アルバム『REVIVE』が、いよいよ解き放たれる。
そこで今回の特集では、同作にたどり着くまでのストーリーを、mayuとSAKIの言葉からたどっていきたい。
加えて葉月、ハラグチサン、むらたたむの個別インタビューにて、バンドの個性をより深く探っていく。

NEMOPHILAは、今まさに花開こうとしている！

HARLEY-DAVIDSON
MOTOR
CYCLES

ワガママでもいいから好きな人に声をかけたらまさかの全部がかなっちゃたという感じなんです。 mayu

2019年、肌寒さもすっかり落ち着き、朗らかな陽気が街を包んだ5月、しかし22歳となったmayuは、それまでとは違う新しい音楽活動を思い描いていた。もっと自分の好きな、ラウドな音像を求めていたのだった。

mayu　もともとバンドをやっていたんですけど、その頃は“自分の好きなスタイルで、もっとやりたいことができればな”という気持ちのまま活動をしていました。ラウド系をやりたいと思っていたんですけど、今のままじゃ難しいなと思って……それでそのバンドを辞めたんです。

ただ、mayuにはこのままバンド活動自体を辞めてしまう選択肢はなく、彼女は自分の理想を具現化するプロジェクトをスタートさせようと考えた。それこそ、その後NEMOPHILAとなるメンバーが集まるきっかけとなるものだ。

mayu　もしバンドをやるなら、みんな女の子がいいなとは思っていて。それで私は専門学校の同級生だったハラちゃん（ハラグチサン／b）を誘いました。でも葉月（g）さんは以前会っただけで喋ったことはなかったし、たむさん（むらたたむ／d）とちゃっきーさん（SAKI／g）は全然面識がなくて……そもそも手の届く存在だとは思っていなかったんです。それでも“ワガママでもいいから”と好きな人に声をかけてもらったら、まさかの全部叶ってしまったという感じなんです。

mayuが言うように、それまで接点はなく、知人を通じて連絡を受け取ったSAKI。当初はメンバーとしてのオファーではなかったという。

SAKI　“バンドを始めたい”という連絡があったんですけど、そのときはメンバーではなくプロデューサー的な立ち位置で入ってもらえないかという話でした。ただいろいろと話をしているうちに、プロデューサーよりもメンバーとして入れたらいいのかな、と思うようになって。そこからmayuちゃんとハラグチサンと一緒にスタジオに入ったんですけど、やっぱりツイン・ギターがいいかなと。それで葉月ちゃんが集まって、セッションから始めたんですね。

ご存知のように、SAKIはMary's Bloodを始め、さまざまなバンド〜プロジェクトで活躍している。さらに活動の幅を広げることに、ある種の躊躇はなかったのだろうか？

SAKI　やっぱり普段はMary's Bloodで活動しているんですけど、mayuちゃんのヴォーカル・スタイルはEYE（Mary's Blood／vo）ちゃんとは違うし、純粋に一緒にやれたらおもしろいかなと思いました。海外ではバンドをかけ持ちしている人もいっぱいいるし、音楽的に同じことをやってるわけでもないので問題はないかなと思って。

そしてmayuが以前のバンドを離れてから3ヵ月、彼女を軸として集まったこのメンバーでのセッションは8月にスタートし、翌9月には“バンド”としての活動が始まっていった。

はやりバンドが始動したのであれば、その次にすることはグループ名を考えることだ。グループ名がついて、初めてその集団は“バンド”となるのである！

SAKI　スタジオでホワイトボードを借りて、みんなでいっぱい書いたんですよ。日本語っぽいのにしようかって話もあったんですけど、mayuちゃんが“メンバーみんな女子だから、お花の名前にしよう”って言ってくれて。みんなで検索しているうちに、“ネモフィラをアルファベットの大文字で書くと、ちょっとメタルっぽくなるね”って。

mayu　書き方が完全にメタリカのロゴでした（笑）。私がネモフィラの花のことを知ったばかりで、[国営ひたち海浜公園]で有名になり始めている頃でもあって。ちゃっきーさんが“爽籟”という案を出してくれたんですけど、“爽やか”な印象を持つネモフィラと爽やかな秋風（＝爽籟）がつながったこともあって決まりました。

かくして実にメタル的な厳しい字面と、実は小さく可憐な花であるというギャップを持った“NEMOPHILA”というバンドが誕生した。なお、公式サイトにある“地獄のゆるふわバンド”というキャッチ・コピーはむらたたむの発案。“地獄のゆるふわバンドポジティブ系バキバキサウンドで笑顔をお届け”を短くしたものだそう（笑）。

現在はSAKIの弟君がデザインした家紋風のロゴとデス・メタル風のロゴが、彼女たちのアイコンのひとつとしてさまざまな場所に刻まれている。ただし、もちろん音楽性としては和風を強調しているわけでも、デス・メタルに特化しているわけでもない。

mayu　私のやりたい音楽もありますが、みんなの好きなジャンルはそれぞれ違ってもいます。ただ、総じて激しいものはみんな好きだなと思いました。だからそれこそ最初はカバーをやってみたりして、激しいなかでも“こういうの得意なんだね”ということをメンバー内で見つけていったというのが一番近いと思います。

SAKI　とりあえず好きなものや、やりたい曲を言おうということになりました。スリップノットとかフー・ファイターズとか、たむちゃんはオーペスが好きだったり。そういうのを全部並べていって、「明日なき戦い」とかお客さんも知っていてノリやすい曲をカバーしていったという感じですね。

正直、スクリームはやってみたらできたという感じで何でできるのか、自分でもわからなくって（笑）。 mayu

いざ活動を本格化させていこうというそのとき、世界はコロナ・ウィルスによる混沌に包まれ、どのバンドも平等に活動の縮小を余儀なくされてしまう。彼女たちにすれば、まだ一歩目も踏み出していないという時期だ。

mayu　“よし、ここから！”というときで、作品作りを積極的にやっていこうと思っていたし、ライヴの予定もたくさん組んでいたんですが、そんななかコロナが蔓延し始めてきて、予定は白紙……みたい

Killer

な感じに。

それでも2020年2月には、初のワンマン・ライヴを[渋谷REX]で開催する。このときはむらたが懐妊していたこともあり、サポート・ドラムとしてSHOW-YAの角田美喜が登壇。むらたはキーボードとしての参加となり、オリジナル布陣でのワンマンはまだ行なわれてはいなかった。

また同時期には“コロナ禍での常套活動”と言ってもいいだろう、オフィシャルYouTube《NEMOPHILA》を開設。前述の「明日なき戦い」を始めとしたカバーで彼女たちを知り、そのパフォーマンスに魅了されたという人も多いのではないだろうか。その映像で特に圧倒されるのが、ハスキーなスクリームをナチュラルに繰り出すmayuの歌唱だ。そもそも彼女には、シンガーとしてどんな経歴があるのか。

mayu　小学生の頃はジャニーズが流行っていて、もちろん私も嵐や関ジャニを聴いていました。でも、一番最初に買ったCDはボン・ジョヴィだったんですよね（笑）。それからバンドに興味を持ってマキシマム ザ ホルモンも好きになって、そういう音楽をかけたいがために放送委員になって怒られたのを覚えています（笑）。バンドは高校の軽音部からなんですけど、もともとピアノはやっていて、中学のときには吹奏楽部でドラムと少しベースもやりました。ギターも触れたけど弦楽器は全然できないと思ったし、ドラムはツーバスで挫折しました（笑）。それにラウド系のロック・バンドがやりたかったのでピアノでもなぁ……じゃあヴォーカルでいいや！という感じだったんです。

なんと、消去法でヴォーカリストに立候補したという！

mayu　私、もともとはめちゃくちゃ音痴だったんですよ！　ママにも“ヤバいよ”って言われるくらい音痴だったんですけど、ピアノをやっていくうちになんとなくマシになっていって、中学の頃にいろいろなバンドに興味を持ち始めて“音楽が好き”という感覚になってから変わっていきました。

修学後は音楽の専門学校にて、ヴォーカルを学んだmayu。

mayu　“バンド・ヴォーカル専攻”でした。そこでは歌唱レッスンがメインというよりは、音楽全般の授業という感じでした。もちろん歌の授業もありましたけど、バンド・ヴォーカルといえばロックかと思っていたら、意外とジャズやブルースなどを学びました。あとは座学でセオリーや譜面の書き方とか、そういう授業をやっていたかな。ここ1年くらいはトレーナーさんについてもらいヴォイス・トレーニングをしています。基本的にクリーン・パートに関してで、正直スクリームは“なんか、やってみたらできた”くらいの感じなんです。自分でも何でできるのかわかっていなくて（笑）。私的にスクリームは得意分野で、確かに自分と近い声ってあまり聴いたことがないので、そこを武器にしていこうとは考えています。逆に普通に歌うところのレンジは広くはないので、これから習得していきたい技もまだまだたくさんあります。

あの強烈なスクリームは天性のものだったのか！　なお、mayuはダンスも特技のひとつで、これは今のバンド・パフォーマンスでも生きているそうだ。

mayu　ダンスは小学生から高校までやっていたので、実は歌よりも得意なんです。マイクしか持っていないと動きに困っちゃうこともあるんですけど、そういうときにもどう動いたらカッコよく見せられるかというのが何となくわかるのは、ダンスをやっていた強みだと思います。人前に立つということへの度胸も、ダンスでかなりついたかな。

もしかしたら近い将来、mayuのダンス的ステージングが観られるかも!?

海外のコミュニティで何百万といったらしくその流れでYouTubeの登録者数も一気に増えて。SAKI

さて、話をYouTubeでのカバーに戻そう。なかなか本来のバンド活動ができない時期にも、NEMOPHILAは動画の配信を使い、日本のみならず、ワールドワイドにその知名度を上げていった。今時期の彼女たちにとって、YouTubeでの活動はなくてはならなかったものと言えるだろう。もちろん、“ゆるふわな女子”が激烈かつテクニカルなメタル・サウンドを繰り出すというのが最大の魅力ではあるが、それにプラスして“選曲の妙”も高い再生回数につながっているのではないだろうか。

SAKI　去年の1月に「明日なき戦い」と「OIRAN」を録って2月にあげたんですけど、最初はそんなに再生数が伸びなくて。でもFacebookの海外のロック・コミュニティで「明日なき戦い」が何百万といったらしく、その流れがYouTubeにも来て一気に登録者も増えて。毎週あげ出したのが去年の9月頃なんですけど、まだオリジナル曲もそんなになかったので、“じゃあ、カバーを毎週あげてみよう”というのが最初のきっかけです。ホルモンとかみんなの好きな曲を出してみて、“これならできるな”という曲からやっていった感じですね。

mayu　キッス（「デトロイト・ロック・シティ」）やハロウィン（「アイ・ウォント・アウト」）とか……ピンク（「ソー・ホワット」）は私が入れました。

SAKI　だいたい1～2週間くらい練習して、スタジオで録れるときは“せーの”で録って。緊急事態宣言下でリモートの場合は、各々家で映像を録ってという感じでしたね。

mayu　キッス、めちゃめちゃ楽しかった～。

SAKI　私は聖飢魔Ⅱがめっちゃ好きでよく白塗りをするんで、[三善]という舞台化粧品屋さんへいろいろ買いに行って。みんなで下絵を塗って白を塗っていったり、そういうのがおもしろかったですね。ミスフィッツ（「ダイ、ダイ、マイ・ダーリン」）はメタリカの『ガレージ・インク』バージョンでやったのでメタリカのシャツを着たりだとか、みんないろいろ考えてます。

ハード・チューンが並ぶリストのなかで目を惹くのがNiziUのカバー。このギャップこそ“地獄のゆるふわ”たるところだが、これはむらたのアイディアだった。

SAKI　たむちゃんが《Nizi Project》を観

ているって言っていて、"じゃあ「Make you happy」やろっか"と。それで、なぜか最後J.Y.Parkが出てくるっていう(笑)。全然知らない人も"NiziUとかやってんだけど！"って楽しんでくれているのかな。7月に『マツコの知らない世界』に出させていただいたときも、もともとNEMOPHILAを知らない人がYouTubeを掘ってくれて、それでNiziUを観て"ウケる！"、"こういうのもやってるんだ！"って楽しんでくれていて、それは嬉しいですね。

「REVIVE」は見るからにカラフルでスクリームもズバズバ入れていて"これが私たちよ"ということが表現しやすい曲。 mayu

YouTubeでのカバーによる認知度の向上は彼女たちが想定していたよりも大きく、特に海外からのリアクションは想像以上だったようだ。ただ、やはりバンドであるからオリジナル楽曲での勝負が本分。もちろん動画のなかには「OIRAN」などシングル曲もあり国内外から高い評価を得ているが、いよいよその"届けたい×聴きたい"というバンド&リスナーの想いが形になる。バンド始動から2年4ヵ月、ついに1stアルバム『REVIVE』がリリースされる。

SAKI　アルバムの内容については、今年の4月に会議をしていますね。その頃にはオリジナル曲もいくつかあったんですけど、そうではなく、アルバム用にいろいろ作って、シングルのなかからも何曲か選んでアルバムに入れるということを決めて。トータルで13曲かな？　それにプラスして6曲を新録して。それで10月くらいに出そうか？という案もあったんですけど、コロナの状況や、たむちゃんの第二子出産もあって、自然と12月のタイミングになったという感じです。

さて、彼女たちの創作の特性のひとつが、多くの曲で作曲家(＝秋山健介氏／サウンド・プロデューサーでもある)を起用してることだ。もちろんメンバー作曲のナンバーもあり、そもそも作曲家と共同作業をするバンドも珍しいわけではないが、これにはどんな理由があるのだろうか？

SAKI　自分がバンドをやってきて、もちろんメンバーが書くのも大事なんですけど、アレンジも作曲もできる人、プロデュースもできる人をひとり立てたほうがいいなと思っていて。自分がMary's Bloodをやっていることもあり、リーダーとしていっぱいいっぱいになってこっちが疎かになる状況が嫌だったので。そうならないためにも、話し合いができるもうひとりに立ってもらいたいなと。

そういったSAKIの考えもあり、Mary's Bloodチームの一員でもあった秋山氏がNEMOPHILAとタッグを組むこととなる。表題曲「REVIVE」を始め、多くの楽曲でペンを振るう彼とバンドの間ではどのような作曲ミーティングがあるのか、興味深いところだ。

SAKI　最初は"こういう曲にしたいです"っていうのをメンバーと岡さん(以前Mary's Bloodの制作にも携わっている、初期からのサウンド・プロデューサー)と秋山さんと話して方向性を決めます。秋山さんはアレンジまで詰めたものをくださるので、そこに対してみんなでフレージングをさらに変えたりしていく感じですね。これが最初から難しくて、めっちゃ"うわぁぁ"ってなります(笑)。それをみんな練習して飲み込んで持っていくと、"じゃあ、コレができるんだったらコレも"となっていくんで、めっちゃ大変です。でも、そういう課題が与えられることによって音楽的なレベルが上がっているのは感じますね。

mayu　歌に関しては私のレンジを把握して作っていただいているのでそんなに無理はないんですけど、"ここはこういうスクリームの感じ"とか"もうちょっと低いデス・ヴォイスは出る？"とか、そういうやりとりをすることはあります。

SAKI　レコーディングに関しても、テイクをたくさん録るんですよ。ベーシックの1本に対してダブリング、ハモリ、ハモリのダブル、ヴォーカルでもスクリームの雰

囲気違いとか、すごい本数を録っていて。いくらインディーズでやるからって、クオリティの低い音楽にはしたくないと思ったときに、プロデュースもアレンジも全部やってくださる方がいるというのは、すごく強いなと感じました。

そうして完成した『REVIVE』……その1曲目「REVIVE」からして猛烈なスクリームが轟くヘヴィ・チューンとなっており、“NEMOPHILAとはどういうバンドなのか”を一瞬にして理解させてしまう。絶対的オープニング・ナンバーだと言えるだろう。

SAKI　秋山さんに対するハードルがすごくて、“リード曲っぽいやつ”みたいな（笑）。そんなオーダーもないよな……と思いながら、でも本当に勢いのある“そういう曲”になったなと思います。

mayu　サビ以外がスクリームという、私の得意なタイプの曲なので歌っていてすごく楽しいんです。だからレコーディングもすごく早くて。ほぼ英語なので発音などのチェックに関しては長かったんですけど、録音自体は早く終わりました。逆に一番長かったのは「鬼灯」かな。

「鬼灯」も「RIVIVE」と同様mayuによる作詞曲で、インダストリアル的なオープニングや、ストナー的ロー・グルーヴが特徴的な一曲だ。ヴァースの詰め込んだ言葉と、コーラスでの開放感が大きなコントラストを生んでいる。

mayu　今までやらなかった技というかちょっと不思議な曲で、最初はお経っぽくと言われたんですが、“でも、お経読んだことないんですけど！”って（笑）。あとは私のレンジを超える曲で、サビで一番高いところでF音までいくんです。私的に止めてほしいのはE音なので、そこから半音高いっていうのでけっこう手こずったのもあります。あとはちゃんとしたラップをやるのが初めてだったので、いろいろな意味で技を使わないといけない曲だったなと思いますね。

オープニングから攻めまくってくる『REVIVE』だが、それ一辺倒にはあらず。「Life」、「GAME OVER」といったパワー・バラードは、アルバムに彩りを添えている。同時にmayuの別の表現力を見られる部分でもあるが、こういったタイプの楽曲で心がけていることとは？

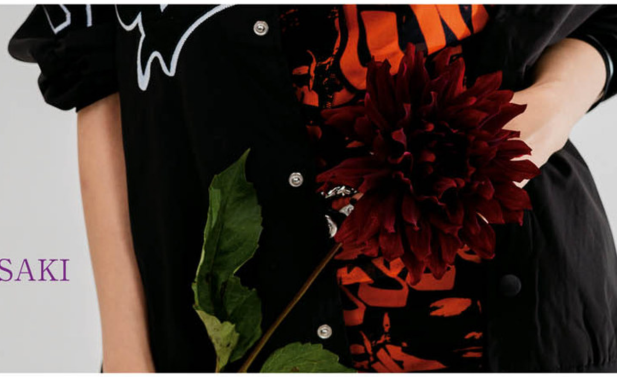
mayu　確かに「REVIVE」は見るからにカラフルでスクリームもズバズバ入れていて、“これが私たちよ！”ということが表現しやすいです。逆に「Life」とか「GAME OVER」は私にとっては難しいほうにはなるんですけど、特にネガティブな曲ではないし、悲しいとかそういう風に聴こえないように意識はしています。「Life」は“手を差し伸べる系”の曲だけど、「GAME OVER」は私には悲しい感じに聴こえていたので、作詞はけっこう悩みました。たむさんと一緒に作詞をしているんですが、たむさんのなかで“NEMOPHILAにネガティブすぎる要素はない”というのがあったみたいで、歌詞を一緒に考えていくうちに方向性が変わって、“表に出ない強さ”が出せるといいなと思い歌えた曲ですね。

ハードな歌唱のなかでさまざまな表情を見せるmayuだが、ヴォーカル・テイクについてメンバーからアドバイスやリクエストをもらうことはあるのだろうか。

mayu　もちろん自分で気づかずフラットしていることがあるので、ちゃっきーさんに言ってもらったりとか。たむさんには“今のテイク声が明るかったよね”とか言われるんで、そのときの喉のポジションで歌えば好印象を持ってもらえるんだななんて感じたりすることはありました。まだまだ習得したいことはあるなと思いますね。

ほかにも多くの楽曲で作詞を務めるmayuだが、メンバー／作家の書いた楽曲を歌うことで、また新たに気づかされたことがあった。

mayu　今までは“うわ、また作詞を頑



NEMOPHILAがおろそかにならないためにも話し合いができるもうひとりに立ってもらいたいなと思っていた。　SAKI

リズムやその曲で言いたいことと向き合ったとき、適合する言葉、しない言葉がわかるようになったのもこのアルバムからで。 mayu

張んなきゃ”みたいなところがあったんです。シングルだった「雷霆-RAITEI-」と「DISSENSION」は作詞家さんに書いていただいているんですけど、いい歌詞ってストーリーがくっきりしていて、数回歌うだけで覚えられるんですよ。当時の自分にはそれができていなくて、それを「雷霆」を書いてくださった宮腰（侑子）さんにお話ししたら、“そこもひとつのテクニックなんだよ”と言われて。ただ詞を書くというよりも、リズムやその曲で言いたいことと向き合ったときに、適合する言葉としない言葉が何となくわかるようになっていったのもこのアルバムからで。自分では遅かったなと思うんですけど、でもそういう書き方を始めてから体に入るのが早くなりましたし、自分で書くから歌いやすいってことにも気づきましたね。

またメタル・ソングの花形と言えば、やはりギンギンに歪んだエレキ・ギターだ。ツイン・ギター編成であるNEMOPHILAは、SAKI＆葉月によるシュレッド＆ハーモニー・プレイも大きな聴きどころと言っていいだろう。SAKIに、葉月とのコンビネーションについて聞いてみた。

SAKI　デモにリードは入っていないので、そこは自由にやってと言われますね。“ここはツインがいいね”みたいな指定があるときは、葉月ちゃんとふたりで考えて。葉月ちゃんはレガートとかタッピングとか使ったり、ちょっと柔らかいニュアンスの音使いで、自分はバキバキに弾くタイプで、そういうところでの違いがあると思います。「REVIVE」なんか、キャラの違いがすごく強く出てたかな。バッキングでも、例えば「HYPNOSIS」はニュアンスをつけていこうと話をしていて、細かいビブラートなどは今までやったことがないアプローチで、そういうのが楽しかったですね。

どの曲でもスリリングなギター・プレイを聴くことができるが、自分以外の作家が作った曲はニュアンスの違いがあり、どの曲もチャレンジングだったというSAKI。そんな楽曲が並ぶアルバムのなかで、唯一SAKI作曲となるのが、攻めまくるスラップが全篇で聴けるアッパーな縦ノリ・ソング「Rollin'Rollin'」だ。

SAKI　シングルに入っていた「Monsters」が自分の曲なんですけど、同じようにシンセのニュアンスが強い曲もやっていきたいなと思っていて、そういうポジションになればいいなと入れました。ただ、スラップを入れたのは秋山さんで、私のデモだと普通だったんですけど、急にスラップが入っていてハラちゃんが青ざめていました。こんなに？みたいな（笑）。

近年は国内外を問わず女性メンバーを有するメタル系バンドが多く、特に日本ではハードなサウンドを鳴らすガールズ・バンド・シーンが活発だ。“無意識のうちに意識してしまう”ということもあるのでは？

SAKI　一番最初にmayuちゃんの歌声を聴いて思ったのは“スゴいスクリームができる！”ということでしたけど、日本のガールズ・バンドでスクリームをやっている人たちっていなくて。逆にアイドルのほうがデス・ヴォイスやシャウト、スクリームをしている人が多いじゃないですか。だから自然と差別化はされると思っています。

mayu　私もスクリームが武器になるとは思っていたので。あとは、自分のなかであまりガールズ・バンドということを主張したくはなくて……みんな男性並みにゴリゴリにやりますから。音はヘヴィだし、ツーバスもドコドコだしと思ったら、もう無理しなくてもNEMOPHILAというものが確立できるんじゃないかなと。サウンドで男女を分けて聴いたことはないので。バンドとして何が楽しいかな？と思ったときに、女の子とゴリゴリなことをしたいというのが一番の理想でした。

『REVIVE』を聴けばすでにメンバー全員がほかにない個性を発揮していることは明白で、自分たちの武器をしっかりと前面に出していれば、自ずとNEMOPHILAならではの音楽になるということを彼女たちはすでに知っている。

そしてアルバムのあとに控えているのが、いよいよフル・メンバーとしては初となる有観客ワンマン・ライヴだ。しかも[LINE CUBE SHIBUYA]という、大型ホールでの開催となった！

SAKI　楽しみですね！　これが決まったときはみんなビックリのほうが大きかったんですけど、だんだんと“もしかしたらイケるんちゃうかな”……という気持ちになっていって。

mayu　個人的には楽しみのほうが勝っ

ようやくフル・メンバーでワンマンができるので演奏していることを見せられるのが嬉しい。とにかく楽しんでもらえるライヴにしたいと思います。 SAKI

DISCOGRAPHY

●オフィシャルHPにて発売中
https://nemophila.theshop.jp/
※各種音楽配信サイトでもリスニング可能

CD

●1st EP
「OIRAN」
（MWBR-0019 ／ 2020年2月29日）
1.OIRAN
2.MONSTERS
3.Life

●2nd Single
「雷霆 -RAITEI-」
（MWBR-0020 ／ 2020年8月22日 ）
1.雷霆 -RAITEI-
2.SORAI
3.OIRAN -Instrumental-
4.MONSTERS -Instrumental-
5.Life -Instrumental-

●3rd Single
「DISSENSION」
（MWBR-0021 ／ 2021年2月28日 ）
1.DISSENSION
2.FIGHTER
3.雷霆 -RAITEI- -Instrumental-
4.SORAI -Instrumental-

Digital Single

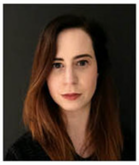
「REVIVE」
（2021年10月13日）

「HYPNOSIS」
（2021年11月17日）

英国限定CD

『OIRAN – EXTENDED EDITION』
（JPU Records ／ 2021年6月25日）
1.OIRAN
2.MONSTERS
3.Life
4.雷霆 -RAITEI-
5.SORAI
6.DISSENSION
7.FIGHTER
8.DISSENSION（English Version）

『OIRAN - EXTENDED EDITION』購入ページ　https://jpurecords.com/collections/hot-right-now/products/nemophila-oiran-extended



message from UK
エレノア・グッドマン（『METAL HAMMER』副編集長）

彼女たちのサウンドはスラッシュに留まらず、ポップやモダンなメタルと、花魁がさまざまなジャンルを掻き回しているようですよね。それらを網羅しながら、グレイトなリフやソロにも欠くことはありません。バンドが持つ自信とアティチュードが私は好きです！

今後、より世界的に活動するためには、やはり多くのバンドと同様に、人前でプレイする機会をどれだけ多く得られるかが鍵になってくると思います。フェスへの参加、サポートでのプレイなどの機会が重要でしょう。頑張って！

ているかな……強気です。NEMOPHILAはステージも広いほうがカッコよく映るし、5人のメンバーでフロントに4人いると、やっぱり広いほうが動きやすいなとも思っていて。あとヴォーカルって、やっぱりお客さんがいないとつまらないし、難しいなっていうのもすごく思うんです。だから目の前にお客さんがいるんだっていうことに対してテンションが上がっています。

当然、これまでのシングル曲や『REVIVE』からの曲が満遍なく披露されることだろうが、これまでの活動を見てきたファンのなかには、YouTubeで観られるようなカバー曲を期待している人も少なくはないだろう。

SAKI　今までもちょこちょこやってはいたので、セットリスト次第ですかね。今までは曲がないなかでのワンマンでカバーの比率が高かったんですけど、最近はあまりやっていなかったんです。

カバー曲は知名度も高く安定的な盛り上がりが期待できる反面、そこに依存してしまう可能性もあり、諸刃の剣ともなり兼ねないが……。

SAKI　最近は“もっとオリジナルをやって”という反応が多かったので、案外そうでもないのかなって。カバーはあくまでもみんなのお楽しみという感じです。

ライヴが楽しみなのは、ファンもメンバーも同じだ。

SAKI　ようやくフル・メンバーでワンマンができるので、演奏しているところを見せられることが嬉しいです。いきなりLINE CUBE SHIBUYAでワンマンをやるバンドっていないと思うので、その感じも含めてとにかく楽しんでもらえるライヴにしたいと思います。

mayu　不思議なことを言いますけど、“NEMOPHILAは本当に実在するんだよ”っていう（笑）。コロナの状況になってから我々を知る人が多かったので、本当にいるし、ちゃんとやってるよっていうのを有観客で観せたいなと思いますね。

このLINE CUBE SHIBUYAでのコンサートをもって、彼女たちの活動は本格的なスタートとなるだろう。初のフル・メンバー有観客ライヴが1stアルバムにともなう大型ホール公演と、その一歩目は大きなものとなったが、もちろんここからが勝負。すでにその先をも見つめる彼女たちのヴィジョンとは？

SAKI　来年に関してもいろいろと決まり出していることもあるんですけど、やっぱりもっと作品を作っていきたいです。明確にここっていうのは決めずに、いっぱい作品を作ってライヴをしたいなと思いますね。

mayu　もちろんライヴの場数をたくさん踏みたいですし、作品も作っていきたいです。個人的には海外でのライヴも実現させられればいいなと思っています！

on GUITAR 葉月

ヘヴィメタル・ミュージック最大の特徴と言えば攻撃的なギター・リフであり、華麗なハーモニーだ。SAKIとともにそのサウンドの骨子を担う葉月のミュージシャンとして目指すところは？

――ギターを始めたきっかけを教えてください。

幼い頃から海外のバンドやメタルを聴いてきて、バンドをすることに憧れがあったんです。そのとき気づけば目で追っていたのはギタリストばかりで、自然と"自分もギターを弾いてみたい！"と思うようになったんですよね。

――NEMOPHILAに加入する前の活動は？

高校を卒業して音楽学校に通いながらバンド活動をしていて、東名阪ツアーなども行なったり。ほかにも少しばかりですが、サポート・ギターとしての活動もしていました。

――NEMOPHILAに加入することになったときの、率直な感想は？

SAKIさんとは《WGGC》という女性ギタリストだけのイベントで共演をしていて、そのつながりで声をかけてもらったんです。"メタルコア、ラウド系の方向性でいく"ということで、まさに自分の演奏したいジャンルでもあり喜んで引き受けましたね。最初からメンバー全員が世界を狙っていて、ワールドワイドなバンドになっていくだろうなって(笑)。

――葉月さんから見たmayuさん、SAKIさんとはどんな人ですか？

mayuちゃんは人懐っこくて、裏表のない素直な女の子。一緒にいると明るくなれます！　しかも、いつもストイックで自分に厳しい面もあって、見習うことも多いです！　やっぱりNEMOPHILAにとっての要はmayuちゃんの力強い歌声やシャウトですよね。SAKIさんは面倒見のいいお姉ちゃんのような存在ですね。同じギタリストとして尊敬する部分もあり、いろいろと相談することも多いです。あと、いつ寝ているんだろうと思うくらい仕事が早い(笑)。頼れるリーダー！

――ニュー・アルバムでの、葉月さん的聴きどころを！

「REVIVE」のギター・ソロはとにかく悩んで、一週間くらい"弾いてはボツ、弾いてはボツ……"のくり返しで相当練り込みました！　ハモリ部分もぜひ聴いていただきたいですね！　私的得意分野として、哀愁系のギター・ソロや、スラッシーで少しトリッキーなジェント的要素は今後も密かに入れていきたいと思っています。

――今後NEMOPHILAをどういったバンドにしていきたいですか？

今回のアルバムには王道ロックンロールからオリエンタルな要素と、かなり色彩豊かになっています。でも土台となるメタルコアやラウドな部分は崩していないので、今後もこういった方向性で作っていけたらなと。海外からのコメントも目にするようになってきたので、いずれは海を越えてライヴがしたいですね！

on BASS ハラグチサン

5弦ベースを操るハラグチサンの魅力は、なんと言っても自然体で溢れ出るパッションと低音！　日々成長を遂げるベーシストに、今後のヴィジョンを聞いてみよう。

――楽器は最初からベースだったんですか？

思い返せば中学のときに吹奏楽部でバリトン・サックスをやっていたのが、低音……というか、リズム体に目覚めたきっかけで。もともとはギターに憧れていたんですけど、高校で軽音楽部の演奏を観てベースを始めました。ベーシストの清さんと上原太さんには、特に影響を受けました！　清さんは女性ですが、漢らしいプレイにギュンギュンに脳みそを揉まれたのを覚えています(笑)。

――それからは、自身でもバンドをスタートさせていきますよね？

バンドのほかにサポート活動もしていました。とにかくいろんな経験をしたくてたまらなくて。18～19歳頃にやっていたバンドでは、ヴォーカルが急に海外に行ってしまって急遽私が歌わなければいけなくなったり、NEMOPHILAを始める前のバンドでは人生初の海外……台湾でライヴをしたりと、いろいろな思い出があります。

――そんな活動を歴て、NEMOPHILAとして声をかけられます。

初めてお話を聞いたときは“そんなぁ……（驚）”という感じだったんですけど、いざ固まってくると“これは今まで想像していなかった世界が始まるのかも！？”と考えるようになって。

――バンド・メイトとなったmayuさん、SAKIさんの印象は？

mayuちゃんは同じ年なんですけど、自分と違う感性やキャラがおもしろいです。同じ年はたくさんいるけど、”音楽をやっている仲間”となると違うものがあり、とても刺激になります。それに明るくてゆるゆるしたところもあって、ギャップがいい！　SAKIさんはウルっとくるくらい、本当に面倒見のいいお姉さんのような存在です。どんなことでもしっかり乗りこなしていく姿はリスペクトです。でも音はめちゃめちゃヘヴィでダークで、ステージングも激しくてキレイで……純粋にカッコいいですし、惚れます！

――そんなメンバーのなかで、ハラグチサンはどんな個性を出そうと思いますか？

パッションですね！　気持ち、情熱……大切です。アルバムの曲でならば、やっぱり「Rollin'Rollin'」を聴いてください！

――今後の目標を聞かせてください！

曲もどんどん作っていきたいし、ツアーもやりたい。海外でのライヴもやりたいですね。何にも囚われずいろいろなことに挑戦して、その経験をもとに音楽を作っていきたいです！

Personal Interview-3

on DRUMS むらたたむ

NEMOPHILA以前からドラム専門誌でも取り上げられ、SAKIに次いで幅広いキャリア＆スキルを持つむらたたむ。そんな彼女がバンドに加入した理由とは？

——ドラムは高校の部活から始めたそうですね。

本当はチア部に入ろうと思っていたんですけど、仮入部でドラムを叩いてみたら楽しくて、そのまま入部をしたんです。今でこそたくさんのドラマーさんを尊敬していますが、当初は憧れのドラマーさんや好きなドラマーさんはいなかったと思います

——NEMOPHILA以前のキャリアを改めて教えてください。

SORAMIMIという4人組バンドを、めちゃくちゃ真剣にやっていました。いろいろあってSORAMIMIが活休になったあとはしばらくソロ・ドラマーとしてライヴをしたり、CDを出したり、国内外でドラム・クリニックをしたり、YouTubeをやってみたり、サポートしたり……していました。その頃にメンタルとか、ドラマーとしての最低限の基盤が培われた気がします。あ、SORAMIMI時代にDisqualiaさんと対バンしたことがあって、すでに葉月ちゃんとお会いしていたっぽいです！　ひと言も話してないけど（笑）。個人名義のライヴではMary's Bloodさんと対バンしたこともあって、そういう意味ではSAKIさんともつながりはありましたね。

——その後、同じバンドのメンバーとして活動をすることになります。

私的にバンド活動で大事なことって、楽器のうまさよりも互いの調和やコミュニケーションで。そんななかなぜNEMOPHILAに入ったのかと言えば、監督的な立場としてSAKIさんがバンドに参加することになったからで。この人と一緒に仕事がしてみたいと思ったんですね。

——なるほど。そんなSAKIさんは、むらたさんにはどのような人に映りますか？

自分に厳しいストイックな人。バリバリ働いている姿を見て、自分もしっかりこなさなきゃなって心が動かされます。この人と仕事がしてみたいと思ったのは本当に正解でした（笑）。メンバーのみんなにもめちゃ優しくて、"もっと言えばいいのに！"と思うこともあるくらいで。

——優しいというのは、皆さんが口にしていますね。ギタリストとしてはどうでしょうか？

プレイヤーとしてはテクニックがピックアップされがちですけど、それだけじゃなくて、まわりを聴いて合わせる能力がすごく高いんです。本番でもアドリブを入れてきたりして、それもまたいいんですよ。

—— mayuさんは？

とっても素直な人。自分の道を突き進められる、ヴォーカリストとして完璧だと思います！　あと超絶気遣いができる人でもあって、むしろ、もっとワガママになってもいいのに……と思ったりもします。

——シンガーとしての個性とは？

彼女の純粋さ、人間味は歌にも現われていて、気持ちが全面に出るところが本当に魅力的です。成長スピードが赤ちゃんみたいに早いので、近くで過ごしているとこちらもいい刺激をもらえるんですよね。今後どう進化していくのか楽しみだなぁ（笑）。

——むらたさん的には、どんな個性をバンドに持ち込んでいきたいですか？

"むらたたむとして"のポップな雰囲気。それに加えて"NEMOPHILAバージョンのたむ"という感じで、強くて硬い、私のなかの荒々しい部分を見せていきたいですね。これからはもっとライヴがしたいし、楽曲も作っていきたいです。ちょっと抽象的ですが、互いに高め合えるバンドであり続けたいですね！

オリジナル・フル・メンバーによる有観客1stライヴが決定！

REVIVE ~IT'S SOOOOO NICE TO FINALLY MEET YOU!!!!!~

【開催日時】2022年1月9日（日）

［開場］17:00　［開演］18:00

【会場】LINE CUBE SHIBUYA（渋谷公会堂）

【座席】全席指定

※公演に関するお問合せ：DISK GARAGE／
☎050-5533-0888（平日12:00～15:00）

□生配信もあり！

すでに有観客での会場席は完売となってしまったが、同日のステージは生配信も実施されるので、LINE CUBE SHIBUYAに集まれなかった人も、ぜひそちらでチェックしてほしい！

ライヴのストリーミングは、下記チケット・サービスまで。
価格は該当HPにて確認。
■ローチケ ライブ（LIVE）
https://l-tike.zaiko.io/e/nemophila1029
■LINE LIVE-VIEWING
https://ticket.line.me/sp/nemophila_llv
【共通】
［チケット］発売中＜1月16日（日）21:00まで＞
［アーカイブ視聴期間］ライヴ同時刻～1月16日（日）23:59

オフィシャルHP　https://nemophila.tokyo/index.html

The latest article
from UK

Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』355

40 YEARS.

追憶のなかのメタリカ

1981年に結成されたメタリカも、2021年に40周年を迎えたバンドのひとつだ。
説明不要のメタル・モンスターはこの40年の間、紆余曲折を経ながらもとどまることなく巨大化し、
周辺を巻き込みながらジャンルそのものを活性化させていった。
本特集では、そんなバンドと間近で接してきた仲間たちの証言を
＜1980年代＞＜1990年代＞＜2000年代＞＜2010年代＞と区切り、
その時代ごとのメタリカ像を紹介していく。
スラッシュ・メタルをともに作り上げていった盟友たち、苦楽をともにした元メンバー、
大作の完成を補佐したプロデューサー、影響を与えた先人ミュージシャン……
彼らだけが持っている、追憶のなかのメタリカ。

GARY HOLT × CHARLES "CHUCK" BILLY

ゲイリー・ホルト&チャック・ビリー

Text by Joe Daly

メタリカとともに"ベイエリア・スラッシュのホーム"サンフランシスコを盛り立ててきたエクソダスとテスタメント……そのゲイリー・ホルトとチャック・ビリーは、メタリカがやって来てヘア・メタルを追いやり、新たなサウンドを打ち立てた夜を忘れはしない。同シーンを走ってきた彼らにとっての、1980年代のメタリカとはいかなる存在なのか!?

音楽的革命は孤立して起こるものではない。事実上、どんなに確立されたジャンルでも、完璧な条件が揃わないと変化は起こらないのである。そんな特別なことが起こった場所へとさかのぼってみよう。1983年にメタリカがロサンゼルスからサンフランシスコへと移住してきたとき、彼らは壮大な夢を持っていたが、自分たちが新たなシーンやジャンルを創り出し、ヘヴィメタルのあり方を変えてしまうであろうことを予見してはいなかった。

"ベイエリア・シーン"について語るのならば、80年代中盤のサンフランシスコにおけるスラッシュ・メタルの台頭に触れないわけにはいかない。"それ以前のサンフランシスコはヘア・メタルの本拠地だったよ"と、テスタメントのフロントマン、チャック・ビリーは言う。"80年代初頭から中盤までは、ほぼそれしかなかった。スパンデックスとヘア・バンドばかりさ"と説明する。

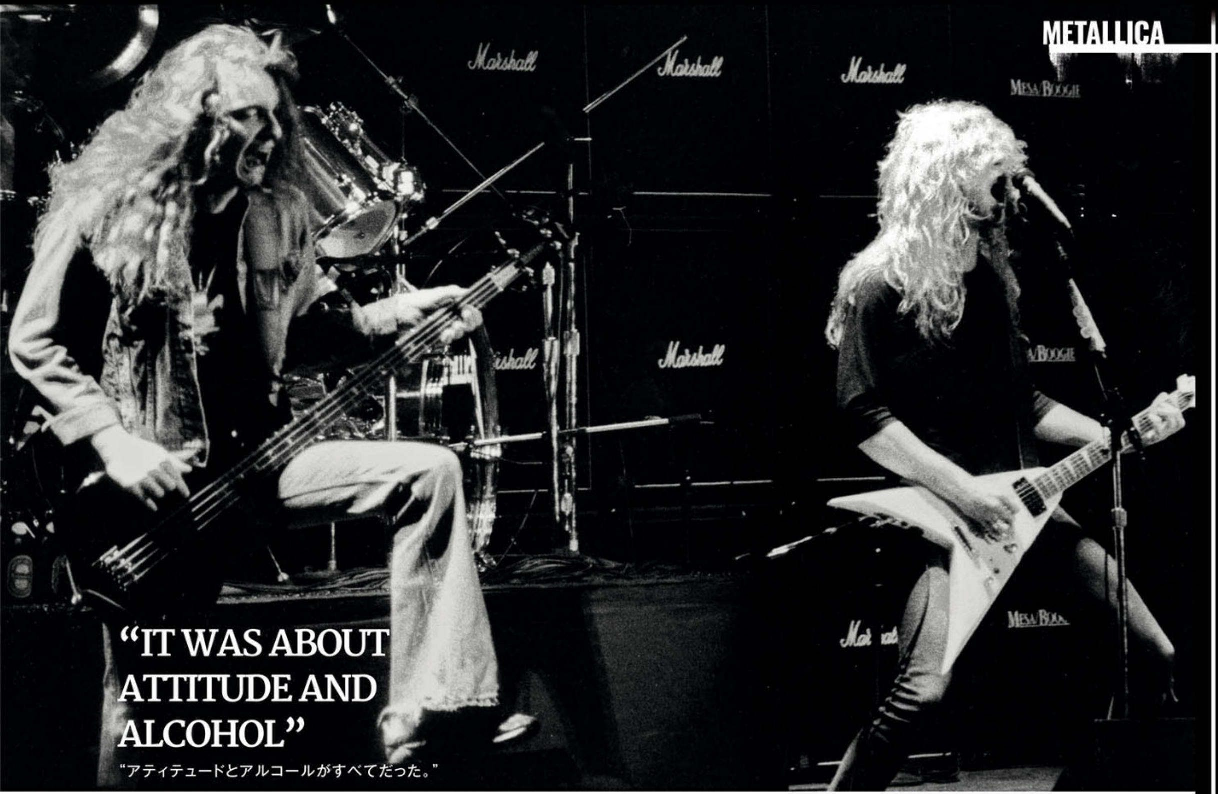
数時間ほど南へ行ったロサンゼルスと同じく、サンフランシスコは活発なパンク・シーンも誇っていた。ただパンクとメタルのクロスオーバーは存在せず、それぞれが自分たちのシーンにとどまっていた。そんななか、パンクのスピードとメタルのヘヴィネスと攻撃性を融合させた新しいサウンドを生み出すため、メタル・ヘッズとパンクスを団結させたのがメタリカだったのだ。これは両者の妥協ではなく、"仲間になるか、踏み潰されるか"を問う暴力的な宣戦布告でもあった。

メタリカがベイエリアにやってくる頃、エクソダスという名のローカル・バンド……その共同創設者であるカーク・ハメットとゲイリー・ホルトは、燃えたつような脅威とともにスラッシュの種を蒔いた。そしてメタリカとエクソダスが衝突することで、シーンが生まれていく。"いくつかの、いわゆるクラブでプレイした"とゲイリーは言う。"だけど、初めてプレイした本当のクラブは[オールド・ウォルドルフ]で、そこでメタリカと会ったんだ。まるで鏡を見ているようだったよ。ふたつのバンドは本当に似たスタイルの音楽をやっていたからすぐに仲良くなって、まぁそのあとどうなったのかは知っているだろ?"。

ベイエリアのグラウンド・ゼロは、リッチモンドにある悪名高き"メタリカ・ハウス"だった。そこでバンドは、不快なほどの大音量と比類なき悪行で知られる大規模な打ち上げをやっていた。この常軌を逸したパーティが、新たなメタル・コミュニティを形成する坩堝になっていくのだ。"この素晴らしいバンドを観にきた人々、彼らを追っていた人たちがいつもそのパーティにいたんだ。それでみんな音楽シーンに触れ、コミュニティができあがっていったのさ"とチャックは言う。

この仕組みが続いたことは、ある種の奇跡だ。"破壊行為もたくさんあったな"とゲイリーはクスクスと笑う。"バークリーでのライヴでレイヴンとメタリカのあとに俺たちもプレイしたんだけど、メタリカ・ハウスに戻ると、レイヴンのロブ"ワッコ"ハンターが、誰かを殴って手を骨折していてね……ツアー中なのにさ。それでパーティは完全に狂気の沙汰になってしまった。動物小屋を1000倍ヒドくしたものだと思ってもらえばいい"。

当然、後続のベイエリア・スラッシュ・メタル・バンドたちもすぐに現われた。"最初は俺たちとメタリカだけだった"とゲイリーは振り返る。"それから若い子たちがスラッシュという新しいものを発見して、パー



"IT WAS ABOUT ATTITUDE AND ALCOHOL"

"アティテュードとアルコールがすべてだった。"

ティに加わったのさ。デス・エンジェルも最初からいたし、それからテスタメント、ヴァイオレンス、ポゼストやラーズ・ロキットも加わってきて。素晴らしい時代だったね"。

"スラッシュ"が身内の言葉になると、新しいバンドたちはヘヴィメタルの猛烈なヴィジョンや、潰れるまでパーティをするという精神に刺激されるようになった。*"アティテュードとアルコールさ"*とチャックは話す。*"ひたすら呑んで楽しむんだ"*。

この攻撃的で新しいサウンドの出現は、消滅へと向かうヘア・メタル・シーンへの弔いの鐘となった。*"メタリカがあっという間にベイエリアを制圧して、グラム・バンドの多くがロサンゼルスに引っ越した"*とチャック。*"ヤツらがベイエリアを去ると、スラッシュ・メタル・バンドたちがライヴハウスにアクセスできるようになって、突如俺たちの居場所ができたのさ"*。

つまり、スラッシュ・メタルの戴冠式は一回だったわけではなく、[ルーシーズ・イン]、[カブキ・シアター]、[フィルモア]、[オールド・ウォルドルフ]といった場所での、ビールまみれの活気溢れるライヴ活動を通じてなされたのだ。

メタリカがツアーをやるようになると、まもなくほかのバンドも自分たちの道を切り拓き、レコード会社と契約をし、忠実なファン・ベースを築いていった。今日でもベイエリアは、メタリカを含む80年代のあのシーンで生まれたバンドほぼすべてのホームであり続けている。

新しいことをやっている瞬間には、"現在"以外の文脈は存在しない。ただときの経過だけが、時代の重要性を明らかにするのであり、ゲイリーにも言葉だけであの時代の興奮や活力を呼び覚ますことはできない。*"俺たちの人生や音楽にとって特別なときだった。ヘヴィメタルという木の枝全体がサンフランシスコという小さなスポットに伸びていたんだ。俺が人々に言えるのは、「わかるはずないよ、あのときあの場所にいなければね」ということだけさ"*。

OZZY OSBOURNE

オジー・オズボーン

Text by Rich Hobson

メタル界のゴッド・ファーザー、オジー・オズボーンは、メタリカにとっても憧れの存在だ。1980年代の思い出、そして元メンバーであるロバート・トゥルージロの人間評とは!?

――1986年、初めてメタリカに会ったときの思い出は？

みんなロサンゼルスの［サンセット・マーキス］に泊まっていて、そこで会ったんだ……彼らを従えたツアーを始めて間もなくの頃だね。彼らはまだ“箱から出たばかり”だったけど、みんな彼らが大好きだったよ。すでにファンもたくさんいたし、なによりみんないいヤツだったからすぐに成功したんだ。それに、その後には俺の昔のベーシスト（ロバート・トゥルージロ）と一緒にやることになったのも嬉しかったな。

――当時の彼らはどんな感じでしたか？

オープニングだった彼らの楽屋の前を通ったら、ブラック・サバスがかかっていたのを覚えている。大ファンだなんて知らなかったから、俺をからかっているのかと思ったよ！　ジェイムズはツアーの最中ずっとウロウロしていて、何かを言いたそうでね。最終的にやって来て“あなたと一緒に「パラノイド」をプレイしたいんだけど”って言ってくれて、俺は“もちろん！”と答えたさ。彼らがサバスの大ファンだってことがすごく伝わってきたな。あと、クリフはいつも顔に大きな笑みを浮かべていてね。2009年には《ロックの殿堂》で再び彼らと一緒にやることになって、あれも素晴らしかったよ。

――ちなみに、彼らは1998年には「サブラ・カダブラ」のカバーをしているんですよ。

それは知らなかったな！

――パーティをしまくることでも有名なメタリカですが、一緒に楽しんだことは？

いや、俺にとっての彼らは、ただのいい青年たちさ。でも一番ワイルドだったのはジェイムズだね、あのツアー中、スケートボードで3回も骨折したんだから。

――彼らがあそこまでビッグになると予想していた？

“ROB IS THE ONLY GUY WHO DID THINGS RIGHT BY ME”

“ロブは唯一俺に迷惑をかけなかったヤツ。”

もちろん。毎晩、オーディエンスの反応を見ていればわかるよ。彼らは素晴らしいバンドさ。『メタリカ』を出したときに、本当にすべてがうまくいき出したことを覚えている。特に「エンター・サンドマン」でね。

――では、『メタリカ』が爆発的に売れたのも、驚くべきことではなかった？

この業界では驚かされることがたくさんあって、俺もいまだにいろいろと驚かされる。ただ、『メタリカ』は間違いなく琴線に触れるものであり、本当にいいアルバムだった。

――ズバリ、成功の要因とは？

『メタリカ』はいいタイミング、適切なポイントでリリースされてた作品で、それでうまくいったのさ。ヒット作を作るために何が必要なのかを正確にわかっていれば、みんなそうするよ。彼らはそれを完璧にやって、確実に必携のアルバムを作っただけだろう。

――その後もあなたは何度も彼らのショウに登場していますよね。

そりゃ楽しいから！　レミーもよくメタリカとプレイしていたよね。彼らとステージに上がるのはとても楽しいし、友好的だよ。

――では最後に、2000年代のバンド・メンバーでもあったロバートについて聞かせてください。

ロブ（ロバート）とはずっと仲のいい友人なんだ。素晴らしいベース・プレイヤーであり、素晴らしい人間。バンドを抜けるときだって、彼は唯一正しいやり方をしたのさ。俺はいつも一緒にプレイしているヤツらに言っているんだ……ほかからオファーがあってバンドを移りたいなら、それはそれでかまわない。ただ、迷惑はかけないでほしい、後任を探す時間が必要だから。その点でも、ロブは唯一迷惑をかけなかった。ニュー・アルバムでもプレイしてもらえて、とてもハッピーだよ。

JOHN BUSH

ジョン・ブッシュ

Text by Joe Daly

**アーマード・セイントのシンガーである
ジョン・ブッシュは、アンスラックスに加入する
以前、メタリカからもオファーをもらっていた。
それを断ったが、もちろん後悔はしていない。**

――初めてメタリカに出会ったのは？

1982年、ロサンゼルスの［ウィスキー・ア・ゴー・ゴー］で、メタリカがサクソンのオープニングをやるのを観たときだね。当時のジェイムズは歌うだけで、ギターは弾いていなかった。もちろんデイヴ・ムステイン、ロン・マクガヴニーとラーズも一緒にね。

――そのときはどんなサウンドだった？

こんなことは言いたくないけど、あまりいいサウンドではなかったよ（笑）！ ジェイムズは豹柄のズボンを履いて、ギターなしで歌っていたんだ。まだバンドを始めたばかりで、自分の立ち位置に不安を持っていたんだろうね。でもそのあと彼らがＹ＆Ｔのオープニングをやったときはジェイムズもギターを弾いていて、ずっとイケてたよ！

――当時のアーマード・セイントの状況は？

［トルバドール］でヘッドライナーをやったりと、すでにうまくいっていたよね。クラブでプレイをしていて集客も良かったから。

――その頃に、メタリカからバンドへの勧誘をされたそうですね。

『キル・エム・オール』のレコーディングが始まる少し前のことだった。マネージャーのジョニー・ザズーラが電話で“興味はあるか？”と聞いてきたんだ。そのときの彼らはアーマード・セイントと同じように、まだ“勢いのあるローカル・バンド”でしかなかったから、自分のバンドがうまくいっている状況で“このバンドを辞めて、あっちのバンドに移るよ”なんて言う意味はなかったんだ。もちろん嬉しかったけどアーマード・セイントに残りたい理由を説明して、“どうもありがとう。とても光栄なことだけど、俺は自分のバンドに残るよ”と断ったんだ。

――後悔はしていない？

決してない。メタリカに入ることが俺の運命だったとは思わないから。簡単なことさ、ジェイムズ以外にメタリカのヴォーカルを務める運命の人がいるとは思えないし、そののちには信じられないような成長をした男だから。それがジェイムズ・ヘットフィールド……それだけのことだよ。

――もしジェイムズが喉を壊し、ライヴ直前に“ジョン、君が必要なんだ！”と言ってきたら引き受けますか？

ハハハ！ もちろんやるよ。間違いなくカンペが必要になるだろうけど！

DOYLE WOLFGANG VON FRANKENSTEIN

ドイル・ウルフギャング・フォン・フランケンシュタイン

Text by Stephen Hill

メタリカがバンドのシャツを着て楽曲のカバーをすることで、ミスフィッツの名前は新しい世代へと受け継がれていった。バンドのギタリストは、今も感謝の気持ちを忘れてはいない。

――初めてメタリカを聴いたときの印象は？

80年代、俺は親父の店で働いていて、地元のライヴハウスでプレイしたときに初めて観たんだけど、まずはメタリカという名前が気に入ったんだ！「フォー・フーム・ザ・ベル・トールズ」にはぶっ飛んだよ。だけど、初めて手にしたレコードは『メタル・ジャスティス』で、それから『メタリカ』も手に入れた。すべての古いレコードをダウンロードしたのは、2013年にiPhoneを入手してからのことかな。驚くなかれ、古い作品は聴いたことがなかったんだ！

――メタリカがミスフィッツのファンだと知ったときはどう思いましたか？

実は知らなくてね。いつもみんなから、彼らが俺たちのシャツを着ていると聞かされてはいたんだけど。先日ラーズに“ミスフィッツを世界に紹介してくれてありがとう”と言ったら、彼は“何のこと？”みたいな目で俺を見ていてさ。“いいかい、君らが俺たちの曲をプレイしてくれなかったら、今アリーナ・ツアーをやることもなかったんだ”と言うと、“ワォ！ そんな風に考えたことはなかったな”って。そう、これは本当の話さ。メタリカを通じて俺たちのことを知ったファンは半分以上いるだろうし、それを認めるのはとても重要なことだと思っている。メタリカがカバーしてくれなかったら、俺たちはおそらく今プレイしていなかっただろうから。

――そのカバーを聴いたときの感想は？

素晴らしかったよ。「グリーン・ヘル」と「ラスト・カレス」を聴いたとき、“ワォ、うまくアレンジしたな”と思ったね。「ダイ、ダイ、マイ・ダーリン」をやったのは知らなくて、車のラジオでこの曲が流れてきたとき、“この曲は知ってるけど、これは何なんだ？”と思ったらジェイムズの声が入ってきてさ。“彼らはコレもやったのか！ ワイルドだな！”って興奮したことを覚えているよ。

――2000年には、ジェイムズと一緒にプレイをしましたね。

最高！ 彼がいくつかのショウにやってきたんで、“一緒に歌うかい？”って誘ったら“YEEEAAAHHH!”って答えてくれたよ。彼は実際とても優しいんだ……というか全員ね。まったくもってエゴイスティックじゃない。

――ズバリ、メタリカの遺産とは何でしょう？

おそらく彼らは世界最高のミュージシャンであり、だからこそ彼らはメタリカなんだ。それに彼らはヘヴィさを取り戻した。最高にヘヴィな曲、本当にイカしたメタルを演奏し、そして世界で最もビッグなバンドになったんだ。本当に素晴らしいね。

BOB ROCK

ボブ・ロック

Text by Paul Brannigan

世界的金字塔となった『メタリカ』のプロデューサーとして知られるボブ・ロック。
当初、彼はメタリカからのオファーを断っていたが、その後、『セイント・アンガー』までの作品に
携わっていくことになる。そして現在まで続くメタリカは、彼の手助けによって
継続することになったとも言える。

野心的でやる気に溢れ、妥協をせず、そして自信に満ち溢れていた最初の10年、メタリカは“ノー”という言葉を聞くことに慣れていなかった。だから、ボブ・ロックがバンドの５枚目のアルバム『メタリカ』のミックスを拒絶したとき、ジェイムズ・ヘットフィールドとラーズ・ウルリッヒは侮辱されたと思い、そして次第にそれは興味となっていった。

このチャンスを受けなかったことは、カナダ出身のサウンド・エンジニア／プロデューサーのキャリアで最も賢い選択となった。というのも、これが最終的にのちのスタジオ・アルバム（『メタリカ』、『ロード』、『リロード』、そして『セイント・アンガー』）をプロデュースするきっかけとなったのだから。このように、ウィニペグ生まれのスタジオ技術者とサンフランシスコのバンドとの関係は、常にうまくいっていたわけではないとも言える。

“METALLICA DIDN’T REALLY TRUST OUTSIDERS”

“メタリカは外部の人間を信頼しなかった。”

――ボン・ジョヴィの『ワイルド・イン・ザ・ストリーツ』やエアロスミスの『パーマネント・ヴァケイション』のエンジニアやミックスを経て、大成功を収めたアルバム（ザ・カルトの『ソニック・テンプル』、モトリー・クルーの『ドクター・フィールグッド』）もプロデュースするようになるなど、メタリカ以前からあなたのキャリアは順風満帆でした。だからこそ、彼らの５枚目のアルバムをミックスするというオファーを断るのも、特別なことではなかったのでしょうか？

必ずしもそうとは考えていないよ。当時の私は、ただ次にやってくる一番いい仕事のチャンスを探していただけさ。もちろんメタリカのことは知っていたけど、その頃は私が畏敬の念を抱くようなバンドではなかった。批判をしているわけじゃないけど、『メタル・ジャスティス』のサウンドが理解できなくてね……ライヴで観るとヘヴィだったのに、あのレコードのサウンドはそうではなかったから。“メタリカのサウンドとはこうあるべき”という基準の人もいるだろうけど、彼らと仕事をするなんて考えもしていないあの当時、それが外から見た私の観察結果だったね。

――ラーズとジェイムズは『メタリカ』のレコーディングに誘うため、あなたの意向を確認しにバンクーバーを訪れました。彼らの第一印象とは？

普通のヤツらだったよ。彼らはデモのカセットを持っていて、「サッド・バット・トゥルー」と「エンター・サンドマン」の原型を聴かせてもらい、すぐに“ああ、これならやれるな”と感じたな。以前聴いたメタリカとは違い、また彼らも何か違うことをやりたいと変化を欲していたんだ。

――彼らとの仕事が容易ではなかったことはよく知られています。あなたの提案のほとんどに“ノー”と言うので、あなたはジェイムズのことを“ドクター・ノー”と呼んでいたというのはいい逸話です。しかし、当時はおもしろくなかったのでは？

まあ、どんなプロジェクトにも常にウォームアップの時期があるものさ。で、彼らの場合はそれが普通よりも長かったってことだよ！　彼らには彼らのやり方があり、外部の者を信頼していなかった。それは私だけではなく、すべての人間に懐疑的だったんだ。私が彼らに異議を唱えたり、彼らが私に異議を唱えたりすると、緊張が走ったものさ。ただ、それは個人的なことではないよ。逆に、彼らほど一所懸命なヤツらと仕事をしたことはないとも言えるね。

――おそらく彼らに異議を唱えたことが、最終的に尊敬を勝ち得ることになったのではないでしょうか？

そうかもしれない。だけど“いや、君たちは間違っている”とは決して言わなかった。彼らの欲しているものが得られるかもしれない別のやり方を示しただけさ。エンジニアのランディ・ストーブも私も、最後には“もう彼らとは二度と仕事をしたくない”と言ったことはよく知られているけど、これはもうヘトヘトだったからさ。８ヵ月もあんな環境にいたら、誰にとっても大きな負担だよ。だけど、最高の仕事は緊張から生まれることもあり、すべての偉大なバンドたち……ローリング・ストーンズのミック・ジャガーとキース・リチャーズ、エアロスミスのスティーヴン・タイラーとジョー・ペリー……彼らには摩擦があるだろ。メタリカは腰抜けじゃない。彼らは自分たちが世界で一番のバンドであり、ほかの人間はみんな自分たちの邪魔をするべきではないと信じているのさ。

――では、『ロード』となるアルバムのために、彼らが再びあなたにコンタクトしてきたときは驚いたのでは？

まあ、『メタリカ』ほどのインパクトを持たせるのであれば、また同じチームでやる以外はない。壊れていないものを修理するな、ということさ。前回のセッションは激しいものだったけど、『ロード』を始めたときは、それまで起こったことのすべてを水に流し先に進んだんだ。

――『ロード』や『リロード』で楽しい思い出はありますか？

まあ、ある。だけど『メタリカ』にも楽しい思い出はたくさんあったよ！　彼らと一

緒にいると楽しいし、いろいろとおもしろかった。メタリカとの15年に渡る仕事は、私の人生で最高の時間のひとつさ。

――あなたが『ロード』で採用した大きな変化のひとつは、カーク・ハメットに初めてリズム・ギターを弾かせたことです。ジェイムズがハンティングで不在中にカークのパートを録音したので、ジェイムズがこれを認めるのか不安があったというのは本当ですか？

ハハハ！　いや、その話は初めて聞いたな！　バンドは進化すると、自然と新しいものを試したくなるものさ。あの頃彼らは"うーん、エアロスミスにはギター・プレイヤーがふたりいるな。ガンズ・アンド・ローゼズもギター・プレイヤーがふたりいる"と考えて、自分たちでもやってみようと思ったんだろう。私の決定というよりは彼らの決定だね。

――『ロード』のセッション中バンドは創作的で、曲が続々とできあがっていきました。『メタリカ』の経済性を好むあなたは、アルバム１枚分にするべきだと異議を唱えたのでは？

ツアー中の２～３年間で、彼らはたくさんのリフを書き溜めていたけど、曲として完成するのが何曲なのかはわからなかった。だけど形になってくると、32～34曲はありそうで。『ロード』の最初のセッションがどのくらい続いたかは覚えていないけど、8曲を完成させたあと、すべてを完成させるには３年がかりのプロジェクトになると判明したことは覚えている。それで彼らは２枚のレコードに分けることにしたんだ。賢い決定だったよ、いい曲はたくさんあったからね。

――「ナッシング・エルス・マターズ」でも顕著に表われているように、あなたは『メタリカ』で歌詞についてジェイムズの心を開き、真の感情を書かせました。『ロード』、『リロード』では、すべての曲の歌詞について話をしたんですか？

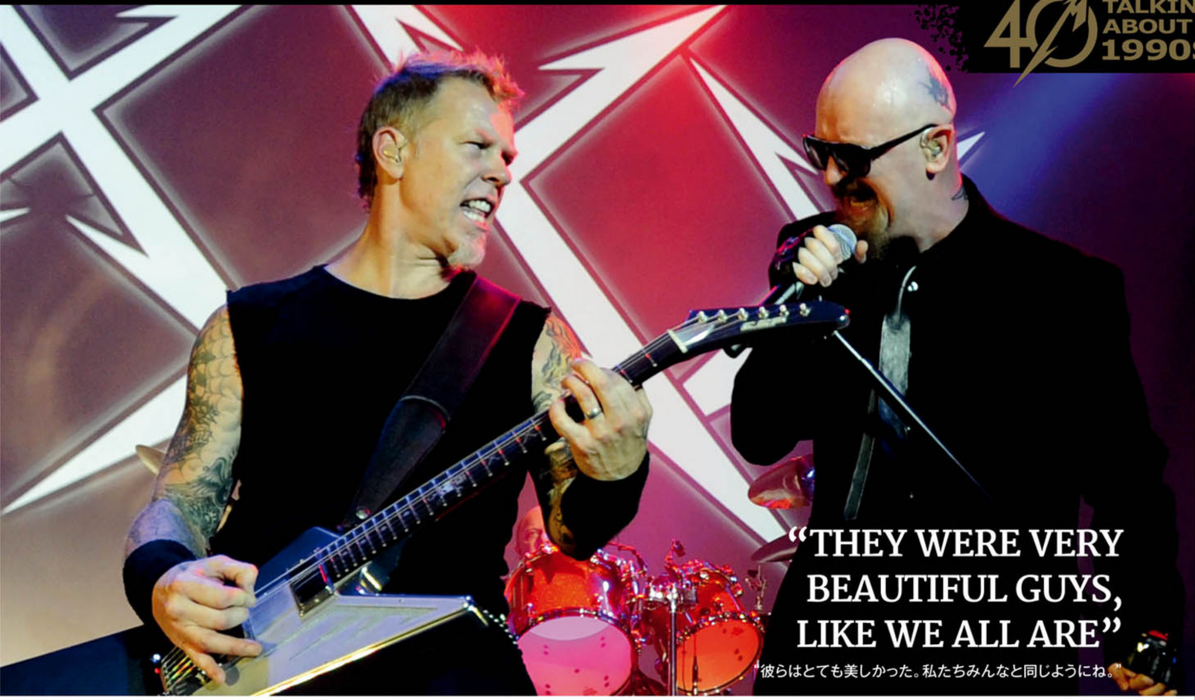
そんなことはないかな。『メタリカ』のとき、ジェイムズと私は作詞家についてたくさん話をしたけど、私は彼の詞は誰にも負けないものだと伝えたよ。ボブ・ディラン、ジョン・レノン、レナード・コーエン、誰にもね。それを受け入れさせようと励ましたんだ。それからはさらにいい歌詞が書けるようになったから。

――『S&M ～シンフォニー＆メタリカ』は、また違った大仕事でしたね。

かなり特別だったよ。もともとは「ナッシング・エルス・マターズ」にストリングスを入れたらどうかという、私の提案から始まったんだ。素晴らしいアレンジャーのマイケル・ケイマンを引き入れたんだけど、バンドはすべてに慎重で、だからファイナル・ミックスではオーケストレーションはほとんど聴こえない。だけど、彼らはあとからそれがどんなにイカしているかを理解したんだ。『S&M ～』では、メタリカの音量とオーケストラの音量をそのまま保つのが大変だった。基本的に、すべてのヴォリュームを上げたんだから（笑）！　なんと素晴らしい、パワフルで美しいアルバムなんだろう。

――『セイント・アンガー』は、あなたとメタリカの最後の創造的なコラボレーションとなりました。このアルバムの制作に関わる騒動と緊張は、ドキュメンタリー『メタリカ：真実の瞬間』にて、残酷なほどハッキリと捉えられています。今振り返っていかがですか？

言葉にすることすら難しいな。つまるところ、私は友人として、彼らが一緒にやり続けられるように手助けをしようとしたのさ。メタリカが未来を持つために、『セイント・アンガー』は作らなくてはならなかった。アメリカよりもイギリスとヨーロッパで受け入れられたように感じるけど、それは少々本題からはずれるね。誰も何が起こるかはわからず、私たちはただ完成するまで、バンドが正常になるまでやり続けたんだ。もがいていた友人に、メタリカが終わってしまわないように手助けをしていただけさ。一緒にやったすべての仕事に誇りを持っているけど、ある意味これが一番重要な仕事だった。あれがなければ、今日メタリカは存在していないんだから。



"THEY WERE VERY BEAUTIFUL GUYS, LIKE WE ALL ARE"
"彼らはとても美しかった。私たちみんなと同じようにね。"

ROB HALFORD

ロブ・ハルフォード

Text by Stephen Hill

ジューダス・プリーストとメタリカは、ともにヘヴィメタルの歴史に大きな変革を与えたバンドだと言えるだろう。メタル・ゴッドにとって、彼らはどんな人間なのか?

――あなたにとってのメタリカとは?

初期の『キル・エム・オール』、『ライド・ザ・ライトニング』、『メタル・ジャスティス』……何枚かのアルバムは今でもお気に入りだよ。素晴らしきアメリカ西海岸のバンドさ。バカバカしく聞こえるかもしれないけど、私が子供の頃、サンフランシスコと言えばヒッピーの場所だったんだ。ビーズにサンダルとかね。そんなところで信じられないような騒ぎを起こしているメタル・マニアックたちだね! ワォ!

――初めて彼らに会ったときのことを覚えていますか?

彼らがフェニックスでいくつかのショウをやったときに会ったんじゃないかな。とても美しいヤツらさ。私たちはみんなメタルをやっているから、何も言わなくても自分たちの人生を生きているとわかるんだ。そして、そこには尊敬がある。9月の《ラウダー・ザン・ライフ・フェスティバル》で私たちと一緒にステージに上がったカークは、お菓子屋にいる子供みたいに言ってくれたよ。"プリーストと一緒に「グリーン・マナリシ」をプレイできるなんて信じられない!"とね。

――90年代メタル・シーンでの、メタリカの重要性とは?

メタリカ史に目をやれば、ジューダス・プリーストの歴史を見るように、常にメタルへの注目がとてつもなく急上昇したことに対する責任を負っているバンドだということがわかる。彼らの少々物議を醸した『メタリカ』という作品は、プリーストの『ターボ』みたいなものだよ。彼らは髪を切って、幾分コマーシャルなサウンドになり始めていたから。だけど、実際はそうじゃない。彼らはただその音楽的才能を柔軟にして、素晴らしいプロデューサーをつけただけのことさ。その結果、並はずれたものができあがったというわけだ。

――2011年、メタリカの結成30周年記念イベントで彼らと演奏をしたときの話を聞かせてください。

私は彼らの大好きな「ラピッド・ファイア」をやったんだけど、この曲は彼らにとって『ブリティッシュ・スティール』でのお気に入りのひとつなんだよ。当時、急に電話がかかってきて……ラーズだったか忘れてしまったが"サンフランシスコに来て一緒にやりませんか?"と。翌日ひとりで飛行機に乗って、その次の午後にリハーサルをやり、ホテルをとってからその晩ショウをやって、次の日フェニックスに帰ったんだ。うまくやれて良かったよ。バンドの節目を祝う美しい機会さ!

――最近のツアーでの彼らとの共演はいかがでしたか?

そうだね、メタリカの40年とジューダス・プリーストの50年……地球の反対側のふたつのバンドが素晴らしい綱渡りをしてきたということだな!

JASON NEWSTED

ジェイソン・ニューステッド

Text by Stephen Hill

メタリカの内部のことを最も知っているのは、
彼、ジェイソン・ニューステッドをおいてほかにはいない。
のちにさまざまな確執が話題に挙がり、脱退からときを経て手を握りあった
ジェイソンとメタリカだが、それよりもずっと昔、
まだローカル・バンドのメンバーだったジェイソンは、メタリカに憧れ、
そしてオーディションを受けた。
その貴重な思い出話に耳を傾けてみよう。

クリフ・バートンという信じられないほど大きな影を望みつつ、ジェイソン・ニューステッドが最大のメタル・バンドに在籍し巨大な遺産を残すことができたことは、ちょっとした奇跡とも言える。彼のメタリカ在籍期間は、クリフの悲劇的死から、90年代を通じて成し遂げられた音楽的飛躍という、バンドとってとてつもない変化が起きた時期でもあった。彼はその間、常にメタリカの最も誠実なメンバーであり続け、その着実でかつ激烈な存在は、自身を想像もできないような高みへと押し上げる一助となった。そんなジェイソンの独占インタビューでは、ベーシストとしてのスタート、そしてメタリカとのオーディション、そしてライヴでの思い出を聞いてみた。

"I WANTED TO BE GENE SIMMONS"

"俺はジーン・シモンズになりたくてね。"

――ベースをプレイするようになったきっかけは？

9歳のとき、初めてギターを手にしたんだ。コードやチューニングもわからなかったけど、その頃から部屋で曲を書いていたね。母親は今でもそのときの曲を持っているんだ。スゴいだろ（笑）！　ベースということになると、12歳のときだ。当時の俺は、中学校のアンサンブル・バンドでサックスを吹いていたんだけど、アンドリュー・バックリーというヤツが持ってきたキッスの『地獄への接吻』のジャケットを見た瞬間にすべてが変わったんだ。ポール・スタンレーがつま先立ちをしていて、ジーン・シモンズが厚底靴で……家に持ち帰り、彼に返すまで何度も聴いたよ。ジーン・シモンズになりたかったんだな。彼は最高のキャラクターでスーパー・ヒーロー、12歳のガキにとっては一番魅力的だったのさ。俺のシアーズ・カタログのクラシック・ギターはヘッドにペグが3つずつ付いていたんだけど、それを取りはずして弦を上3本と下の真ん中1本だけにして、キッスのベースみたいなサウンドにチューニングしたのが始まりさ。あのギターは今も父親の家にあるよ。今でもそこに行っては「アム・アイ・イーヴィル？」を演奏するんだ！

――フロットサム・アンド・ジェットサム時代のことを教えてください。

当時、自分のバンドとともにフェニックスへ行き、昼と晩、ふたつの違う仕事をしていたんだ。1982年の2月、フェニックスのある場所に広告が貼り出されていてね。それはケリー・デビット＝スミスのもので、ラッシュやアイアン・メイデンについて書かれていて、つまるところベースを募集していた。誰かから車を借りてベースの機材を積み、15～20マイルほどドライブして彼の父親の家で少々ロックしたんだ。そこからほかのメンバーを入れて1年ほど無駄に過ごしたあと、ドッグズを結成することになった。フロットサムは、そこから生まれたんだよ。

――メタリカのオーディションに行くときは、どんな気分でしたか？

まず、何よりも光栄だと思っていたよ。彼らはヒーローで当時はずっと上の存在だったから、彼らと一緒にいること自体が特別なことなんだ。俺は準備万端、自信を持って行ったよね。フェニックス発朝6時半のフライトで、空港に降り立つと霧が出ていて、太陽が昇ったのを見たら"嘘だろ、俺はサンフランシスコにいるんだ！"なんて実感したもんだよ。

俺は朝の7時半からスタジオに行き、サンドイッチを食べながらひたすら練習をしてバンドを待っていたよ。彼らは10時頃にやっと現われたんだけど、スタッフは"水のボトルはいるか？"と言ってくるから、"水のボトル？　ワォ、こいつらはお金があるんだな！"なんて思ったよ。俺はアリゾナに住んでいて、時給3ドルで働いていたから、水が飲めるならどんな水でもかまわなかったからさ（笑）。それがボトルに入った水だって？　ファック、まったく驚いたよ！

その日の終わり頃、やっと俺の順番がきたんだけど、ジェイムズはすでにビールを10～16本ほど呑んでいたよ。

彼らはまだ自己治療の最中で、クリフの死で悲嘆に暮れ、無理にでも行なわなくてはいけないこのプロセスから逃げようとしていた。だから、すでに足下はグラついていたよ。俺もそのことを考えていたから、2日間寝ていなくてね。

オーディションが始まり、俺がオジーとやっていたツーソンでのメタリカのセットをジェイムズに渡すと、彼が一曲選んでみんなで演奏して、そこからまた次、次、次とプレイしていくんだ！　そのあと外に食事を買いに行ったとき、彼らは俺の経験についていろいろ聞いてきた。"何年プレイしているのか？"、"ギグは何回やったことがあるのか？"、"フロットサムでは何年やっているのか？"ってさ。そしてマネージャーがすでにさまざまな計画を立てブッキングをしているので、そのスケジュールは空けておいてくれと言われたよ。俺は"問題はないから、俺が必要ならいつでも駆けつける"と伝えると翌日にはラーズから電話があって"新しい曲を覚えてきてくれ"とのことだった。それで30時間後にはまた戻ったんだ。

――あなたが後釜になったとき、クリフのご両親もいたんですよね？

彼らと一緒にプレイするようになってから3日目、俺は初めてサンフランシスコでひと晩過ごしたんだと思う。何しろ俺はアリゾナのトイレも風呂もないブリキ小屋で育ったからね、それが今では［ミヤコ・ホテル］に泊まっている。あの3日目の晩、"年配の人々"がお祝いにきてくれたんだ。ほ

かにも家族がいたかもしれないけど、俺が見る限りトルベン・ウルリッヒ、バートン夫妻、何人かのクルー、初めからいた人たちがその場にいて。バンドは６曲ほど演奏をして……「メタル・マスター」、「フェイド・トゥ・ブラック」、「フォー・フーム・ザ・ベル・トールズ」と傑作ばかりさ！　俺は少しの間心を落ち着かせてからベースを置いて、クリフのアンプのスイッチを切った……そう、クリフのアンプでプレイしていたんだよ！　そのあとヤン（バートン）がひとりで部屋にやってきて、俺をつかみ呼び止めて"素晴らしかったわ､息子よ"と言ってくれてたんだ。俺は"オー、ファック！"なんて感じだったよ。彼女は俺をしばらく抱きしめて、それから"あなたしかいない、あなたが適任に違いない。体に気をつけて、愛しているわ"と言ってキスをしてくれた。35年も前のことだけど、俺はこれからも決して忘れはしないだろう。

――初めてメタリカのメンバーとしてステージに上がったときの気分とは？

緊張気味に興奮していたけど、自分自身に自信を持っていたから、ほとんどは楽しみって心持ちだった。曲も覚えていたし、当時のメタリカでプレイするのに必要なたくさんのエネルギーを持っていることもわかっていたよ。とても肉体的でスポーツのようだったけど、俺にはそれがあったんだ。この話をしたことがあるかわからないけれど、ひとつ覚えているのは、当時小指用のリングをふたつ持っていたんだ。カスタムメイドの頭蓋骨型のもので、ひとつは目にダイアモンドが入っていて、もうひとつは目にルビーが入っていた。ふたつ付けるとプレイできないからひとつだけにしていて……今も結婚指輪ですら付けていると弦をハジけないから、首に下げるようにしているくらいで……ただ、出番が近づいても、指輪がはずれないんだ。当時のガールフレンドが一緒にいて、彼女も頑張ったし、それからステージへと案内してくれるスタッフも手伝ってくれたけど、どうしてもはずれない！　抜こうとしているんだけど、気持ちが昂ぶって弾きまくっていたから手がハレてしまい、リングがくっついてしまったんだね。結局はずれたんだけど、そこには肉もついていて……べリッとさ。だからメタリカとの初ステージは、すでに緊張していたのに、リングのおかげでさらに印象深いものになったんだ（笑）。

SCOTT IAN

スコット・イアン

Text by Rich Hobson

1980年代から“スラッシュ四天王”としてシーンを牽引してきたアンスラックスにとっても、2010年に行なわれた“ビッグ4”のイベントはキャリア最大の出来事だった。スコット・イアンは、メタリカこそ一番最後に演奏するべきバンドだと断言する。

――2010年に行なわれたビッグ4のアイディアについて、プロモーターはいつからアンスラックスにアプローチをしていたのでしょう？

正直、真剣に考えたことなんてなかったんだ。最初にラーズがチャーリー（ベナンテ）と俺にこの話を持ち出したのは、メタリカが2009年にロックの殿堂入りを果たしたときだった。アフター・パーティで、ラーズが俺たちのところにきて“ヘイ、ビッグ4のショウをやりたいんだけど、どう思う？”って。何を言っているのかすらわからなかったよ！　俺たち、スレイヤー、メガデス、そしてメタリカでショウをやると聞いて“ああ、それは素晴らしいだろうね！　でもどうせ君たちはやらないんだろ”なんて思ったものさ（笑）。酒の上での話で、ラーズが本気だとは思わなかったけど、あとから考えると、メタリカのやることはどれも軍隊のように緻密だから、彼らはすでにハッキリとわかったうえで俺たちに相談したんだろうね。

――ショウ当日のムードは？

俺たちは信じられないくらい興奮していたよ。アンスラックスに限って言えば、あの時期自分たちのキャリアのなかで、最も奇妙な状況だった。ジョーイ（ベラドナ）はまだ戻ってきていなかったから正式にはシンガーがいなかったけど、『ワーシップ・ミュージック』となるアルバムの曲作りをしていたときで、あのときメタリカのマネジメントから電話があって、多くの点において再始動したんだ。ジョーイをバンドに戻さなくてはいけないこともわかっていて、そもそも彼は俺たちにいろいろなことが起こっているとき、いつもそこにいる男だからね。これらのショウがなければ、そしてあのレコードを出さなければ、正直10年後の今、アンスラックスが存続していたとは思わないから。

――これらのショウで、お気に入りのシーンは何ですか？

オフの晩、ルーマニアのバーにたまたまスリップノットもいて、それでコリィ・テイラーとケリー・キングと一緒になったんだ。そうしたらカークから“『ザ・ビッグ・フォー～史上最強の夜！』という映画のために、ブルガリアのショウでみんなで「アム・アイ・イーヴィル？」をセッションしようと思うんだ。リハのためにバックステージに部屋を確保したから、もし興味があれば”というメールが来てね。もちろん興味アリアリだよ！　ほかにもみんなでジャムった一番のお気に入りは、ニューヨークでモーターヘッドの「オーヴァーキル」をやったことかな。最後は大惨事だったな！　ラーズが立ち上がりデイヴ・ロンバードが座ると最後のツーバス・パートが10倍くらいの速さになって、みんなわけがわからなくなってしまった（笑）。そしてチャーリーの番になると、またペースが変わって……あれは修羅場だったよ！　めちゃくちゃ楽しかったけどね。ある晩ラーズと酔っ払っていたら、彼が1984年頃みたいにいきなり走って茂みにダイブしたんだ。これらのショウはどれも最高だった。究極のサマー・キャンプみたいだったさ。

――メタリカがビッグ4にもたらしたものは何だと思いますか？

メタリカが教えてくれたのは、どんな音楽でも商業的に一番高いところへ到達できるということ。アンダーグラウンドでありながら、ジャンルを超越するんだ。メタリカにはポップスやカントリー、ラップで使われている手段があったわけじゃない。でも、とにかくやってのけたんだ。これらのショウで誰がヘッドライナーをやるか、最後に演奏するのは誰かってことについて異論はなかったよ。それはメタリカで、彼らは毎晩そのことを証明してみせたからさ。

KERRY KING

ケリー・キング

Text by Joe Daly

**メタリカと同じくオレンジ・カウンティから狼煙を上げたスレイヤーは、
粗暴な音楽の土台を作り上げ、さらにビッグ4となり、世界的な成功も収めた。
同時代を突き進んだケリー・キングは、
メタリカがより大きな成功を収めた理由を、
こう分析している。**

ビッグ４の半分として歴史書に名を残す前、メタリカとスレイヤーはオレンジ・カウンティのクラブをサーキットし、ヘア・メタルに対する軽蔑と世界一速くヘヴィな音楽を作ろうという献身で団結した勢いのある新人だった。スレイヤーのケリー・キングが、あの頃のこと、そしてメタリカがヘヴィメタルのパンテオンを登り詰めたことを振り返る。

――初めてメタリカに会ったときのことを覚えていますか？

彼らがベイエリアのバンドになる以前、カリフォルニア州アナハイムの［ザ・ウッドストック・コンサート・シアター］でデイヴ・ムステインとプレイしていたのを観たよ。そのくらい前のことだ。そのとき実際に彼らに会ったかって？　覚えてないな。だけど、彼らがベイエリアに行く前に、１度か２度は一緒にプレイをしたかな。

――第一印象は？

気に入ったよ。スピード・メタルやスラッシュ・メタルが好きだから――当時はまだそんな名前はついていなかったけれど――俺にとってはそういう音楽だった。彼らのやっていることが好きだったし、俺はすでにヴェノムに入れ込んでいたし、ほかにもプリースト、そしてメタリカを混ぜたものが、ある意味スレイヤーをスレイヤーたらしめていると思うな。

――80年代、ロサンゼルスのヘア・メタル・シーンは悪名高いものでした。オレンジ・カウンティもそうでしたか？

そうは思わない。メタリカに聞いてみないとわからないけど、彼らもおそらく俺たちと同じくらいハリウッドを避けていたんじゃないかな。あそこはグラムの中心地だから。俺が彼らのプレイを観たオレンジ・カウンティは、もっとヘヴィでパンクっぽいバンドがたくさん出てきたところだから、当時の俺たちはみんな、彼らではなくグラムと競い合っていたんだと思うぜ。

――1984年、あなたは短期間ですがメガデスに参加していました。デイヴ・ムステインがメタリカに怒っている様子はありましたか？

多分ね。だけど俺は、メタリカ時代からムステインを尊敬していたよ。ジェフ・ハンネマンと一緒に客席にいて、“あいつを観てみろ！　スゲェぞ！”なんて言っていたもんだよ。彼には素晴らしいスタイルがあって、それが初期のメタリカをメタリカたらしめたのさ。さらに言うなら、今も彼は素晴らしいギタリストだ。だけど……俺は５回のショウをやってバンドを抜けた。デイヴは俺に続けてほしがっていたけど、俺にはスレイヤーがあったから続ける理由はなかったんだ。“俺たちがやっているのは、どれもダークなものだ”と言うと、ムステインは“まあ、俺たちにもこの曲がある。かなりサタニックだ”みたいなことを言ってもいたんだが、俺は“そういうことじゃないんだ。俺は君とプレイをして驚くほどうまくいったと思う。だけど、今は自分のバンドに戻るときなんだ”と伝えたよ。

――メタリカが成功した最大の要因は何だと思いますか？

ヴォーカルにせよギターのハーモニーにせよ、彼らはメロディが最高だ。確かに俺たちにもギターのハーモニーはあるけど、ダークなものだし、一方メタリカはもっと……こういう言い方で安っぽくしたくはないんだが“みんなの音楽”だろ。安っぽいということではなく、スレイヤーのダークな音や歌詞の内容よりも、とっつきやすいってことだ。メタリカの書く曲は、みんなが“何でこんなものが好きなんだろう？”とか“こんなものを好きになってもいいのか？”と思うことなく好きになれる。一方みんなは何十年も“スレイヤーなんか好きになっていいのか？”って自問自答していたことだ

ろうね。ハハハ！

――『メタリカ』についてはどう思いましたか？

超ワクワクしたことはないけど、多くの人とは違って嫌いではない。今でもあのレコードは大好きさ。メタリカだとは思うけど、スラッシュのメタリカではない。どこからの影響なのか、彼らのもっと古い作品を聴けばわかる。彼らはただ思いっきりそれを超スローダウンして、超ヘヴィにして、超キャッチーにしただけさ。あのレコードは、おそらく俺の作品全部を合わせた数よりたくさん売れただろうな（笑）！　あれが出たときは、嘆きの声がたくさん挙がったよね。正直言って、『ロード』以降の作品はどれも俺にとっては問題だ。だけど『メタリカ』はヘヴィだよ。速い曲も入っているしな。

――2010年、ビッグ４のショウがポーランドで実現しました。その前日、すべてのミュージシャンが集まった有名な集合写真が撮られていますが、雰囲気はどうでしたか？

クールだったよ。俺にとってはメタリカの分け前が不思議だったけどね、あの時点の彼らは誰よりもビッグだったから。俺たちは別々のサーカスで活動している感じだった。《ソニスフィア・フェスティバル》でもないと、普段はそう出くわすことはなかったからさ。写真のことはわかるよ。あのときは“ファンは喜ぶだろうな”なんて思っていたけど、最初のショウが終わる頃には“何だ、俺にとってもクールじゃないか”なんて思うようになっていたから。

“METALLICA ARE EASIER TO GET INTO THAN SLAYER”

“メタリカはスレイヤーよりもとっつきやすいからな。”

――そのショウでの思い出といえば？

ただ自分たちのセットをやっただけさ。いや“自分たちのセット”とは言い難いな、8〜9曲しかプレイしなかったから。だけど、ヘヴィな名曲をセレクトしてやったよ。メタリカとは80年代初頭以来一緒にプレイしていなかったからな！　素晴らしいショウをやりたくて、俺たちは全力を尽くしたよ。俺たちがベストを尽くしているのを観てもらいたかったし、メタリカのステージを温めたかったんだ。なんてったって彼らはスレイヤーのあとに出てきて、彼らも名曲をプレイするんだから。

――メタリカが成し遂げた最も偉大なことは何でしょうか？

たくさんありすぎるよ。俺がひとつ言えるのは、俺たちはニューヨークの［ヤンキー・スタジアム］でのビッグ４のショウに参加したということ。あれが新しいヤンキー・スタジアムでの初のコンサートだったと思うから、メタリカにとっても大きな出来事だったろうし、それに参加できて俺も嬉しいよ。でも彼らが成し遂げた一番のことは、『メタリカ』に違いない。あれが彼らの最高レベルの成功さ。俺の好みではないかもしれないけど、あれが一番最初に思い浮かぶよ。

――彼らが再びビッグ４をやるなら、スレイヤーも参加しますか？

俺はやる！　だけど俺たちの前進の仕方からすると、スレイヤーがまたプレイすることはないと思う。俺ひとりでプレイする権利はないからな。ハハハ！

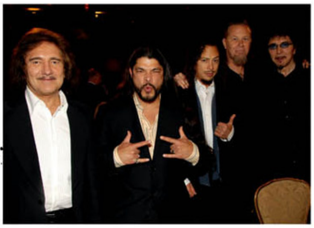
GEEZER BUTLER

ギーザー・バトラー

Text by Eleanor Goodman

ブラック・サバスのギーザー・バトラーは、“メタリカがいるから今のメタル・バンドがある”と言う。メタリカに影響を与えた低音は、メタリカによってもインスピレーションを得ていたのだ。

40 TALKING ABOUT 2010S



――スラッシュ・メタルのムーブメントが起きたとき、どう思いましたか？

好きだったよ。俺の甥っ子、ペドロ・ハウスがバーミンガムでクレイジー・エンジェルという最初期のスラッシュ・メタル・バンドをやっていて、イギリスにいるときはいつも彼らを観ていたからさ。

――初めてメタリカを聴いたのは？

彼らのことは昔から知っていたけれど、実は『メタリカ』まではあまり関心を払っていなくてね。もうメタルの仮面をかぶった“ヘア”バンドを聴かなくていいんだって、嬉しく思ったもんだよ。

――では、同作収録の「エンター・サンドマン」を聴いたときはどう思いましたか？

“これが自分が書いた曲なら良かったのに！”と思ったな（笑）。

――それ以前、クリフ・バートンは知っていましたか？

いや、彼のことは知らなかった。私のベース・プレイを評価してくれていたそうだから、会いたかったな。私たちには何か共通するものがあったということだろう。あの頃サバスが好きだと口にするミュージシャンは多くなかった。メタリカとアンスラックスがそれを変えたんだ。

――90年代、あなたはg//z/r/で新たな境地に突入しました。その時期、メタリカの存在はほかのメタル・バンドの進化をどのように手助けしたと思いますか？

今、すべてのメタル・バンドが存在していること自体、メタリカに負っているところがあると思う。真のメタル・ムーブメントを復活させて、新しいバンドたちに再びいい音楽を作るインスピレーションを与えたんだからさ。

――2011年、メタリカの30周年記念イベントの一環として、サンフランシスコで共演しましたね。

私にとってのハイライトは、「ナショナル・アクロバット」をプレイしたことだな。お気に入りのサバスの曲なんだけど、実はライヴではやったことがなかったんだ。彼らの本拠地で、少人数の環境で、彼らと一緒にプレイできて本当に素晴らしかったよ。

――ズバリ、なぜメタリカは40年経った今でもこんなに人気があるのでしょう？

曲作り、そしてライヴの素晴らしさを保ち続けているからさ。それに彼らの音楽は、若い人たちにも年配の人たちにもアピールするからね。

METAL HAMMER JAPAN

ヘヴィの流儀 #5

Interview by takahide“THUNDER”Okami
Translation by Tommy Morly
Photo by Ross Halfin（Studio）、Brittany Bowman（Live）

Michael Poulsen マイケル・ポールセン

VOLBEAT ヴォルビート

自身が持つヘヴィ・サウンドへの考え方を聞いていく本企画。今回はデンマークのヴォルビートから、フロントマンでありコンポーザーのマイケル・ポールセンが登場だ。デス・メタル・バンドをルーツに持ちつつも、本バンドではパンク・ロックやロカビリー、キラキラのポップスまで多様な要素を包み込み、全米No1ソングを次々に生み出している。最新作『サーヴァント・オブ・ザ・マインド』は、そのカラーが顕著に出たアルバムとも言えるだろう。稀代のメロディメーカーである彼は、ヘヴィな面とキャッチーな面をどのように生み分けているのだろうか？

It can be rock, metal, punk, country, gospel. They are all “music”.

**ロック、メタル、パンク、カントリー、ゴスペルのいずれであっても、
共通しているのはそれらが“音楽”であるということさ。**

俺は『ヘッドレス・クロス』がサバス永遠の名盤だと思っているから。

――早速ですが、新作『サーヴァント・オブ・ザ・マインド』は１曲目「テンプル・オブ・エクル」からして非常にロックなグルーヴとメロディに溢れ、いい意味でメタル・ファンだけに向けた音楽ではないなと感じられます。

これは、いつも曲を書いているやり方そのままでできたような曲だよ。俺たちはいろいろなスタイルをブレンドしていて、ヴォルビートの曲を書くとなると、やはりこれまで影響を受けてきたさまざまなスタイルをもとにすることになるよね。それが何であるか、どんなスタイルであるかなんて気にしたことすらないさ。ロック、メタル、

パンク、カントリー、ゴスペルのいずれであっても､共通しているのはそれらが“音楽”であるということさ。

——そして、それこそがヴォルビートの音楽と言えそうです。

そう！　これらを混ぜ合わせたものがヴォルビートのサウンドになっているんだ。そして、それはユニークなシグネイチャー・サウンドとなり、一聴するだけで俺たちの音楽だと気づいてもらえるだろう。

——ですね。

最近だとユニークな音楽を作るのがドンドン難しくなってきているけど、考え過ぎることなく自分たちのハートに耳を傾けて曲を作っているよ。この曲はロックやヘヴィ・ミュージック、ポップ・ロック、パンクのリスナーたちに響くものとなっていて、それでいて俺たちらしいサウンドがあるからオープニング・トラックとしてピッタリだと思ったんだ。

——そんな「テンプル～」で始まったと思えば、3曲目の「ザ・セイクレッド・ストーンズ」はスレイヤーを想起させるダークなイントロで……むしろ、ちょっとオマージュかなくらいの勢いで（笑）。また、ヴァース・パートの歌唱では、ディオのような迫力も感じられます。

まずはお褒めの言葉をありがとう（笑）。俺たちはスレイヤー、ロニー・ジェイムス・ディオやブラック・サバスが好きだからね。確かにイントロはスレイヤーやブラック・サバスがやりそうなダークな雰囲気がある。キミが言うように、この曲はディオ在籍時のブラック・サバスに感化されたようなところもあって、しかもトニー・マーティンをシンガーとして迎えていた時期の影響も少しあるだろう。俺は『ヘッドレス・クロス』はブラック・サバス永遠の名盤だと思っているから。

——さすが、わかっている人の言葉です！

もちろんディオであれば、ブラック・サバス、レインボー、そのあとのソロ、遥か昔のエルフ時代にやってきたもののすべてがグレイトだ。この曲は隅々にブラック・サバスっぽさがあって、コーラスに入ってからヴォルビートのビッグなシグネイチャー・サウンドになっているんだ。

燃え尽きた状況で作曲をしても
なかなか簡単にはいかない。

——そもそも、本作の楽曲群は3ヵ月で書きあげたそうですね。前作『リワインド・リプレイ・リバウンド』より約2年となります。ある意味、アルバム制作という点では、コロナの影響はあまりなかった？

そうとも言えるね。ツアーやほかのことを一切していなかったので、3ヵ月ですべてを書き切ったし、スタジオにいたのは3週間弱くらいだったと思う。これは通常の1年半くらいかかるような制作期間とは大きく異なっているよね。ロードに出ながらアイディアを書き溜め、家に帰って形にして、またライヴのサウンドチェックで試してみる……なんてことを繰り返すと、やはり時間がかかるものだからさ。

——集中できる環境があると、そういったテンポ感で作業が進むものですか。

ただ、リリースということに関しては、想定よりかなりうしろ倒しになって、当初の予定から1年もズレ込んでしまった。もっと早く発表できるように準備をしてきたからさ。

——そうなると、前作からのスパンはだいぶ短かったことになりますね。

むしろ一度は夏のリリースと定めていたんだけど、それでもパンデミックの収束が見えなくて、ツアーの日程が組めなかったうえにプロモーションもできないということで待ち続けたんだ。来年早々にはプロモーションも兼ねてツアーをする予定だよ。

——このまま収束に向かい、無事にスタートできるといいですよね。

ただ、パンデミックのピークは過ぎ去ったとはいえ、壊滅的な状況は今も続いているし、この経験から学ぶべきところはたくさんあった。逆に家で家族と一緒に過ごす素晴らしい時間が与えられたし、ギターを手に取って次のアルバムを作曲する時間を持つこともできた。ツアーをして毎晩ステージに立っていると心身ともに疲弊して、どうしてもエネルギーは失われてしまいがちで、そんな燃え尽きた状態で作曲をしても、なかなか簡単にはいかないものだから。

——バンド活動ができる状況下でも、大変さはつきものということですね。

パンデミック下では多くのポッドキャスト・インタビューを受けていて、どうやって最初のバンドを始めたのか、ドゥミナスというデス・メタル・バンドを経てどのようにヴォルビート結成へと至ったのかといったことを振り返ったんだ。このことにインスパイアされてニュー・アルバムを作ったところもあって、再出発するような気分になったよ。誰も自分のことなんて知らないような状態に戻り、ライヴする日を夢見てリハーサルを行ない、“次のアルバムはどんなサウンドにしたいんだろうか？”と自問自答して再びデビュー・アルバムを作るような気分だったな。

——つまり、初心に返ったという。

もっとヘヴィなことをやっていた最初の頃のような気持ちに戻ったし、ソングライターとしてさらにレベル・アップすることになったとも思う。リフはさらにヘヴィになり、今までに学んできた知識や経験を加

“次はどんなサウンドにしたいのか？”
を自問自答して
再びデビュー・アルバムを作るような
気分だった。

えて、バンドとして生まれ変わった姿を見せていると思うよ。

ディオは吠えるように歌っても
メロディを聴かせるトーンがあった。

――では、あなたにとっての“ヘヴィを追求する心構え”について聞かせてください。今言っていたように、本作では以降もヘヴィさと歌心とが共存する楽曲が並びます。ベーシックとして“メタル・サウンドのバンド”と周囲から認識されることは多いと思いますが、それを意識して“よりヘヴィな音を出したい”という気持ちになったりもするものですか？

そういったことについては、あまり考えないようにしているんだ。ジャンルにこだわらず心にグッとくるものならすべてに影響を受けてきたよ。ギターを手にして曲を作るときは、一体どんなものができるのか自分でもわからないんだ（笑）。その瞬間自分が人生のどんなポイントにいて、何に影響を受けているのか、何を聴いているのか、自分の心が赴くものは何なのかといったことにより左右されるものだろ？

――相対的にヘヴィさを求めても仕方ないですからね。

そもそも音楽はDNAに刻み込まれていて、俺はデス・メタル・バンドからスタートしたし、ジョン（ラーセン／d）もデス・メタル、カスパー（ボイエ・ラーセン／b）はデス・メタルとパンクから、ロブ（カッジアーノ／g）はアンスラックスというスラッシュ・メタルからやってきている。だからヘヴィ・サウンドは俺らのDNAに刻み込まれているんだ。

――はい。

大切なのはどうアプローチしてレコーディングしたいのかということ。前作はもっとクラシック・ロックなアルバムとなっていて、スタジアム級のロック・ソングを書くつもりだった。時間をかけていくつもの

▼ジョン・ラーセン (d)、カスパー・ボイエ・ラーセン (b)、ロブ・カッジアーノ (g)、マイケル・ポールセン (vo、g) ／L to R

レイヤーを重ねながら録音し、俺たちのアルバムのなかでも際立った誇りに思える一枚となった。でも今回アルバムを作るにあたり、前作でやったことに再び戻るのはどうしても避けたかった。その代わり20代の気持ちに戻り、ギターを手に取ってそのとき思い浮かんできたものをプレイしようと決めたんだ。ヘヴィなものとポップなものを作ることを意識し、一体どんなものが生まれるのか試してみた結果、このバンドらしいアルバムになったということだね。

――先程話題にした「ザ・セイクレッド～」や、それに続く「ショットガン・ブルース」はともにDチューニングです。はじめからこういった曲調を目指し、このチューニングでの曲作りを？

どういったチューニングにするべきか……それはときに曲が教えてくれるものだよ。そして、ヴォーカルがどういったサウンドになるのかがポイントでもある。自分の頭のなかで思い描くヴォーカル・ラインがEチューニングで、それが"ちょっと高いんじゃないかな？"と思えば、それをDチューニングにしてみるんだ。そのほうがヘヴィネスの加わった素晴らしいサウンドになることがけっこうあるからね。

――それがスピード・チューンとなると？

その一方でスラッシュのリフとなると、Eチューニングのほうがアタック感が得られてくる。だからリフが思い浮かぶとEとDのどちらがピッタリのサウンドになるか試してみて、その次にヴォーカルを重ねた際にどちらが曲として映えるのかを考えてみる。ときにはヴォーカルが低過ぎて退屈に感じることもあるし、Eチューニングにすることでアタックやメロディ感がより得られることもある。だから今回は曲のタイプによってチューニングを切り替えて使っているかな。

――なるほど、歌声との関係も重要なんですね。ちなみにヴォーカリストとして、この人の歌唱は"ヘヴィだな"、"ダークだな"と思う人とは？

ヘヴィメタルとなるとグレイトなシンガーは本当にたくさんいるからなぁ……やはりロニー・ジェイムス・ディオはヘヴィメタル・シンガーとして何でもできてしまう人だった。広い音域を自由に操り、吠えるように歌ったとしてもメロディを聴かせる素晴らしいトーンもあって、ヘヴィなバンドが必要とする声を持っていた。そして彼のような声を持つ人はほかにはいないよ。彼は才能に恵まれた人だったんだ。

――そしてあなたの声からは、そのディオのフィールをとても感じます。

さっきもそう言ってくれたよね、重ねてありがとう(笑)。もちろん、シグネイチャー・サウンドを持ったシンガーはほかにもいるよ。メタリカのジェイムズ・ヘットフィールドは世界最高のシンガーではないかもしれないし、彼もそれを目指してはいないと思うけど、あの歌い方や歌詞の書き方にはロック・スターとしての素養が備わっていて、それをコピーすることなんてできやしない。とても強烈なフロントマンで多くの人に影響を与えている。

――そう思います。サバスということでは、先程はトニーの名前も出ました。

ブラック・サバス時代のトニー・マーティンが作ってきた『エターナル・アイドル』、『ヘッドレス・クロス』、『ティール』は名盤で、彼は過小評価されたシンガーだと思う。ディ

ラジオでヒットするってのは悪い気分じゃないけど それだけを考えて音楽を作るべきじゃない。

オのように幅広い音域を操ってグレイトなメロディを歌い上げてきたハードロックを代表するシンガーであり、本当に素晴らしい声の持ち主だよ。ヘヴィ・ミュージックの永遠に最高なフロントマンとして、ブルース・ディッキンソンもはずせないね。彼は偉大なフロントマンが持つべきもののすべてを備えている。ステージ上での高いエネルギーだけじゃなく、絶対的な個性を持っている。スタジアムを埋め尽くす５万人ものメイデン・ファンすべてに届く声を持っているんだ。

――ふたりには、イギリス人という共通点もありますね。

それなら忘れてはならないのがオジー・オズボーンだ。彼は最高のシンガーではないかもしれないけど、彼を超えられる人なんていないだろう。あのスペシャルな声、そして強烈なキャラクターはフロントマンとしてとても魅力的だよ。ロブ・ハルフォードのあの超高音域は彼だけのものだし、そして……彼は英国人ではないが……キング・ダイアモンドは強烈なフロントマンシップを持ち、悪魔が彼の体から声を発しているのではないかと思うようなユニークさを持っている。独特な個性やキャラクターを持ったフロントマンたちというのは、本当にたくさんいるよね。

デス・メタルばかり聴いていると 自然とギターから ヘヴィなものが出てくる。

――ヘヴィな曲はもちろんヴォルビートの核となりますが、非常にキャッチーな「デーエン・フォル（feat. スティーネ・ブラムセン）」のような楽曲もバンドならではです。作曲意識を“こういう曲を書くぞ”というモードにするものですか？　それとも自然と浮かんでくるのでしょうか？

その両者が少しずつという感じかな。俺がギターを手にするときは、その時点でどういったものが得られるのかわかることはない。ヘヴィなものを作りたい気分もあれば、ポップ・ロックな曲を書きたいときだってあるしさ。そのときにどういった音楽を聴き、何にインスパイアされるのかによってくるし、例えばマニック・ストリート・プリーチャーズを聴いていたら、グッドなポップ・ソングを書きたくなってしまうものだろ？　オールドスクールなデス・メタルやヘヴィメタルばかり聴いていれば、やはり手にしたギターから出てくるのは自然とヘヴィなものばかりだ。だから突き詰めると、そのときの気分が大きいのかな。

――そこも“自分に正直に”という感じなんですね。

まぁ、歌詞に一定のテーマを持っていたりすると“この歌詞はポップ・ロックなフィーリングを持っているな……”という風に定まってくるところもあるし、かなりダークな歌詞であれば、ヘヴィなものになっていくものだけどね。

――本作先行シングルでもあった「ウェイト・ア・ミニット・マイ・ガール」は、ビルボードの《メインストリーム・ロック・チャート》で１位を獲得しています。このように一般的なファンも多いわけですが、逆に尖ったことがしづらいというネックはありませんか？

それはわからないな。こういうのってアプローチの仕方がまるっきり異なっていて、ヨーロッパだとヘヴィな音楽はラジオでかかりづらいんだ。エクストリームなギターが入っていると、それだけで敬遠されてしまいがちで。ポップ・ロック……特にレイドバックしたようなものがラジオでは扱われやすいよね。ただ、これがアメリカとなると、ヘヴィなものやグッドなクラシック・ロック・サウンドを持った曲がチャートに頻繁に食い込んでくる。アメリカとヨーロッパではかなり状況が異なっていて、ヨーロッパで好調だったシングルがアメリカではまったくラジオでプレイされなかったりもするよ。

――なるほど。

ただヴォルビートは、どちらの市場向きのシングルでも用意できるということを誇りに思っている。この曲はアメリカでバンドにとって９つ目のナンバー・ワン・ヒット・シングルとなった。そしてバンドを“アメリカで最もナンバー・ワン・ヒットを飛ばしたヨーロッパのバンド”としてくれたんだ。

――それがメタル・バンドでもあるんですから、ファンの鼻も高いです（笑）。ぜひ次は思いっきり激烈なリフがあって、かつヴォルビート的なメロディもある曲でチャート１位を取っていただきたい！

それができるかどうかはわからないな。なんてったって、ラジオ局を意のままに操作できるわけじゃないからさ（苦笑）。彼らはプレイする楽曲を非常に注意深く選んでいて、世の中の流れをそのまま反映しているところもある。しかも、俺たちだってアルバムを作る際に、ラジオのことを第一優先で意識しているわけじゃないから。

――それはそうですね。

もちろんラジオでヒットする曲を作るってのは悪い気はしないけど、それだけを考えて音楽を作るべきじゃないかな（笑）。「ビカミング」みたいにエクストリームな曲がラジオで１位を取ったらおもしろいけど、実際には想像がつかないなぁ。とはいえ未来で何が起こるかなんてわからないさ。明日何がヒットするかなんてラジオ業界で働いている人たちによって作り出されるものだし、それでいて大きく博打をするようなことはせずに、無難な選曲がなされていく。結局はそういうものなんだ。

――やはり、何かのためではなく、自分の気持ちのままいい曲を書くということが大事なんですね。2022年には、日本でもそんな楽曲たちがライヴで聴けることを楽しみにしています！

ぜひ！　俺たちだって日本でプレイすることを心待ちにしているよ。近いうちに会おう！

◎全米 No.1 ソングも収録。
２年ぶり８枚目のニュー・アルバムが発売中！

『サーヴァント・オブ・ザ・マインド』
ソニー／ SICX-171

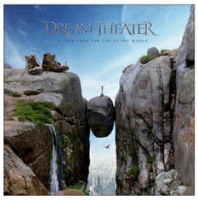
The latest article from UK

Text by Ali Cooper
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』354

John Petrucci
DREAM THEATER

ジョン・ペトルーシ　ドリーム・シアター

ジョン・ペトルーシはドリーム・シアターのギター・マジシャンにして、プログレッシブ・メタル界随一の髭のメインテナンス師だ。果たして君たちの質問で、彼の立派なアゴ髭を逆立たせることはできるだろうか？



◎DTHQで制作された、2年8ヵ月ぶりの最新15thアルバムが発売中！

『ア・ヴュー・フロム・ザ・トップ・オブ・ザ・ワールド』
ソニー／SICP-31494

◎公式ブートレグ第5弾は、1stアルバムの完全再現ライヴを収録！

『ロスト・ノット・フォゴトゥン・アーカイヴズ：ウェン・ドリーム・アンド・デイ・リユナイト（ライヴ）』
ソニー／SICP-31509

ハードなツアー・サイクルからの休みが延長されたことで、ドリーム・シアターのジョン・ペトルーシが貴重な休息時間を得たと考えるのなら、それは間違いだ。新たなソロ・アルバム、22年ぶりのリキッド・テンション・エクスペリメントのアルバム、さらにドリーム・シアターの新作といった具合に、メタル界のリフ・マイスターは、パンデミックの間も休むことなく創作に勤しんできた。10月に発売した15枚目のアルバム『ア・ヴュー・フロム・トップ・オブ・ザ・ワールド』を祝し、立派な髭のメインテナンス法、8弦ギターへの挑戦、ドリーム・シアターの輝かしい功績などについて解き明かしていこう。

――あなたは何年もの間、数多くのギタリストにフェイバリット・プレイヤーとして挙げられてきました。実際、自分のプレイに自信を持ち、“イケてるギタリスト”だと認識したのはいつ頃のことですか？

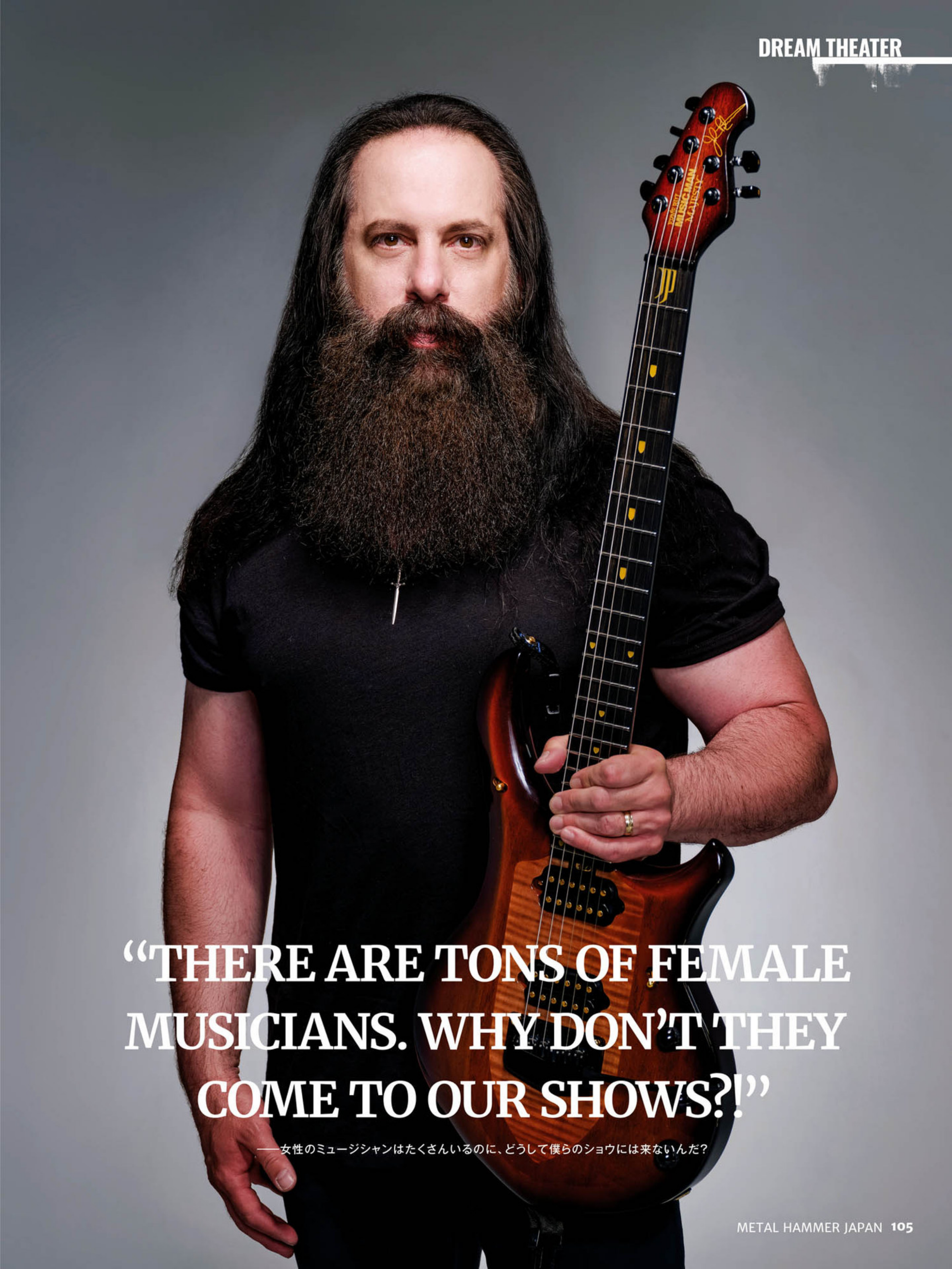
ティーンエイジャーの僕は毎日6時間はギターの練習をしていて、次第に“これをキャリアとして歩んでいきたい気がしてきたぞ。そして、自分のヒーローの何人かと同じように、ボストンのバークリー音楽大学に通ってみるべきじゃないかな”と考えるようになってね。

15歳頃には自分でもうまくやれるって気づいたし、そもそもギターを弾くことが好きで何時間でも弾き続けられたものだよ。こんな経験をしたことはほかに一切なかったからね。

――新曲を書くときは、最初に何が思い浮かびますか？　リフ、メロディ、リズム、もしくはそれらのすべてですか？　そして残りの部分はどのように作り上げていくのでしょうか？

曲によりけりだね。ギター・プレイヤーとしてはやっぱり最初にリフが思い浮かぶけど、作詞家やソングライターとしてはメロディが常に頭のなかを巡っているかな。

ドリーム・シアターの場合は曲のセクションによっても異なるもので、ときとして長尺になりつつもメロディによってドライブするものもある。でもほとんどの部分では、ギター・リフやモチーフによってドライブ



"THERE ARE TONS OF FEMALE MUSICIANS. WHY DON'T THEY COME TO OUR SHOWS?!"

――女性のミュージシャンはたくさんいるのに、どうして僕らのショウには来ないんだ？

していくよね。

——プログレッシブ・メタルを作曲するようになったのはなぜ？

僕がかつてプレイしていたバンドの方向性もあって、自然とこうなったよ。僕はメタルに夢中で、アイアン・メイデンやメタリカといったバンドがヒーローだったけど、それと同時にラッシュ、イエス、ピンク・フロイドのファンでもあった。友人たちと一緒に音楽を作り始めると、僕をインスパイアしてくれたものが自然と組み合わさっていったんだ。

——現在、家でよく流れている音楽は？

実は、家ではまったく音楽が流れていなくて！　世界中のどの家庭でも同じような状況だと思うけど、[Netflix]、[Hulu]、[Disney+] がかかっていて、アルバムを聴くことなんてほとんどないんだよね。当たり前のことだけど、今回ドリーム・シアターのニュー・アルバム『ア・ヴュー・フロム・ザ・トップ・オブ・ザ・ワールド』を作ってきて、ここ数ヵ月聴いてきたのはこのアルバムだけだったから。5000 回くらい聴いたんじゃないかな！

多くの人たちは僕が運動したり、車を運転したり、家で過ごしているときに音楽を聴いていると思っているようだけど、実はまったくしないんだよね。

——ドリーム・シアターの新曲「ジ・エイリアン」では、ドラムとベースのサウンドが直近３枚のアルバムよりもはるかに優れていると感じます。

『ア・ヴュー・フロム・ザ・トップ・オブ・ザ・ワールド』は僕たちがロングアイランドに作ったDTHQ（ドリーム・シアター・ヘッド・クォーターズ）で初めてレコーディングしたアルバムだ。2020 年に僕はソロ・アルバム『TERMINAL VELOCITY』、そしてリキッド・テンション・エクスペリメントの『LTE3』をレコーディングして、去年の 10 月にドリーム・シアターとして入ったんだ。

エンジニアのジミー・T・メスリンと、ジューダス・プリーストも手がけているミキシング・エンジニアのアンディ・スニープたちの能力に助けられたところがかなりあるよ。才能溢れる人たちが集結してチームワークを発揮したことで、素晴らしいサウンドになったよ！

僕らはいつも自分たちを限界まで追い詰め、互いを刺激し合い、サウンドや作曲がどうしたらより良いものになるかを探っている。だから多くの人から反響が得られるのはグレイトなことだし、特に僕らくらい長いキャリアを歩んでくるとより一層感じるよね。

——ニュー・アルバムでは今までやってきたテクニックで作曲をしましたか？　それともリスクを冒して実験をしてみた？

“両者を少しずつ”という感じね。このアルバムではまったくやったことのないことにトライしていて、初めて８弦ギターを手にしたんだ。アーニー・ボール・ミュージック・マンが僕オリジナルの８弦ギターを作ってくれて、これは彼らにとっても初めての８弦ギターだったようで。

このギターを使って書いた曲をアルバムに収録したところ、今までとは異なるものができたよ。基本的には［Majesty］というモデルをベースにしているんで、すぐに慣れることができた。

もともと６弦と７弦があって、もう１本弦を追加するわけなんだけど、一体どの弦を加えるのか？ってことになってさ。８弦ギター固有のスペックとしてファンド・フレットやスラントさせたピックアップといった変更点があるけど、僕が慣れ親しん

できたMajestyということもあって、その延長という感じで自然にプレイできたよ。このギターは完全で美しい！

――ドリーム・シアターの楽曲では、コラボレーションがあまり行なわれません。バンドが今まで行なってきたコラボレーションのなかで最高、もしくは最もヘンだったアイディアを教えてください。

これを“コラボレーション”と呼ぶのか“一致団結による結果”と呼ぶのかわからないけど、僕たちがやったなかで最高なことのひとつがデヴィッド・キャンベルによるオーケストラとのプロジェクトだった。2時間強の楽曲で、デヴィッドがフル・オーケストラに声楽隊、マーチング・バンドとさまざまなものを導入してアレンジしたものを録音したんだ。

スタジオでは700トラックもミックスすることになり、デヴィッドにそれをやってもらえたことで信じ難いくらいのパートナーシップを感じたよ。頭が吹っ飛ぶような経験だったし、彼のようなレベルの人と一緒に仕事ができて音楽的にもかなり大満足だったね。

――あなたたちのライヴは女性ファンの参加率が著しく低いですが、女性用トイレがまったく混まないことをセールス・ポイントとして集客を考えたことは？

それはおもしろい提案だ！　どうしてこんなことになっているのか僕も不思議だよ。最近《ジョン・ペトルーシ・ギター・ユニバース》というギター・キャンプの3回目を実施したばかりで、たくさんのゲスト・インストラクターに来てもらった。

僕の妻のリーナも初めてゲスト・インストラクターとして参加してくれて、彼女はミーンストリーク（MEANSTREAK）という全員女性のスラッシュ・バンドでギターを弾いている。今ではジューダス・プリーステスでもプレイしているんだよ。

さて、このキャンプに参加した女性はふたりだけだった。そしてこの音楽ジャンルでは、どうして女性の参加者が少ないのかが議論になっている。女性のギタリスト自体はけっこういるしドラマーなんてたくさんいるのに、どうして彼女たちは僕らのライヴに来ないんだ？ってね。

昨今ではドリーム・シアターのオーディエンスの規模自体は大きくなってきているのに、そのなかでの女性の比率は一向に増えないしその理由もわからない。僕たちのライヴにももっと女性が来てほしいと願っているよ！

――髭にはどんなオイルを使っているんですか？　あなたの髭は壮観です。

まずはありがとう！　誉め言葉としていただいておこう。

イギリスに男性用のヘア・ケア用品や髭用のトリートメント・オイル、香油を作る［キャプテン・フォーセット］という会社があって、僕はもともとユーザーだったんだけど、ドリーム・シアターのファンを介してコネクションを持つようになってさ。彼らはモデルを含めたさまざまな人たちや理髪店とともにシグネイチャー商品を手がけていて、僕のほうから“ミュージシャンとのコラボレーションをやったことはあるかい？”とアプローチをしてみたんだ。

今は“ネビュラ”という僕のシグネイチャー・シリーズがあって、髭用のオイルとワックス、香油をラインナップしている。今もこれらを塗っていて、ルックスだけじゃなくて匂いだってキマっているよ！

――架空のキャラクターを含め、歴史上の人物では誰の髭に憧れますか？

ガンダルフの髭にするってのはどうかな？　けっこうイイ感じだろう！

“I'LL TAKE GANDALF'S BEARD. I'M GETTING THERE!”

――ガンダルフの髭にするよ。けっこうイイ感じだろ！

The latest article from UK

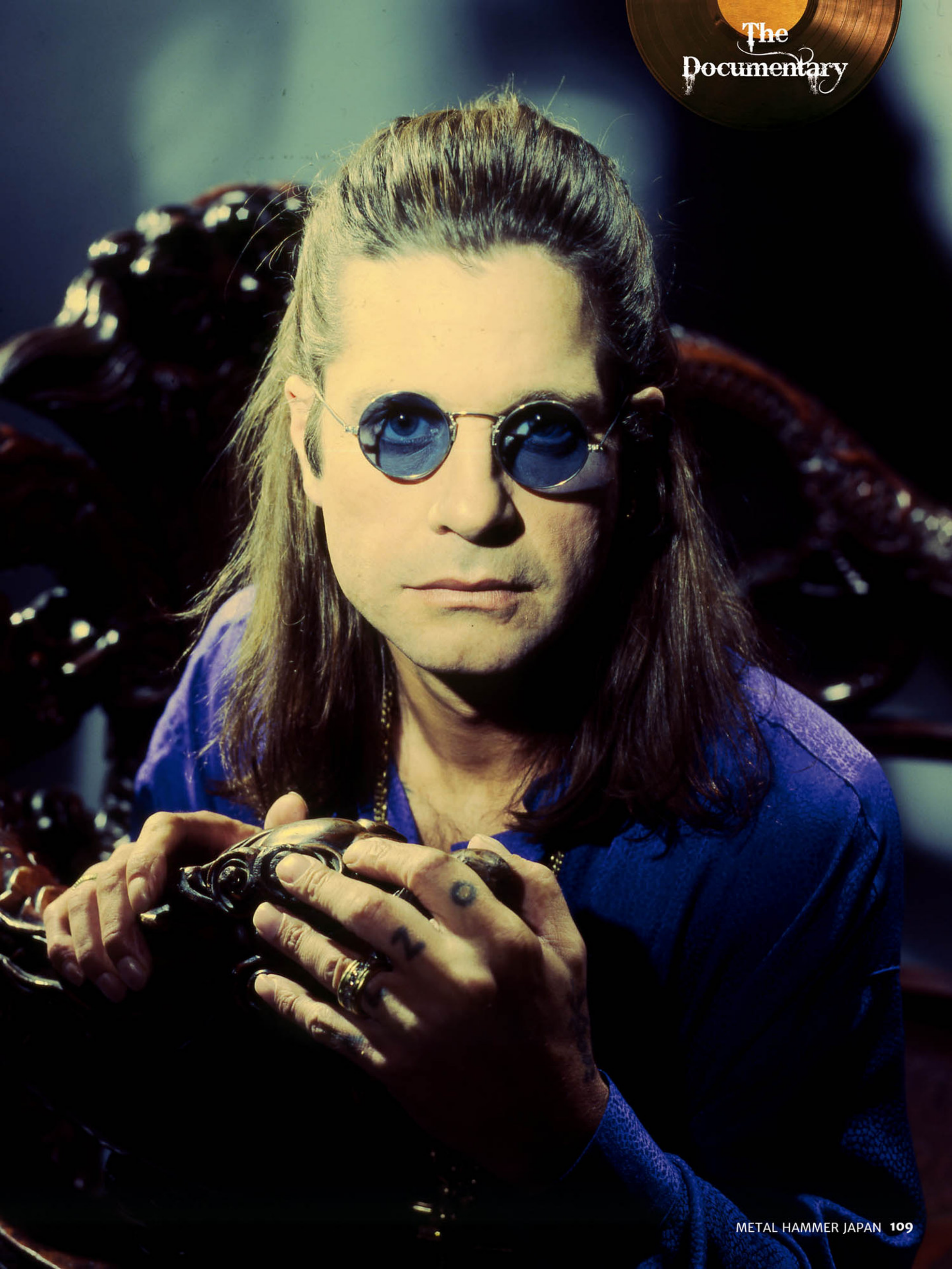
Text by Rich Hobson
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』354

THE SECOND COMING OF OZZY

——オジー、再臨——

“不死身”、“生涯現役”という言葉の似合うオジーではあるが、そんな彼も“引退”をほのめかしたことがある。その契機にリリースされたのが、6枚目のオリジナル・スタジオ・アルバム『ノー・モア・ティアーズ』だった。前作『ノー・レスト・フォー・ザ・ウィケッド』から加わったザック・ワイルドのギターが冴え、盟友レミー・キルミスターとの共作にて、サバスの呪縛を解き新たな面を見せたオジー。破天荒なレコーディングを経て生まれた本アルバムは、のちの新機軸を築く足がかりとなったのみならず、自身の命すら救い出したのだった……。

30年前に産み落とされ、自ら“復活作”と位置づける本作について語るオジー。近況をうかがい知ることもできる貴重な声をお届けしよう。


The
Documentary

OZZY OSBOURNE

オジー・オズボーン（vo）、マイク・アイネズ（b）、ランディ・カスティロ（d）、ザック・ワイルド（g）／時計回り

1989年9月3日、オジー・オズボーンは頭痛とともに牢獄にて目を覚ましたが、どうして自分がそこにいたのかはまったくわからなかった。あり得ないような場所に想定外の人間がいる状況であったが、次第に判明する真実が彼を苦しめていく。彼は殺人を試みたとして逮捕され……正しくは酒とドラッグで酩酊し、妻であるシャロンをシメつけようと跳びかかったのだった。この夫婦は結局和解することに相成ったが、この件に至るまでに不穏な兆は見られていた。80年代は彼にとって低迷した時代であり、抱えていたさまざまな問題を解決しなければ、彼は死に絶えていただろう。

†

リハビリを終了させ次のアルバムに取りかかろうとした頃には、オジーは完全な別人に化していた。"制御を失うほどに泥酔したピエロ"といった世間のイメージを払拭する準備はできていた。

"『ノー・モア・ティアーズ』は復活だった。俺はかつてないほどに健全な状態だったし、証明すべきことがあったんだ"と、オジーは本誌のインタビューで語ってくれた。

アルバムのリリースから30年が経過した現在、"プリンス・オブ・ダークネス"と呼ばれてきたあのオジー・オズボーンが当時窮地に追い込まれていたと考えるのは想像に難い。近年公表されたパーキンソン病という大病を患ってもなお13枚目のソロ・アルバム（※カバー作含む）に取りかかっており、パンデミックにより長らく中断されている《ノー・モア・ツアーズ2》と名打たれたツアーの再開をまだかと待ち続けている。"早くホームであるステージに戻りたくてたまらないんだ"と興奮しながらオジーは話す。

話を1990年に戻そう。そのとき、バンドがスタジオに入ろうとする前から道は閉ざされていた。『ノー・モア・ティアーズ』のラフなデモ（この時点ではタイトル・トラックすらできてはいなかった）が有望なプロデューサーたちの間を巡ったが、オジーが歩もうとしていた新たな方向性に対して興味を持つ人間はいなかった。

しかし唯一の例外として、プロデューサー・デュオであるジョン・パーデルとデュアン・バロンが興味を持った。ただ、残念なことにそれはレーベルにとって好ましくない報せでもあり……。

"レコード会社からスタジオに呼びつけられ、デモについての印象を聞かれてね"と回想するデュアンの声からは、幾分の怒りが感じられた。"僕はかなり気に入ったし、いい方向性だとも思った。でも彼らは気に入らなかったようで、早々に見限り、僕らもクビになったってことだね！"。

最終的にジョンとデュアンはアルバムのプロデュースを行なうことになるものの、レーベル側としては90年代を迎えるに際してニュー・アルバムの歩むべき方向性についてほかの計画があったという。

"ある時点でリック・ルービンがプロデュースをすることになっていた"と語るのは、長年に渡りオジーを支えることとなったギタリストのザック・ワイルドだ。『ノー・モア・ティアーズ』のレコーディングに至るまでの衝突について、ロサンゼルスの自宅からザックは淡々とした口調で語ってくれた。そしてニヤリとしつつ"俺は誰が飛行機を操縦しようが心配することはないし、フライトを楽しむだけだ"と続ける。

"リックの家に連れていかれ、デモをプレイして彼にプロデュースしてくれるよう説得した。でも彼からは「ザック、コイツはモトリー・クルーのアルバムをおぞましくさせたようなアルバムじゃないか。僕らが必要なのは「血まみれの安息日」みたいなリフで、アルバム全体にああいったヤツが必要なんだ」と言われたよ。すでに乗った話だし、リックが提案したことに抵抗もなかったが……主役がノリ気になるかってことが唯一の問題だった。だってこれは彼のバンドなんだからさ！"。

サバスっぽいものを作って売りさばくことにオジーはまったく興味を持たず、それでも何とか彼を説き伏せようとする行為は彼の決意をより一層強めることにしかならなかった。プリプロダクションのリハーサルでザックにブラック・サバスっぽいスタイルのリフをプレイさせ、オジーにアルバム全体を書き直させるというのが当初のプランだった……が、それも不発に終わってしまった。

"敬愛するアイオミのアイディアを頂戴したようなリフをたっぷりと挟んでプレイした

"I'M PLAYING AND OZZY JUST STANDS UP AND WALKS OUT!"

ZAKK WYLDE

俺がプレイしていたら、オジーは立ち上がり出て行ってしまったんだ! ――ザック・ワイルド

"I SAT THERE SMELLING SHIT FOR HOURS BEFORE I REALISED"

OZZY OSBOURNE

座っていたら、ウンコの臭いがすることに気づいてね。——オジー・オズボーン

ら、オジーは急に立ちあがり部屋を出て行ってしまってね"とザックは笑う。"ションベンでもしに行ったのかと思ってたら、彼はそのまま家に帰ってしまったんだ！"。

"やっとレーベルから連絡をもらい、ジョンと僕が雇われて仕事をすることになったんだ"とデュアンは皮肉を込めて話した。"そして彼らは、もう口出ししないってことも明言してくれたよ"。

最終的にレーベルによる干渉を受けることはなくなったが、それこそまさに『ノー・モア・ティアーズ』が必要としていたことだと言えるだろう。デュアンとジョンが指揮し、サバス信仰のプレッシャーを取り払い"真にグレイトなオジー・オズボーンのアルバムを作る"という目標に向かえるようになったのだ。

"ジョン・パーデルとデュアン・バロンはアレンジメントについて、かなりインストゥルメンタルなアプローチをとっていたね"とオジーが振り返る。"どの曲もラジオでプレイされるように取りかからなければと考えていたし、それまでよりもステップアップした考え方をしなくてはならなかった。俺には証明しなくちゃならないことがたくさんあったからな！"。

"オジーの人気は落ち着いてきた頃で、正直に言うと大きく出る最後のチャンスだったと言わざるを得なかったね"とデュアンは認める。"でも僕たちはオジーがソロでやってきたことをサバスと同じだけ愛していたし、「クソっ！　これを失敗させるわけにはいかないんだ！」と思っていたから"。

オジーが作った簡素な初期の素材に加える形でアンセムのような曲たちが作られていき、歌詞の世界観はかつてないほどにダークでシリアスな領域に踏み込んでいった。曲の内容は連続殺人犯（「ノー・モア・ティアーズ」）や小児性愛（「ミスター・ティンカートレイン」）、ツアーに出た際のオジーのホームシック（「ママ、アイム・カミング・ホーム」）とさまざまなトピックを扱っている。心温まるバラード曲「ママ、アイム・カミング・ホーム」は即座にファンのお気に入りの楽曲となり、《ビルボード・ホット100》でのトップ40入りを果たしたオジー唯一のソロ楽曲となった。

"「ママ、アイム・カミング・ホーム」はピアノで書いたんだ"とザックが続ける。"ある日俺はオジーとドライブに出ていて、ボロ家の前を通ったんだ。5フィート（150cm強）くらいの草がボーボーに生えていて、シャッターが半開きで廃墟って感じだったよ。車を停めた瞬間にオジーが俺の肩をつかんで「シャロンがお前の給料を払っているんだろ？」って聞いてきたんで、俺は勘弁してくれよって感じで笑いが止まらなかったな（※暗に"その廃墟に入るギャラも支払っているんだぞ"というニュアンスの話）。それで俺らはその家のなかに入っていき、ピアノを見つけたんだ。そこで出てきたのが「ママ、アイム・カミング・ホーム」のリフなんだよ"。

心温まる曲調であること以上に驚かされるのが、この曲の歌詞はオジーではなく、彼の良き友でありロック・アイコンでもあるレミー・キルミスターによって書かれていること。"本当にアメイジングなことだったよ"とオジーが言及する。"自分でこれ以上のものなんて書けるわけがなかった。レミーが書いてくれたこの詞は、俺にとっ

"HE'D DROP STINK BOMBS AND RUN OUT CACKLING!"

悪臭弾を投げつけてきて、高笑いしながら走り去っていったんだ！

1992年3月に開催されたランディ・ローズのベネフィット・コンサートに参加した当時はまだ無名だったアグリー・キッド・ジョーを、オジーは新作でのツアーに迎えた。人生を大きく変えたこの経験について、フロントマンのウィットフィールド・クレインが振り返ってくれた。

●オジーとモーターヘッドとともにツアーに出ることになったときの気持ちは？

〇ツアーに連れていってもらえると聞いた日のことをはっきりと覚えているよ。あれは俺らが生きてきたなかで、何よりも求めていたものだったんだ。オジー・オズボーン、モーターヘッド……アグリー・キッド・ジョーだって？　ヒューストンかどこかのボロボロのホテルで報せを聞いたとき、授賞式の類でよく見る飛び跳ねて喜ぶヤツをみんなでやったよね。当時の俺らは1台のトレーラーハウスに住んでいたんだぜ！　それが急に、ツアー・バスが与えられるって噂が流れてきて。ツアー・バスのなかに入ったことなんてなかったから、初めて足を踏み入れたときは"嘘だろ、オイ！"って感じだった。オジーとツアーをする23歳ってこんな感じだったよ。

●オジーと会ったときの思い出を。

〇彼のもとに遊びに行き、楽屋で一緒に座っていたことがあって。俺はずっと彼を追いかけてきた。彼は俺のヒーローであり、すべての人のヒーローだったからさ！　あるときなんて、彼のバンドと一緒にサウンドチェックで歌ったことまであったんだ。オジーは本当におもしろい人だよ。彼は酒を断っていたけど俺らは陰でしこたま酒を呑んでいて、それがバレたらツアーからはずされるんじゃないかとビクビクしてたよ。けどオジーは俺らの楽屋にビールを2箱送ってくれたんだ！　俺らは何かのトラップじゃないかと思ったけど、楽屋の隅で呑む分には喜んでくれていたよ。

●バックステージの様子は？

〇オーディエンスが最高だったからステージを降りるときはいつも興奮していて、楽屋に戻るといつも"カー、カー、カー！"っていう甲高い声でドアをノックされたね。"ウワ、また来た！"って感じで、そこにはステージ衣装で真っ黒なアイライナーを塗ったオジー・オズボーンがいて、"俺を入れろ！"という感じだったな。俺らはそろって"ダメだ！"って……だって、彼はガラス瓶に入った最悪に不快な悪臭弾を投げつけて逃げていくつもりだったんだから。彼は俺らが臭い部屋で過ごす姿を高笑いすることにハマっていたんだ！　勘弁してくれよって感じだったけど、しょうがないよな。俺らはみんな彼を愛していたのだからさ。

てあまりにもパーフェクトだったんだ。彼は俺が何を伝えようとしていたのかわかっていたんだな。彼と一緒にいるときっていうのは常に楽しかったから、シリアスになることなんてなくてね。彼が生きたのは本物のロックンロール・ライフだった。そして俺はどうしようもないくらい、彼に会いたいと願っているよ"。

『ノー・モア・ティアーズ』の歌詞がダークな方向性に向かう一方で、断酒によってもたらされた新たな環境でも、オジーとバンドの面々は楽しむことを忘れなかった。

"オジーは＜悪臭弾＞をところかまわず投げつけてきてさ"とザックは笑顔で話す。"あれはひと部屋どころじゃなく、建物をブッ飛ばせるくらい強烈だったな。振り向けばオジーは「やり過ぎちゃったかな。ソーリー……」って感じで、俺たちは「オジーめ！　一体なんてことをしてくれたんだ！？」とゲラゲラしていたよ。多くの連中は、オジーはアルバムを完成させられないんじゃないかと恐怖を覚えたかもしれないがね"。

"正直なところ、最初は彼が何かしらの問題を抱えているのではないかと感じたよ"とデュアンは笑う。"彼はどこにでも爆撃していた。スタジオ、飛行機のなか、週末にラスヴェガスに行ったときなんか、カジノでもぶちまけてくれたんだよ！　彼は僕らを怖がらせてくれたよ"。

やり込められる一方ではなく、ザックとドラマーのランディ・カスティロはユニークな方法でオジーに対抗した。"俺らだってやり返さなきゃならないとわかっていたからさ……だから俺はウンコを袋に詰めていったんだ"とザックが笑う。"オジーが第二次世界大戦かなんかのビデオを観るために毎日座っていたソファーがあって、俺はウンコを詰めた袋に小さな穴を空けてソファーのクッションの隙間にそっと忍ばせておいたんだ。ランディなんかタッパーにウンコを詰めて、使うときまで冷蔵していたんだぜ。でも結局はオジーにやられちまうだけなんだがね"。

この話はこれ以上聞かないでおこうか……むむっ、終わる気配がない。

"ある晩、ランディがシャワーを浴びてリフレッシュしてきて、みんなで帰ろうかと準備をしていたときに突然電気が消えたんだ。ランディがライターに火をつけて「またオジーじゃないのか？　どこに行ったんだ？」となって。明らかにウンコの臭いがしてきたんで周囲を見てまわったら、ドアノブにウンコが付けられているじゃないか！　オジーの部屋に目をやると、彼はカーテンにくるまって、俺らがドアノブをつかむところを見届けようとしていたんだ。なんて人なんだよ、まったく！"。

"なんかウンコの臭いがするなと、ソファーに座って気づいてね"。オジーはソファーの件を笑いながら話す。"腹が減って冷蔵庫に残り物を探しに行ったら、大した＜残り物＞を見つけたんだ！　俺らは互いにクソを食らわせていたってことだ。たくさんのバカなことをやって楽しんでいたんだな"。

こういった悪ふざけを超えて、バンド内のジョークはのちにアワードを受賞する「アイ・ドント・ウォント・トゥ・チェンジ・ザ・ワールド」となっていった。"ちょっと道を行ったところにストリップ・バーがあって、そこで流れていそうなゴーゴーっぽいリフをギターでプレイしていたんだ。「イェイ、

イイぞ！　早くケツの穴を見せてくれ」って感じのヤツだね” とザックが振り返る。*“そしてオジーが入ってきて「一体ソイツはなんだ？！」って感じで、俺は「これは単なるジョークだ」って返したんだ。すると彼は「ソイツをキープしておけよ」と言ってくれて、それでグラミーを受賞することになったんだぜ！”*。

『ノー・モア・ティアーズ』の大部分がギャンブルのような展開だったが、できあがったアルバムは1980年のソロ・デビュー・アルバム『ブリザード・オブ・オズ〜血塗られた英雄伝説』にも劣らない自信と誇りに満ちた作品となった。

両アルバムが、プロダクション・チーム、ミュージシャンともに磐石の布陣で臨んだものであることに変わりはない。ザックという類稀なる逸材はもちろんのこと、長きに渡ってコラボレーターとして歩んできたランディ（カスティロ）をドラムに、ジョン・シンクレアをキーボードにといったラインナップであった。

しかしベースに関しては少々トリッキーな事情があった。オジーはマイク・アイネズをオフィシャル・バンドのメンバーとして迎えたが、スタジオでフィットするまでどれくらいの時間がかかるのかが懸案事項となっていた。そういった経緯もあって、マイクは“インスピレーションと音楽的な提案”という形でクレジットされている一方で、アルバムではプレイせず、長年のコラボレーターであるボブ・デイズリーが代わりに演奏している。しかしマイクは本アルバムのタイトル・トラックのイントロという、最もアイコン的なパートで貢献する。

“プリプロダクションを開始した頃、まだアルバムのタイトルすら決まっていなかった” とオジーは話す。*“アルバム全体を作曲したあとに、マイク・アイネズがベースという形でバンドに加わり、あのベース・ラインを思いついたんだ”*。

“アルバムそのものは純粋にクールなチームワークの賜物だった”。デュアンは続ける。*“僕らはどんなときもあの場所にいたので船を先導することはできたけど、実際にはその瞬間にその場にいた人が形作っていったという感じだね。ザックはしっかりとしたヴィジョンを持っていて、彼は狂ったまでに貢献していたよ”*。

1991年9月17日にリリースされた『ノー・モア・ティアーズ』により、ロックの勢力図は変動を迎える。ヘヴィメタルにおける成功がどういったものなのかはメタリカの『メタリカ』によって再定義され、パール・ジャムの『TEN』、サウンドガーデンの『バッドモーターフィンガー』、ニルヴァーナの『ネヴァーマインド』らによってグランジの時代が来ようとしていた。そういった潮流にもオジーはベストな状態で迎え撃つことが可能で、変化する潮目に立ち向かっていることを示した。彼の努力により本アルバムはベスト・セールスを記録し、1991年末にはプラチナム・ディスクを、2021年には4回目のプラチナムを記録した。

“もちろん成功となると、それをずっとサポートし続けたレコード会社が天才だったというべきだろう”。デュアンは話す。*“でも僕らは気にしなかったさ。僕らは目指したことを実現し、それがオジーに新たな命を吹き込んだんだ”*。

90年代の初頭にオジーが多発性硬化症と誤診されたことにより、オジーは引退して『ノー・モア・ティアーズ』が最後の作品になるのではないかと噂された。*“医者からそう言われたからって、なんだっていうんだ？”* と診断の意味について話す。*“今じゃ俺はパーキンソン病だって言われたけど、自分にできる最善を尽くして生き続けるだけなんだよ”*。

あれから30年、オジーはベストを尽くし続けている。ニュー・アルバムを制作し、迫りくる《ノー・モア・ツアーズ2》（本来は2018年にスケジュールされていたが、健康上の問題とパンデミックにより順延）と、オジーの情熱は90年の頃と何ら変わってはいない。*“いつかは止まらなくちゃならない日が来るってこともわかっているさ……。だが、俺にとって今までで最高なことが起きているんだ。これを手放すことは本当に難しいことだよ”*。

そして自身に向けられた憶測を覆すために、オジー・オズボーンはスタジオに向かっていった。この50年間ずっとそうであったように。

THE REVIEWS

NEW NOISE P.116

これが次代を彩る注目の激音だ！

DISC REVIEWS P.120

11月1日～1月31日リリースの新作をピックアップ！

METAL NEW GEAR P.125

メタル・ミュージシャンにお薦めのニュー・ギアを紹介！

Special Presents!

メタルハマー・ジャパン・オリジナルのスペシャル・アイテムをドドンとプレゼント！
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、希望アイテム（番号と商品名）を記入してください。
◎締め切りは［3月10日（木）］まで
当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

①ラウドネス・サイン入り
オリジナルTシャツ
＜1名様＞
※サイズはM。

②ラウドネス・サイン入り
オリジナル・マスク・ケース&マスク
＜2名様＞

③Damian Hamada's Creaturesサイン入り
オリジナルTシャツ
＜1名様＞
※画像はイメージ。サインはあとから入ります。

④筋肉少女帯サイン入り
ポスター
＜2名様＞

⑤NEMOPHILAサイン入り
ポスター
＜2名様＞

...AND JUST A LITTLE INFO FOR ALL

海外シーンではすでに頭角を現わし、本邦でのブレイクも虎視眈々と狙うバンドたち。
そんな次代を彩る注目の激音をピックアップ！

『We'll Do It Live』

DRAGGED UNDER

ドラッグド・アンダー

90sスケート・パンク・スタイルで挑む 新たなメタルコア・サウンド

ベアトゥースのメロディ、ザ・ブロンクスの躍動するハードコア感、ザ・ユーズドのエモーション、そしてミレンコリンのアティチュードを掛け合わせたら、一体何が生まれるのだろうか？　シアトルで活動する5人組バンド、ドラッグド・アンダーは、その答えかもしれない。

彼らからは、モダンなメタルコアに90年代のサウンドで挑んでいる印象を受けることだろう。**"90年代に俺らが感じて育ったものを、30分のノスタルジックなリスニング体験として提供したいんだ。でも俺らはスケート・パンクというよりも、「『トニー・ホーク プロ・スケーター1』（1999年発売のプレイステーション用ゲーム）コア」というべきかな"**と語るのはヴォーカルのトニー・カポッチだ。

ドラッグド・アンダーは、今やYouTuberとなったベーシスト、ジャレッド・ダインズとともにトニーがスタートさせた前身バンド、レスト・リポーズを発展させたものだが、トニーの思想家としての一面とオルタナティブ・ロックへの愛は、サウンドにより強く反映されている。**"レスト・リポーズを聴いてみれば、かなり臆病でエッジの取れた、一風変わったサウンドが味わえるはずだ。でも俺は言葉のニュアンスで踊ることに興味がなくてね。リスナーの首根っこをつかまえ、自分の思いを直接伝えたいと思ったんだ"**と方向性の変化について話す。

情熱的でエネルギーみなぎるメッセージは、彼らの2020年のデビュー・アルバム『The World Is In Your Way』、そして最新のライヴEP『We'll Do It Live』にて繰り広げられており、熱狂的なパンク・リスナーたちが待ち望んでいた楽曲が詰まっている。

"こういったニュー・ウェイヴなパンクにキッズたちは夢中で、例えばラッパーがパンク・ソングを作ったりオリヴィア・ロドリゴみたいなのが世界中でトライしているように、俺たちの音楽にも居場所があるんだ。そして、かつてスケート・パンクを好んでいた連中にも、新たな息吹を与えられていると思うんだ"とトニーは語る。

FOR FANS OF: ベアトゥース、ア・デイ・トゥ・リメンバー、ポラリス

FROM MHJ ルックスに似合わず（？）、メロディのあるロックを聴かせる彼ら。適度にブレイクダウンも取り入れながら王道ハード的でもあり、またSR-71のようなパンク感もある……という、ある意味では万人ウケする音楽とも言えるのでは。これを個性と取るか否かが分かれ道。

SLEEP WAKER

スリープ・ウェイカー

ドラム兼ソングライターであるフランキー・ミッシュは、6歳の頃、頻繁に悪魔に襲われていた。**"当時の俺は不眠症と金縛りに悩まされていて、深く眠るためにメラトニンを摂取してたけど、単に夢がヘンなものになるだけだった。目を覚ますとドアのひび割れから何かが見えたんだ。ソイツは俺の胸の上に座り、俺はベッドにめり込んで息も苦しくなって……"**。

フランキーが体験した悪夢はバンドの荒涼とした音楽性へのインスパイアとなり、夢や現実、そしてトラウマといった事柄を音楽のコンセプトとしていった。**"ほとんどの人が話題にしないけど、かなりおもしろいことだと思うよ。どことなくとっつきやすいものにさせたかったんだ"**とフランキーは続ける。

2ndアルバム『Alias』で彼らは初期のテクニカルな作曲から大きく舵を切り、よりメロディックに進化した。エンディング曲「Distance」ではデフトーンズのような苦悶、そしてローズのような息苦しいアンビエンスを聴かせている。ときにはSFオタクらしさやTVゲームへのオマージュを込めたサンプリングも散りばめている。

悪夢にインスパイアされた寂寥でブルータルなメタルコアの襲撃！

本作でのゴールについてフランキーは、**"バンドを次のレベルへと押し上げる作品になってくれればいい。そして多くの人の心に刺さることを願っている"**と語る。

FOR FANS OF：ローズ、デフトーンズ、マリリン・マンソン、イン・フレイムス、Northlane

FROM MHJ サウンド的には歪み成分の強いジェント系と言っていいだろうが、そこにエレクトロを加えることで独特のアンニュイ感も出している。またシーン・チェンジが多いものの決して難解な印象はないので、コア系が好きな人にもうまくハマるのでは！？

WITCH FEVER

ウィッチ・フィーヴァー

キラー・チューンかつヘヴィな音で自己主張 これぞ、新世代女子のアティチュード！

女性アーティストがヘヴィな音楽を作ることに対して、いまだ風当たりの強いこのシーンに、彼女たちは真っ向から挑んでいる。そこではキラー・チューンやヘヴィなリフをいくつも作り続けていくことが最良の方法であり、そして彼女たちは異を唱える人々にまったく屈することない強いアティチュードを持っている。

ウィッチ・フィーヴァーはフェミニズム、LGBTQ+を巡る論争、そして良きドロップ・チューン・リフへの愛を共有する4人組。最新シングル「In Birth」では、グランジ、ポスト・パンク、そしてサバスにインスパイアされたドゥーミィなリフにて、昨今の社会問題に対する怒りを表現する。さらにデビューEP『Reincarnate』でも現代社会への怒りを自己の音楽によって解放させていった。**"EPに収録した「Reincarnate」は、自己とは体によって力を与えられた存在であり、それだけで生きる価値があるということを歌っているの"**と語るのはベースのアレックス・トンプソンだ。

そしてヴォーカルのエイミー・ワルポールは自身の育った環境を歌詞の源としていて、教会での男尊女卑的思想への異議を唱えている。その一方でゴシック文学やホラーへの憧憬も垣間見えるなど、彼女たちはほかにない個性を持ったバンドなのだ。

FOR FANS OF：ニルヴァーナ、ビキニ・キル、ブラック・サバス、LAZYgunsBRISKY（初期）

FROM MHJ 70年代サイケ・ロックの香りをたっぷりとまとっている彼女たち。サバス（オジー）というよりも、レミー……しかもホークウインドの系譜にあるようにも感じる。やはり音楽的キモとなるのはベースで、気だるくも女性的であるヴォーカルは日本のファンにも好かれそう。

SPIRITWORLD

スピリットワールド

ハードコアとカウボーイの融合 “デス・ウェスタン”の世界へようこそ！

土埃舞うネバダ州の奥地からやってきたスピリットワールドは、“デス・ウェスタンの配達人”だと自負している。獰猛なデス・メタルやハードコアを軸としたそのサウンドは、リスナーにセルジオ・レオーネの映画が持つストレートでエッジの利いたおぞましさをもたらす。バンド・リーダーのスチュ・フォルサムによると、ニュー・アルバム『Pagan Rhythms』はバンドにとっての始まりであり、これから続いていく身の毛のよだつほどのクリエイティブな追求の第一歩だという。

“このアルバムで俺は自分が持つベストなものをすべて使い尽くし、それらはみんな俺が好きなものばかりで、数合わせの捨て曲なんて存在しない。自己満足なだけのソロなんてなくて、すべてが単に超アグレッシブなんだ。俺らのサウンドにはダークでヘヴィな終末的要素があり、おそらくそれが現代を生きる多くの人たちに響いてるってことなんじゃないかな”。

スピリットワールド流のこの音楽ジャンルとカウボーイの融合方法は、シングル「The Bringer Of Light」の血生臭いビデオにて堪能できるはず。マカロニ・ウェスタンにブルータルさを加え、スレイヤーを彷彿させる高速のハードコア・サウンドは、まさに暴走列車に乗っている気分。人類が地獄の炎に飛び込む際のサウンドとは、まさしくこのことだ。しかしこれもスチュにとっては始まりに過ぎない。

“ウェスタン映画にホラーやフィクションを混ぜ込み、そこに音楽をつけてみたいね。それこそが「デス・ウェスタン」ってヤツだ。もし誰かが予算をたっぷりとくれるなら、ホラー・ウェスタン映画を作る準備もできているぜ！”。

FOR FANS OF：インテグリティ、スレイヤー、パワー・トリップ

FROM MHJ あ、こんなアイディアもあったか……と思わせてくれた“デス・ウェスタン”。ちょっとスレイヤー・チックなフレーズもありつつ、時折挟まれるトレモロ・ピッキングはカントリー的とも言え、いわゆるデス・メタルほど聴く人を限定せず……楽しく聴けるという面からもオススメ。

URNE

アーン

トリヴィアムやゴジラも魅了する 極太のリフを奏するロンドン発の実力者たち

ジャン＝ミシェル・ラバディ（ゴジラ）やマシュー・ヒーフィー（トリヴィアム）らから賛辞を贈られているアーンは、ロンドン発のホットなバンドだ。

各メンバーがさまざまなバンドで活動してきたことから、経験値の豊富さには特筆すべきものがある。しかしこのバンドを開始するのに際し、ジョー・ナリー（vo, b）は**“最初のEPでは、ハング・ザ・バスタード（アンガス・ニーラ<g>とジョーが所属していたバンド）らしさを消すことがポイントだった。4年間一緒に歩んできて、やっと現在の姿になれたよ”**と語る。

極太のリフで埋め尽くされたデビュー・アルバム『Serpent & Spirit』は、初期メタリカやバロネスのような、グルーヴを押し出したクラシックなメタルへの数々の賛歌が収められている。

FOR FANS OF：マストドン、スピリット・アドリフト、バロネス

FROM MHJ ハードコアを骨子としてはいるが、細かいギミックを入れたリフ・ワークはギター・ファンも楽しめる。ギター・ソロも配しているが、技術で押すわけでもなく、あくまでバンド全体の勢いで聴かせてくれる。ちなみに、別にゴジラっぽいわけではない。

SEEYOUSPACECOWBOY

シーユースペースカウボーイ

欧米アンダーグラウンド・シーンの大注目バンド 悲痛を乗り越えた最新作は、ダークネスでユーモラス！？

数枚の作品、そしてデビュー・アルバム『The Correlation Between Entrance And Exit Wounds』によって、彼らはアンダーグラウンド・シーンで最もホットなバンドとなり、コニー・スガーボサはこのコミュニティきってのシンガーとなった。

“デビュー作を作っていた頃は陰惨な状況で、でもそれがハマっていて”とコニーは話す。メンバー・チェンジを経た新作『The Romance Of Affliction』については、**“メイン・ソングライターが去ったことで、昔のことに固執しなくて済んで。新しいことにトライしたくて、前作では「負ったばかりの傷」だったけど、今作では「終わりかけの傷」を表現したの。これはこの2年間で私の生活が大きく変わり、どう生き抜くかを考えてきたってことでもあるわね”**。

FOR FANS OF：シャープトゥース、ノックド・ルーズ、アット・ザ・ドライヴイン

FROM MHJ クロウルとハイトーン、そしてクリーンと、ここまでコロコロ変わるバンドは少ないとも言えそう。それに伴いバッキングの雰囲気までしっかり変わるあたり、曲がよく練り込まれている。まずは“コニーに惹かれ聴いてみる”というのもいいと思う。

ANGSTSKRÍG

アングストスクリーグ

デンマーク出身の謎黒面が襲来！ ブラック・メタル＋R&Rの結合とは！？

デンマークのデュオによるデビュー・アルバムにはブラック・メタルの仰々しさとロックンロールの勢いが溢れているが、しかし彼らの正体は謎に包まれている。**“私たちは数年間離れて活動をしていたが、あるとき物理的距離が近づいたら、急にクリエイティブさが爆発するようになった”**と語るのは、正体不明の“広報担当”だ。

斬新で独創的な音楽では豪華なゲスト・ギタリストの面々（サテリコン、ドラゴンフォース、ヒポクリシー、ソイルワークの新旧メンバーたち）がソロを披露しているが、それ以上に北欧固有の“ヤンテの掟（自分は民衆より優れてはならない）”というコンセプトとの向き合い方が非常に興味深い。

“ヤンテの掟は謙虚でいることの大切さを教えてくれる。それでいて私たちはポテンシャルのある音楽を作り、グローバルに活動していきたい”と広報担当はそうも語った。

FOR FANS OF：マンター、クヴァラータク、メイヘム、ダークスローン、Zud

FROM MHJ このルックスに偽りなく、不穏な雰囲気を撒き散らす彼ら。ハードコアを内包した90年代ブラック・メタル的であり、シンフォニックに寄らないその方向性はよりライヴで熱くなれそう。彼らは壇上でどのようなパフォーマンスをするのか！？

COGNIZANCE

コグニザンス

ジャズ&フュージョンを融合した衝撃的音色 新たなテクニカル・デスがここに！

そのテクニカルでラウドなサウンドから、コグニザンスはここ10年のUKデス・メタル・シーンでの突出した存在となった。リーズ出身の彼らはデビュー・アルバム『Malignant Dominion』で早くも成功をつかみ、その勢いは続く『Upheaval』でもとどまることを知らなかった。

“作曲を始めたとき、アレックス（ベイリー／g）と俺はたくさんのメロディとプログレッシブな方向性を求め、リフよりもコード・ワークに重点を置いたんだ。ヘンリー（プライス／vo）によってストレートなデス・メタル、速さ、アグレッシブさがもたらされたね。アレックスはジャズやフュージョンにも精通しているから、それも少し入っているかな”とベースのクリス・ビンズが語ってくれた。

また彼らのプレイに加え、著名なアーティスト、ジェイソン・バーネットによるアートワークが、バンドがよりスマートでシャープなデス・メタルを繰り広げていることを示唆している。

FOR FANS OF：サイクロプティック、ディキャピテイテッド、アーチスパイアー、カンニバル・コープス

FROM MHJ 7弦ギターや多点ドラムなど、かなりテクニカルな要素を持ったデス・メタルだ。とは言えヴォーカルはジョージ・フィッシャー・スタイルでもあって、技巧フレーズとデス・メタルの残虐感のどちらも楽しめるバンドなのでは。ルックスは程よく地味です（笑）。

『SUNBURST～我武者羅』

ラウドネス

カタナミュージック
KTNC-1 ～ 3 ／初回生産限定盤（2CD+DVD）
KTNC-4 ～ 5 ／通常盤（2CD）
12 月 29 日発売

CD1①Rising Sun -instrumental-／②OEOEO／③大和魂／④仮想現実／⑤Crazy World／⑥STAND OR FALL／⑦The Sanzu River／⑧日本の心
CD2①輝ける80's／②エメラルドの海／③天国の扉／④All will be Fine with You／⑤Fire in the Sky／⑥HUNGER for MORE／⑦The NAKIGARA／⑧Wonderland

FOR FANS OF：新旧ラウドネス・ファンすべて

我武者羅！に進化し続ける日本代表ヘヴィメタル・バンドが40年を超えて伝えたいサウンド&メッセージとは！？

我ら日本国民が世界に誇るヘヴィメタル・バンド、ラウドネス。彼らの40周年記念となる作品は、なんとダブル・アルバム。40周年を迎えて、いまだ現役バリバリ、さらに進化し続けるバンドはラウドネス以外、世界中どこを探しても見つけることはできないだろう。

そんな新作は、世界進出のきっかけとなった4thアルバム『DISILLUSION～撃剣霊化』のイメージをまといつつも、よりパワーアップしハジけまっくた感がある。それは歌詞の面にも表われており、直球過ぎて、ややもすれば恥ずかしいようなワードも臆することなくブツけてくるあたり、もう怖いものなしとお見受けした。

アレンジに関しても、これまでの歴史を楽曲の各所に散らばせていて、マニアはおもわずニヤッとしてしまうはず。何よりも驚いたのは、高崎晃の衰えないテクニックとギターへの情熱だ。齢60歳で、こんなにエネルギッシュに弾きまくるギタリストはどこにいるだろう。お世辞抜きで本当にカッコいい！（西沢文孝）

40年目にして新たな面も打ち出した新旧ラウドネスが堪能できる2枚組大作

多くの人が本作の曲タイトルや歌詞を見て驚くように、私も最初はビックリした。しかし、よくよく聴いていくと、実は非常に引き込まれる作品であることにまた驚かされた。

総指揮を取る高崎曰く“自分たちの大和魂を込めた”という本作だけに、やはりキモになる楽曲のひとつは「大和魂」だろう。レギュラー・チューニングでありながらそのリフは非常にヘヴィかつモダンであり、片や三拍子を挟む展開からは往年のアレンジも感じられるのでは。また二井原の歌唱もそのテーマの如し悲壮感を内包し、違和感はまったくなし。加えて山下のベース・ソロ、鈴木&西田のWドラムと、どこを取っても特別だ。

同じくバンドの長いキャリアを感じさせつつ、「大和魂」とはまったく違った作風なのがDisc.2の①②③。“アメリカ時代”のデモから再構築したこれらは、まさに80sであり、音楽にはこれほどしっかりと時代が刻まれるのかと驚嘆することだろう。個人的には近年作のなかで一番好きであり、よく口ずさんでいる。(岡見高秀)

『デス、マッドネス、ホラー、ディケイ』
ザ・ラーキング・フィア

ソニー／SICP-6419
発売中
FOR FANS OF：ザ・クラウン／ナザム／ブラッド・インカンテンション

1stの世界観を引き継ぎながら狂気と恐怖のシーンをさらに凝縮！

図らずも、ロック・アップとしての新作も同時期にリリースされるトーマス・リンドバーグ・レダントの、アット・ザ・ゲイツとも違うもうひとつの顔がザ・ラーキング・フィアだ。1stとなる前作と同様、今回もH.P.ラヴクラフトの世界観を持ち込んだ作風となっており、そのフォーマット自体は多くのバンドが取り入れるところではあるが、さすが各バンドの手練が揃った一団であり、彼ら独自のモノ以外のなにものでもない曲が並ぶ。

①のオープニングからして非常に陰鬱かつ緊迫感に溢れ、そこから本篇に流れる瞬間には、すでに自らの身に危機が迫っていたことをハッキリと認識させられた……そんなイメージがすぐに頭に浮かび上がるのだ。無駄に展開しないギター・リフもまた楽曲にマッチしていて、そのスリルを印象づける大きな役目を充分に果たしている。それは尺にも言え、端的に凝縮しているからこそ各シーンが鮮明になるわけで、めくるめく展開のある④でさえ、3分足らず。それでしっかりとストーリーを聴かせることができるということだ。（加藤保夫）

『アメイジング・シングス』
ドン・ブロコ

ソニー／SICX-170
発売中
FOR FANS OF：ONE OK ROCK／NOISEMAKER／デフ・ハヴァナ

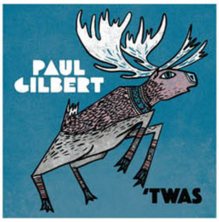
多彩なる音色でジャンルの壁を超えるUK新世代バンドの最新作が登場！

イングランド出身の新世代オルタナティブ・ロック・バンド、ドン・ブロコの3年ぶり4枚目となるニュー・アルバム『アメイジング・シングス』が発売された。

前作よりグルーヴ感のあるリフが増し、一層ヘヴィさが感じられる本作は、エレクトロ、エモ、ポップ、メタル、パンクなど多ジャンルの要素を取り入れた、音楽の無限の可能性を感じさせてくれるユニークな作品と言える。シンセ・サウンドを聴かせつつも実はヘヴィな①②⑩、ポップ・ロックにR＆Bを加えた②⑦⑨、サイケデリックな渦にハマりそうな③⑤⑫と、“次はどんなサウンドを聴かせてくれるのか？”を予想させない“ワクワクさ”が魅力的で、ぜひとも、まずは全篇通して聴いてみてほしい。

また、今回の日本版ボーナスト・トラック⑬も注目すべきポイントだ。かつて対バン経験のあるONE OK ROCKのTAKAとのコラボ曲であり、ポップとヘヴィの融合は、まさに彼らのコンセプトを完全に表現した一曲とも言える。（王彦蓉）

『トゥワズ』
ポール・ギルバート



ソニー／SICX-172
発売中
FOR FANS OF：MR.BIG／レーサーX

スーパー・ギタリストからのひと足早いクリスマス・プレゼント

ポール・ギルバートが、自身初となるクリスマス・アルバムを完成させた。クリスマス・キャロルの聴き覚えのあるメロディに、彼独自のギター・フレーズを織り交ぜた楽曲は、心温まる癒しを与えてくれるだろう。

ポールのギター・サウンドは歳を重ねるとともにレトロで優しさを感じるものとなり、プレイ内容でも落ち着いた雰囲気を全篇に渡って聴くことができるが、そこはポール・ギルバート……ふとした瞬間のテクニカルなフレーズは流石の完成度！　これらは、おそらく近年ポールが好んで使用しているマーシャルのヴィンテージ・コンボ・タイプによるもので、それをここまで弾きこなすのかと感心させられる。

また全曲スタジオ内ライヴ録音を行なっており、各ミュージシャンのやり取りや息づかいまでが感じられるアンサンブルは聴き応え、満足度ともに充分。

おな⑦⑧、そして日本版ボーナストとなる⑬はポール自身によるオリジナルになる。ぜひ日本版を手に入れたいところだ。（梶原稔広）

『トライアンフ・アンド・トラジディ』

ヒッテン

スピリチュアル／IUCP-16349
発売中

FOR FANS OF：MR.BIG／アルカトラス／ストラトヴァリウス

スペインが誇る正統派メタルの
3年ぶりのニュー・アルバム！

2011年にスペイン南部のムルシアにて結成されたヒッテンは、幾度のメンバー・チェンジを経て現在形となったが、アレックス・パンザをフロントマンとして、両翼にダニ・メセガーとジョニー・ロルカというテクニカルかつクラシカルなギタリストを据えたことで、バンドのキャリア史上、最も正統派なメロディック・メタル・サウンドを実現している。

アルバムを通して一貫して言えることは、どの曲でもギターの美しい旋律とそれに対するハーモニーを、バンド・サウンド全体で楽しめるということ。メジャー調でパワーのあるギター・リフとハイ・トーン・ヴォイスが印象的な①②から、メロウなアコースティック・ギターから始まり泣きのギターを聴かせる⑨など、オールドスクールな"型"を理解したうえで届けてくれる。

現代風のプログレッシブなヴォイシングがほとんどないからこそ、シンプルで爽快なメタル・サウンドをより感じられるので、読者には"スピーカー×爆音"で味わってほしい。（原田右恭）

『ザ・ドレッグス・オブ・ハデス』

ロック・アップ

トゥルーパー／QATE-10135
発売中

FOR FANS OF：ナパーム・デス／ブルヘリア／SxOxB

新体制となったコア系重鎮軍団
粗暴感＆躍動感はこれまで以上！

新型コロナ・ウィルスの渦中をもろともせず、ロック・アップが4年半ぶりとなる5thアルバムを完成させた。

本作では、2014年に脱退していたトーマス・リンドバーグが復帰し、前作からのシンガーであるケヴィン・シャープとのツイン・ヴォーカルとなっている。その効果は②「ヘル・ウィル・プラグ・ザ・ルインズ」（実質的な1曲目）から如実に現われており、ダブルになるパートでは、お互いが遠慮なく叫び合うという具合で、楽曲の粗暴さがよりアップしている印象。歌い分けパートでも、それぞれの個性がより際立ち緩急もつくため、このツイン・ヴォーカル・スタイルは大いに正解だと言える。

もうひとり本作からの加入となったのが、ビッグ・デストロイヤーのアダム・ジャービス（d）だ。現在はポースタルに力を注ぐ前任ニコラス・バーカーも強烈なドラミングを聴かせていたが、もちろんアダムも負けてはおらず、むしろより躍動感が加わったかのよう。これは音源以上にライヴでの変化が楽しみなのだが、それが観られるのはいつになることやら……。（岡見高秀）

『ドゥーム・クルー・インク』

ブラック・レーベル・ソサイアティ

ユニバーサル／UICY-16022
発売中

FOR FANS OF：パンテラ／アイアン・メイデン／ZZトップ

BLS、結成23年目の集大成！
熱いギター・バトルも聴きどころ！

2018年の『グリメスト・ヒッツ』の次作となる通算11作目。1998年の結成時からバンドを支えてきたツアー・クルーや世界中のファンに捧げる一枚だそうだ。

確かにザックらしい重いグルーヴのザクザクしたリフを軸とした本作の"実にBLSらしい"楽曲群には、キャリアを総括した感がある。そんな新作の最大の特徴は、随所で聴けるもうひとりのギタリスト、ダリオ・ロリーナとのギター・ソロのかけ合いだろう。基本はザック先攻ダリオ後攻で展開するのだが、両者のフレージングのセンスなどはかなり近いものがある。しかし昭和的な表現をさせてもらうなら、仮面ライダー1号＆2号の如く、基本デザイン（スタイル）が同じうえでの差異（音色とタッチのなめらかさ加減）があり、力（ザック）と技（ダリオ）の対比も浮かび上がるのが楽しい。

もうひとつ本作では、特に高音域に達する際の声質と歌い回しにクリス・コーネル風味を強く感じた。サウンドガーデンの「ブラック・ホール・サン」のカバー、BLSならけっこうカッコいいんじゃないだろうか。（杉坂功太）

『ザ・フラグメンツ・オヴ・ワンダー』
ワンダーズ

マーキー／MICP-11663
発売中

FOR FANS OF：ナイトウィッシュ／アングラ

シンフォニック・メタル・ファン必見
多彩なシンセ・プレイも注目の一枚が上陸

イタリア発の新たなシンフォニック・メタル・バンド、ワンダーズのデビュー・アルバムが日本上陸。

シンフォニック／メロディック・メタルがお好きな方々は、とにかくまずは①を聴いてみてほしい。キャッチーでインパクトのあるヴォーカルと同メロディのギター・リフから始まり、激しいドラム・プレイまで一気に楽しめる。そして楽曲終盤の転調には思わずニヤついてしまい、"これぞ！"という展開にグッとくるとともに、次トラック以降への期待が高まるのだ。

そして、シンフォニック・メタルとしての世界観により深みを出しているのが、多彩なシンセサイザーのサウンドである。本作ではプロデューサーとエンジニアを務めるボブ・カティオニスがキーボードを担当。広がりのあるストリングスやコーラス・サウンドはもちろんのこと、④冒頭のきらびやかなシンセ・サウンドや、⑨のキレのある鍵盤ソロからのプログレッシブなギターとのユニゾンなど、ぜひそのあたりにも注目して聴いてほしい。（原見理香）

『キッズ・イン・ア・ゴースト・タウン』
ネスター

マーキー／MICP-11652
発売中

FOR FANS OF：ミシャ・カルビン／ダヴィンチ

北の国から届いた
現代に蘇る80sサウンドの金字塔

北欧スウェーデンから、実にホットでメロディアスなヘヴィ・サウンドが届いた。一聴して80sをイメージさせる上質なこのハードロックは、聴けば聴くほど実に緻密なアレンジと心地よいサウンドに溢れていることが実感できる。80年代で解散し、その20数年後に再結成という経歴を持つ彼らだが、サウンドを聴く限り長いブランクを感じさせないばかりか、これからの作品にも実に期待が持てる楽曲に溢れているのだ。

再結成以前、ヴォーカルのトビアス・ガスタフソンは、地元のバンドで活動するかたわらアーティストへの楽曲提供も行なっていたようで、本作ではその経験が十二分に発揮されているのでは。クオリティはもちろん曲尺もちょうどよく、また印象に残る叙情的なメロディ・ラインは何回でも聴きたくなるもの。ほかにもトビアスとともに作曲の中心メンバーであるジョニー・ウェメンステッドのギター・プレイ＆サウンドも素晴らしく、本アルバムのハイライトになっていると言っても過言ではない。（梶原稔広）

『イン・アブセンティア・デイ～神の居ぬ間に～』
ベヒーモス

ビクター／VIZP-168 完全初回限定盤（2CD＋Blu-ray）
12月17日発売

FOR FANS OF：イモータル／モービッド・エンジェル／ヘイト

パンデミック下で行なわれた
廃教会でのライヴを完全収録！

ポーランドが誇るブラック・メタル・バンド、ベヒーモスによるライヴ・アルバム。パンデミックを逆手に取ってストリーミングだからこそ可能なステージを実現し、ライヴ作品としてリリースするという動きが活発化しているが、本作もそんななかの一枚。

"神が不在のときに"という意味のタイトルを持つ本作は、その名のとおり、ポーランドにある廃墟となった教会でのライヴを完全収録。1995年のデビュー・アルバムから昨年の最新EP収録曲まで、四半世紀に渡る彼らのキャリアを満遍なく包括したセットになっている。ピュア・ブラックからデス・メタル寄りのアプローチと、それなりにスタイルを変えてきたベヒーモスだが、横並びで聴いてみると、一切の違和感がないのもおもしろい。スタジオ作も超高音質を誇る彼らだが、本作もクリアかつパワフルで非常に聴きやすい。

特殊なシチュエーションも本ライヴの重要な要素なので、映像が観られるBlu-ray付きの初回生産限定盤が断然オススメ。（川嶋未来／SIGH）

『オリジン』
オムニアム・ギャザラム

ソニー／SICP-6428
12月22日発売

FOR FANS OF：インソムニウム／カルマー／ダーク・トランキリティ

フィンランドのベテランが到達した 北欧的哀愁＋80年代のAORという新境地！

フィンランドのベテラン・メロディック・デス・メタル・バンドの9枚目。もともとメンバー・チェンジの多い彼らだが、今回もベースとドラムが変わっている。

メロデスというと北欧のお家芸であり、暗く長い冬を思い起こさせる音楽であるが、最近のオムニアム・ギャザラムは、そんなステレオ・タイプのイメージから故意に距離を置こうとしているのは明らか。何しろこの作品について"サバイバーを聴きながら、太陽が降り注ぐマイアミの海岸をコルヴェットで飛ばしているヴァイブがある"と言い切るほど。マルコス・ヴァンハラによるクリーン・ヴォーカルを大々的にフィーチャーし、さらにはアメリカンな明るいコーラスまで飛び出す本作は、80年代のAORの要素を吸収し、聴きやすさの限りを追求した作品だ。やり尽くされた感のあるメロデスだが、いまだ新境地はありうるのだと感心させられる。

ミックスはイェンス・ボグレン。日本版ボーナス・トラックの⑩は、何とインフェクティッド・マッシュルームのカバー！ （川嶋未来／SIGH）

Best

新たなスタートにつなげるように…… ザ・ベスト・オブLOVEBITES

現在は活動休止中であるLOVEBITESの、2017年のデビュー以来の楽曲を、ファン投票でセレクトした初のベスト作品が発売となる。注目すべきは、先に脱退したmiho(b)が在籍中にレコーディングをしていた新曲「ネームレス・ウォリアー」の収録だ。非常に彼女たちらしいスピード・メタル・チューンで、ファンにとっては貴重な一曲になるだろう。

[スタンダード・エディション]にはそれらのミュージック・ビデオが付属し、盛りだくさんの内容になっている。また全曲分のインストゥルメンタル・バージョンを収録する[デラックス・エディション]、ジューダス・プリーストの名曲「ペインキラー」のカバーを収めた[アルティメット・エディション]とバリエーション豊かだが、どれを選ぼうとLOVEBITESのサウンドを網羅できることに間違いはない。

『イン・ザ・ビギニング ～ザ・ベスト・オブ・2017-2021』

ビクター／VIZL-1985
(4CD＋Blu-ray／デラックス・エディション)
12月22日発売

Movie

農場だからこそ自由な音楽が生まれた Welcome to伝説の音楽スタジオ！

ブラック・サバスの大名盤『パラノイド』を知らない人はいないだろう。この名作が誕生した場所こそ、ここ、ウェールズ郊外の農場のなかにある音楽スタジオ[ロックフィールド]だ。そんな伝説の音楽スタジオに関わる物語が、この度映画化された。

ブラック・サバスを始め、ホークウインド、レッド・ツェッペリン、クイーン、コールドプレイなど、多ジャンルの世界的アーティストたちが語るロックフィールドでの思い出、スタジオの創立者の回想、そして数々の貴重な歴史的映像と写真などがすべて本作に濃縮されている。そんな贅沢な内容なだけに、96分間の上映時間はあっという間に終わってしまう。ジャンルに固執することなく、音楽を愛する人々には、ぜひ映画館で観てほしい。

◎2022年1月28日(金)より、[新宿シネマカリテ]、[ヒューマントラストシネマ渋谷]、[アップリンク吉祥寺]ほかにて全国順次公開。

『ロックフィールド 伝説の音楽スタジオ』

© 2020 le le Rockfield Productions Ltd.
r ockfield movie.com

試奏・文：梶原稔広
東京都出身、ALHAMBRAのギタリスト。数々のレコーディング、ライヴ・サポートを行ない、MI TOKYOにて後進の指導にも携わる。楽器メーカーの商品開発やデモ演奏のほか、ギタリスト向け教則本も執筆。
写真：鈴木千佳

IBANEZ

ENTIRELY NEW HEADLESS EXPERIENCE - Q (QUEST) SERIES
QX527PB-ABS

価格：175,890円（税込）

Specifications

ボディ：ポプラ・バール（トップ）、ニャトー（バック）
ネック：ローステッド・メイプル、ブビンガ（5ピース）
指板：ローステッド・バーズアイ・メイプル
フレット数：24
ピックアップ：Q58-7（H）×2
コントロール：ヴォリューム、トーン、アルター・スイッチ、5ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：オリジナル・モノ・チューン
カラー：アンティーク・ブラウン・ステンド
付属品：専用ギグ・バッグ

ヘッドレス・ギターの新たなスタンダードとなりえる逸品

アイバニーズから、ヘッドレス仕様の新たなギター“Q”が発表された。今回紹介するのは見た目もスタイリッシュな7弦タイプである。

まず目がいくのは、なんと言っても斜めに打たれた“スラント・フレット”だろう。これは同社が現代のテクニカル・ギタリストに送るアイディアで、特にギターを高く構えたとき、指の傾きにフィットするように演奏性を高めてくれるというもの。

ヘッドレス構造やボディ・デザインの恩恵でかなりの軽量なのだが、肝心のサウンドは軽くならず、いい意味でコシのあるタイトな出力が得られる。本器は使用ジャンルを限定せずに設計をしたとのことだが、このソリッドな音色は歪み量とともに膨らんでくる余分な低音成分をうまくコントロールしてくれるので、メタル・サウンドにとっても大変喜ばしいものだと言えるだろう。専用ピックアップもパワーは充分で、マーシャル・アンプ単体でもしっかりとした歪みサウンドを作ることができた。

軽量かつ小ぶりなボディと相まって疲れを最小限に抑えられるので、その分派手なアクションにも体力が使えそう（笑）。

▲スラント（傾斜）しているフレット。高く構えネックが斜めになった状態でのテクニカル・プレイで本領発揮！

●問い合わせ：星野楽器販売
☎0561-89-6900
Ⓒhttps://www.ibanez.com/jp/

KILLER GUITARS

KG-PRIME 21 THE SPIRIT

価格：オープン・プライス

Specifications

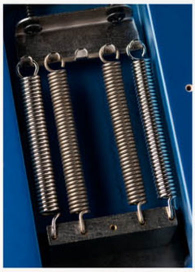
ボディ：アルダー（トップ）、メイプル（バック）
ネック：メイプル
指板：メイプル
フレット数：22
ピックアップ：セイモア・ダンカン製THUNDER IN THE EAST ×2
コントロール：ヴォリューム、ピックアップ・セレクター、ダイレクト・スイッチ
ブリッジ：フロイド・ローズ・オリジナル
カラー：マット・ブルー・メタリック
付属品：専用ハード・ケース

高崎晃のサウンドを具体化する最新シグネイチャー

高崎晃モデルの最上位機種となるプライムが、新たな装いで発売された。セイモア・ダンカン・カスタムショップ製の新ピックアップを搭載し、サウンドと演奏性のバランスはさらに向上していると感じさせる一本だ。

本モデルはペイントされているためわかりにくいが、ボディはアルダーとメイプルのラミネイト構造となっている。メイプルのタイトだが引き締まったローにアルダーの豊かなミドル成分が絶妙に融合し、単体発売のない本人仕様のピックアップとのコンビネーションで、全帯域がバランス良く出力される印象。アンプやエフェクターなどで多彩なメタル・サウンドが作り込めるだろう。そのピックアップ自体は決してハイ・パワーではないが、氏のピッキング・タッチを遺憾なく発揮できる仕様となっている点も注目したい。

木地着色のネックは手触りもよく、単音弾きからコード弾きまでストレスのないフィンガリングを約束してくれる。これも高崎スタイルを具現化する大きなポイントだろう。サテン・フィニッシュのボディもフィット感が抜群で、座っての演奏でも活躍してくれそうだ。



◀トレモロ・スプリングには、シンクロ用とフロイド・ローズ用を併用。隠れた箇所にもミュージシャン・モデルならではのこだわりが見える。

●問い合わせ：キラーギターズ株式会社
◎https://www.killer.jp

BLACKSTAR

DEPT.10 BOOST (左下)
価格：29,700円（税込）

DEPT.10 DUAL DRIVE (右下)
価格：46,200円（税込）

DEPT.10 DUAL DISTORTION (右上)
価格：46,200円（税込）

●問い合わせ：コルグ／KID お客様相談窓口
☎0570-666-569
◎https://blackstaramps.com/dept10/

Specifications
コントロール：［Ch1］ゲイン、レベル、CL／CRスイッチ　［Ch2］ゲイン、レベル、OD1／OD2スイッチ
［共通］ベース、ミドル、トレブル、ISF、Cab Rigスイッチ、フット・スイッチ×2
入出力端子：インプット、アウトプット、Cab Rig、センド、リターン、ライン・アウト（XLR）、USB
外形寸法：155（W）×115（D）×50（H）mm　**質量**：640g　**電源**：付属

Specifications
コントロール：ブースト、ロー、ハイ、フット・スイッチ
入出力端子：インプット、アウトプット
外形寸法：75（W）×115（D）×50（H）mm　**質量**：340g　**電源**：付属

Specifications
コントロール：［Ch1］ゲイン、レベル、CL／CRスイッチ　［Ch2］ゲイン、レベル、CR／ODスイッチ
［共通］ベース、ミドル、トレブル、ISF、Cab Rigスイッチ、フット・スイッチ×2
入出力端子：インプット、アウトプット、Cab Rig、センド、リターン、ライン・アウト（XLR）、USB
外形寸法：155（W）×115（D）×50（H）mm　**質量**：640g　**電源**：付属

チューブ仕様のビンテージ・モダン・ペダル軍団！

以前にも真空管（ECC83／12AX7）を使用したペダルをリリースしてきたブラックスターだが、今回の３機種はデザイン&サウンドを一新。共通して、軽量かつ必要最小限のコントロール類がとても扱いやすく、またフット・スイッチのクリック・ノイズがないのにも驚かせられた。

ブースターの［DEPT.10 BOOST］は２バンドEQを備え、常にオンにしておきたくなる実践向きなサウンドを持つ。またアンプへのプッシュという使い方でさらなるゲイン・アップを可能にしており、アンプ単体では難しい倍音成分が多い歪みサウンドもスムーズに構築できる。

オーバードライブ［DEPT.10 DUAL DRIVE］はナチュラルなクランチ～LAメタル・ライクな歪みまでを網羅、ディストーション［DEPT.10 DUAL DISTORTION］はその延長線上の歪みを提供してくれるので速弾き系もにグッドだ。通常歪みが増えると音圧が薄くなりがちだが、両機とも存在感のあるアンプ・ライクな出音を提供してくれる。通常のEQに加え独自のISFコントロールで、さらに突っ込んだ歪みを創作可能なうえ、各チャンネルのミニ・スイッチにより多種多様な音色を作ることができた。

また両モデルはCab Rigを搭載しているので、レコーディングはもちろん、ライヴにおいてもジックリ作り込んだサウンドを直接ミキサーに送ることができる。

METAL HAMMER JAPAN
メタルハマー・ジャパン Vol.8

Rittor Music Mook

電子版　2022 年 1 月 1 日　第 1 版発行
（底本　2022 年 1 月 1 日発行　第 1 版 1 刷）

【発行所】
株式会社リットーミュージック
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一丁目 105 番地
https://www.rittor-music.co.jp/

発行人　松本大輔
編集人　野口広之

【本書に関するお問い合わせ先】
info@rittor-music.co.jp
本書の内容に関するご質問は、Eメールのみでお受けしております。メールの件名に『メタルハマー・ジャパン Vol.8（電子版）』と記載してお送りください。ご質問の内容によりましては、しばらく時間をいただくことがございます。なお、電話や FAX、郵便でのご連絡、本書記載内容の範囲を超えるご質問につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

編集長
岡見高秀

編集スタッフ
王 彦蓉

海外渉外担当
平井 潤

表紙デザイン
村藤 治（RAD）

デザイナー
山田直登（株式会社ナックスタイル）
辻井 知（Design Works SOMEHOW）
石原崇子

電子版制作　大日本印刷株式会社

©2021 Rittor Music, Inc.

＊本書記事／写真／図版などの無断転載・複製は固くお断りします。
＊この電子書籍は固定レイアウト形式で作成されています。
　文字の拡大・縮小や、検索、ハイライトなどの機能は利用できません。
＊電子版は紙版とは異なる部分があることをご了承ください。

▲千葉魂に挟まれる神奈川魂！　誌面に載せられない話しも多かった……!?

METAL HAMMER　FUTURE

本書の記事は、Future plc グループ企業である Future Publishing Limited, UK 1983 が著作権を保有またはライセンスを受けている Metal Hammer から翻訳または複製されています。 Metal Hammer は Future Publishing Limited の商標またはライセンスを受けているものです。Used under license. All rights reserved.
　Future plc グループが発行する本雑誌およびその他の雑誌の詳細については、http://www.futureplc.com へアクセスください。

METAL HAMMER
JAPAN
MOTOR
HARLEY-DAVIDSON
CYCLES

METAL
HAMMER
JAPAN